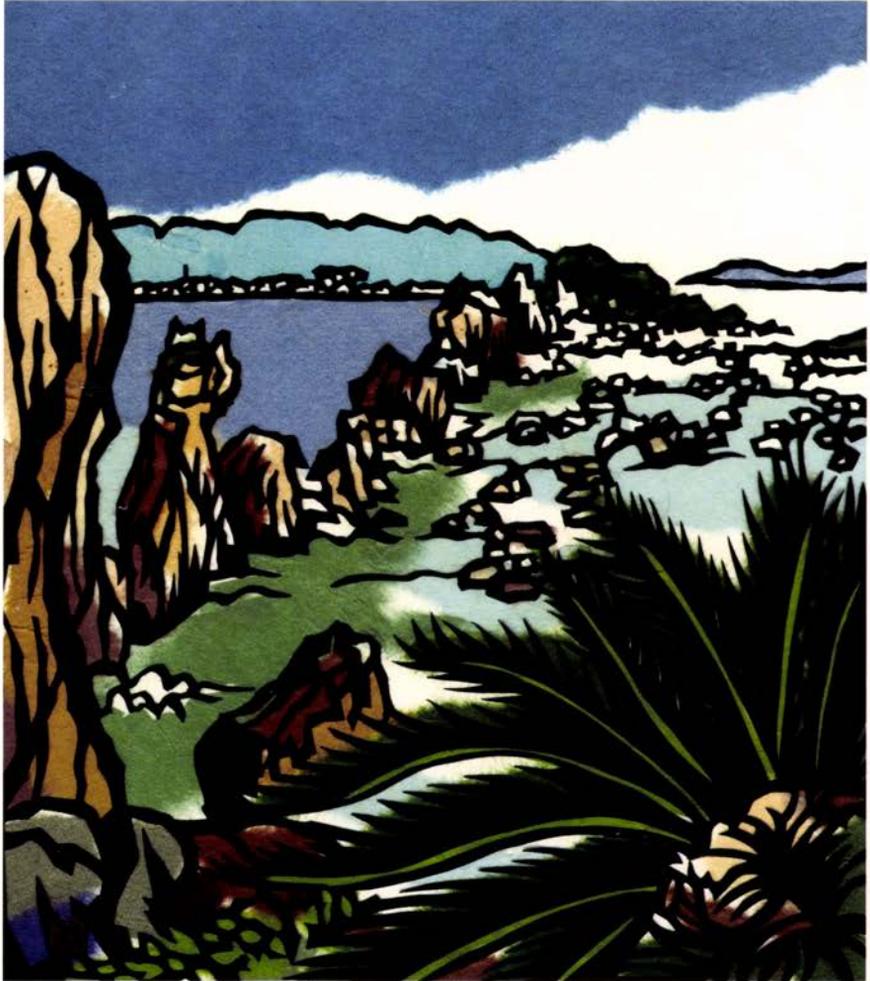


川柳塔



昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十四年七月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇二二号

日川協加盟

No. 1022

七月号

― 路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷り込み用紙で ―

- ① 川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。
- ② 平成23年9月号から平成24年8月号までの入選句（自分の句を出句する）
- ③ 8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書き8月10日必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に
誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いないようお願いいたします。

「檸檬抄」課題

森山盛桜・奥田みつ子 共選

発表	月	課題	締め切り日
24年	9月	継ぐ	7月15日
	10月	限界	8月15日
	11月	組む	9月15日
	12月	ガ一ド	10月15日
25年	1月	気持ち	11月15日
	2月	奇妙	12月15日
	3月	浅い	1月15日
	4月	習う	2月15日
	5月	同じ	3月15日
	6月	リサイクル	4月15日
	7月	常識	5月15日
	8月	拭く	6月15日

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄 西出楓楽

檸檬抄

森山盛桜
奥田みつ子）共選

川柳塔社

選者は36人

小島 蘭 幸

古い柳誌を読んでいると、ふうつと各地の句会、大会に出席した時の風景や、懐かしい柳友の顔が次々と走馬灯のように浮かんでくることがあります。

昭和41年1月に広島の頼山陽文徳殿で開催された第16回新年交歓36題川柳大会は、その中でも忘れられない大会の一つです。

竹原から広島まで呉線の電車に乗ってコトコトコトコト、遠足気分で開催した私にとつて、大会場は異様な光景だったのをはつきり覚えています。ピーンと張りつめた空気の中、聞こえてくるのは句箋に清記する音のみ、真剣勝負の顔、顔、顔がそこにあつたのです。「これは大変なところに来てしまったぞ」というのが、17歳の私の正直な気持ちでした。

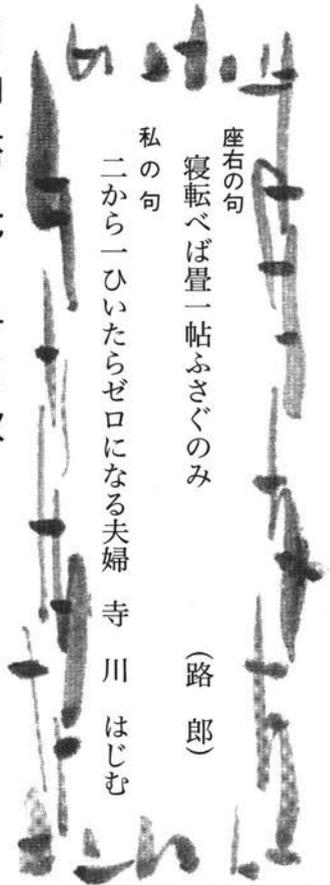
課題36、出句数各2句、合計72句。清記するだけでも大変だったのです。出席された柳人は皆、「アイツには負けない」「ライバルには負けたくない」「絶

対一位になる」という強い気持ちで作句されてきました。正に情熱と情熱がぶつかり合つて火花散るという光景だったのです。競い合つてお互いに成長する、そういう大会でした。

選者は当日の出席者の中から指名され、課題と共に一斉に壇上に掲示されました。入選句は18句でした。私がこの大会で初めて選者の指名を受けたのは、第18回大会、川柳塔社同人になったばかりの19歳でした。今、ひとり静かに36題大会を回想すると「川柳は作句も、選句も、披講も、そして入選句を聞くことも大切なんだよ」と天の声が聞こえてくるようです。

昭和25年に創設された36題大会、最初の出句数は各題3句だったそうです。出句数の合計は一〇八句、除夜の鐘のように百八煩惱を除く意味が込められていたのでしょうか。

それにしても36題一〇八句に挑戦という先人の熱い情熱には頭が下がるばかりです。ここまで書いて私は、36題大会は単なる競吟の場ではなくて、若い川柳人を育てるという意味合いが大きかったのではないか、と思うのです。出席者の約半数、36人の選者はとても壮観でした。



座右の句
私の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

(路郎)

二から一ひいたらゼロになる夫婦 寺川 はじむ

川柳塔 七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「橋杭岩」

■巻頭言 選者は36人	小島 蘭 幸	(1)
融通	都 倉 求 芽	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 ^⑨	木津 川 計	(46)
新川柳鑑賞 ^⑤	麻生 路 郎	(47)
自選集		(48)
温故知新		(51)
水煙抄	川上 大 輪 選	(52)
中島生々庵句抄		(72)
英語 de Senryu ^⑦	吉村 侑 久 代	(73)
路郎忌に寄せる 川柳と俳句	小池 正 博	(74)
「麻生路郎読本」を音訳して	岩崎 千 佐 子	(78)
■エッセー「麻生路郎読本」を読む会	古今 堂 蕉 子	(80)
民族の詩 ⁽²⁾	三 好 専 平	(81)
誹風柳多留 一篇研究 ⁸³		(82)
愛染帖	新 家 完 司 選	(84)

融 通

都 倉 求 芽

5月に入ってからにわかに夏の電力問題がやかましくなってきた。特に関西電力が、大飯原発を稼働させないと電力不足で計画停電する可能性を、強く訴えている。

その不足分を他の電力会社から融通を受けることを前提としているのだが、その割合が14・9%だったりが替ると20%近くになったりまことに怪しい。それはそれで問題になったりするわけだが、ここではその辺は横に置いて。

新仮名遣いでは読み方を発音どおりに基本としている。「てふてふ」を「ちようちよう」に、「じゃうじゃう(情状)」を「じようじよう」に、「化」「科」は「くわ」「か」に「ふ」「ひ」等の送り仮名は「う」「い」に等。

また同じような発音でも歴史的仮名遣いを加味して、大阪(おほさか↓おおさか)、近江(あふみ↓おうみ)、扇(あふぎ↓おうぎ)となる。

檸檬抄「調理器具」	富士慕情・池	森子共選	……	(88)
■句集鑑賞「夢」松山芳生著	木本朱夏	……	(91)	
一路集	兩川無限選	……	(92)	
「荷物」	瀬戸まさよ選	……	(92)	
「あやうい」	黒田能子選	……	(93)	
「ボンボン」	鈴木公弘	……	(94)	
初歩教室「ブレンド」	竹治ちかし	……	(96)	
秀句鑑賞「同人吟」	山田耕治	……	(98)	
「水煙抄」	新家完司	……	(99)	
せんりゆう飛行船 ^⑨	岩佐ダン吉	……	(100)	
地車の街に川柳の風を	片山かずお	……	(101)	
ありがとう井伊東吉さん	高瀬霜石	……	(102)	
追悼 乙倉武史さんを偲ぶ	松永浩一	……	(103)	
津軽発おもしろ景色 ^⑩	……	……	(104)	
本所深川を歩く (六)	……	……	(108)	
六月本社句会	……	……	(122)	
各地柳壇(佳句地十選/中村金祥)	……	……	(124)	
七月各地句会案内	……	……	(154)	
柳界展望	朱夏・能子	……	(154)	
■編集後記(ひとこと/澤井敏治)	……	……		

座右の句

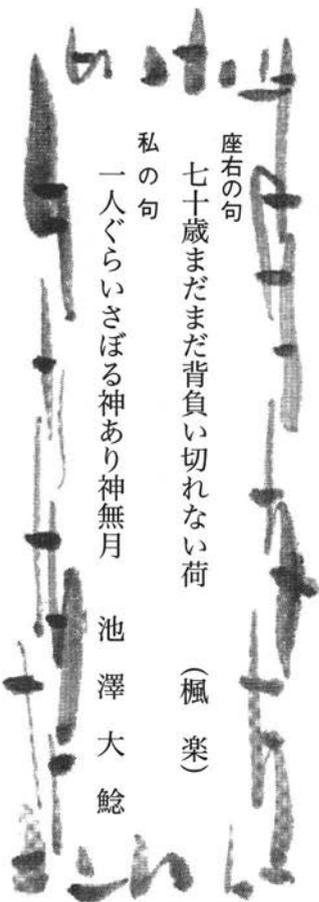
七十歳まだまだ背負い切れない荷

(楓 楽)

私の句

一人ぐらいいさばる神あり神無月

池澤大鯨



漢字では、本来一字では濁らない字が二語連続(熟語等)となるため、濁る場合がある。宮津(みやづ)、横綱(よこづな)、海釣り(うみづり)等。この場合は元の仮名にそのまま濁点をつける。以上のような場合はいずれも一定の基準に基づく定義がある。

そこで問題は、だから「融通」もこの法則からいけば「ゆうづう」でなければいけない筈だが、これが何故か「ゆうずう」なのである。「ゆうづう」で辞書を引いても載ってない。何か特別な約束ごとでもあるのか、これが当然なのか、勉強不足にして聞いたことがない。「通」が下になる熟語はいくらでもあるが、すべて「つう」である。「ずう」と発音するのはこの「融通」だけである。だから「ゆうずう」なのだ、と言われればそうかも知れないが、どこか割り切れないものを感じる。しかしそこが融通なのかも。

振り仮名と同じように電力もすんなり融通してもらって、安心して夏を乗りきっていきたい。暑がりの私は特にクーラーが頼りなのだから。

川柳塔

小島蘭幸選

松山市 高橋宏臣

少し背をのびして今日は父である
鏡のない部屋が素直にしてくれる
歩き続けて春の夢より抜け切れず
闇冴えてマルサス論者一人増え
体内の地雷を踏んで一老人
死の翳を宿すゴッホの鳥の群

堺市 栗原道夫

体内に芽吹くものあり木の芽和え
豆を煮る快心の笑み浮かべつつ
藤棚に来て藤棚を去る無口
少し自惚れて扇子を胸に挿す
ケータイで確認し合ううすなさけ
父と来た港は過去の音ばかり

橿原市 居谷真理子

満開の今日を忌日と選びしか
やがてその緑は棚田呑むだろう
ケータイに軽い私がぶらさがる

約束を破る涼しい音がする

新しい君になるまで泣きなさい
手羽先にちよつぱり大空の記憶

和歌山市 木本朱夏

行く春の金柑ジャムのほろ苦さ
連弾の姉とおとうと息合わず

春の夜の眠るに惜しき花の色
野茨のすこし黄ばんだ白も好き

野遊びの少女に還るクローバー
子には子の暮らしがあつて菖蒲咲く

和歌山市 古久保和子

辞書にない言葉に脳がショートする

ブロッコリーのグーはマヨネーズで齧る
キャッシュカードの磁気も弱つてきたらしい
砂利道は足に気合をかけながら

今日の予定にマニキュアは欠かせない
クレーンもキリンの首も夕焼ける

和歌山市 牛尾 緑 良

交差点絆なんかは落ちてない
身繕い一日ひとつずつ済ます

邪心など無いので竹とんぼは空へ

菩提樹に何か記憶があるような

父が来たカミナリ雲に乗って来た

非常口 昭和の友に続いてる

弘前市 高瀬 霜 石

見とれてしまうライバルの力瘤

懐の深さ握手で推理する

新幹線に食い荒らされてゆく夜汽車

駅弁に試行錯誤の跡がある

松竹梅考えぬいたすえの梅

止まらない海老センベイも悪口も

藤井寺市 太田 扶美代

裏道を行けばひよっこり遇う善意

蛍火ほどの恋ならわたくしも少し

産んだ子の数だけはある玉手箱

空が青いぐらいではもう弾めない

チューリップ話相手を選ばない

経験はゼロで始めたボランテニア

尼崎市 長浜 美 籠

手文庫の中にキラキラした昔

うまいっは五臓六腑の叫びだろ

沖繩の気骨ガジュマル葉が繁る

転居の友握手した手を離さない

軌道修正しようか月が冴えている

おばちゃんもドウジョとくれたラムネ菓子

河内長野市 山岡 富美子

ノックする風もわたしもひと恋し

地球にも重量税を払わねば

すこし距離おきたい金という魔物

煽ったらノンアルコールドでも奔る

埋まらないままのピースが一つある

ぴっかぴかの防災服の視察です

島根県 伊藤 寿 美

裏返す枕の下の風を聞く

稜線を越えて渡ってきた手紙

独居八年慣れて頑固なやせ蛙

やまなみの雲が晴れたら山頭火

花の下脱原発の署名する

陸前の一本松というメモリー

鳥取市 倉益 一 瑠

四角四面恋のかたちはわたし流

カリスマで少々毒を持つている

母からのメールでしようか流れ星

日向ぼこ風と問答して暮れる

花の芯意外と強いものを持ち

耳に蓋してわたくしは卑怯者

吹田市 山本 希久子

感謝感激礼状に礼を書く

一朝一夕センス磨けないままに

曲がり角二つ曲つてふつ切れる

人という二劃の文字が複雑だ

真ん中に孫バランスとつている二人

私が抜け殻となる午後十時

寝屋川市 籠島 恵子

先頭を切つて拍手をしてあげる

五線譜を駆け下りている五月闇

うろうろとしている内にピンチ去り

おつとりの口調がみなをだまらせる

静観をしすぎて日常になつた

インプットされてしまつた癖ひとつ

河内長野市 村上 直樹

蛞蝓の纏いつくよう二日酔

酒減らせ歩けとうちの勝手手連

誤解溶けすとんお腹がすいてきた

友の訃を機に家の処理墓のこと

ときどきはピフテキ食つて卒寿越え

一夜明けウグイス愛でて仲直り

倉吉市 牧野 芳光

着信のないケータイも放さない

美しい人は歩かぬ昼下り

思ひ出という財産が増えていく

日本よ君の背骨はどこにある

旗揚げることに理屈つけている

じつくりと見ると不思議な顔がある

鳥取市 岸本 宏章

甘くみたグラウンドゴルフして疲れ

運転者の人柄を見る後部席

調子いいはなしの詰めが甘くなる

ヨッコラショ口でスイッチ入れて立つ

自堕落な暮らしを隠す癖もある

取り巻きが代われれば北も変わりそう

神戸市 山崎 武彦

子の無口少し世間がわかりかけ

老骨に鞭打っている万歩計

思慕ひとつ亡父の拳骨よく効いた

愛の唄溢れて愛に飢えている

五十年即かず離れず逆らわず

ベアルックただの友達とは不思議

榎原市 安土 理恵

産毛そろえてまだ期待するものがある

いたずらな風は可愛い風でした

めいめいに責任散つていく綿毛

孵化らしい葉裏に光るものがある

裏側の生活臭にほっとする

処方箋少しは楽になれますか

川西市 西内朋月

どつちみち真つすぐ家に帰らない

花粉症の時事には困る鼻ピアス

退屈を消してくれないサスペンス

割り勘で乾杯してるウーロン茶

残すもの何もないけど書く遺言

腹が立つ時に役立つ欠け茶碗

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

カーネーション素直な母の顔で受け

牡丹芍薬炎の時は短くて

あの人の答が届く五月晴れ

オルゴール妻の小さな遊園地

ハイウェイの視野に夕陽と山つつじ

万緑と響き合ってるスニーカー

高槻市 島田 千鶴子

うの花の垣根に夏が訪れる

渋滞を避けて青田の道を行く

里山をやさしく包む五月雨

今日開くページは今日の物語

天保山登る私も山ガール

マンネリのゴーヤに託す夏のエコ

大阪市 板東 倫子

淋しさは梅も桜も散ってから

花よりも団子どころかバーベキュー

生来のケチで断捨離出来ません

ロボットに優しく介護される夢
恨みごと言いたくなくなってくる仏間
百年を生きても消えぬ好奇心

富田林市 中井 アキ

芍薬も愛も重たくなってくる

嫁の掌のひとつの駒になつている

このままで良い訳がない顔洗う

どんどんと綺麗になつて妻の乱

明日こそ言わねばならぬ有難う

背中から呼びかけられた日の火照り

高知市 小川 てるみ

天寿全う思い残しは何もない

百三歳 母は菩薩の顔に似る

華やかな葬儀白鳩放たれる

磨いても心が晴れてこぬ鏡

まつ青な海が私を呼んでいる

ふる里の太鼓が耳にまだ残る

高槻市 安田 忠子

席変えていつもと違う景色見る

自治会の役して近所よく分かり

鯉のぼりの絵手紙もらい笑みもらう

異常無し勇氣百倍飛び歩く

同じ事故次から次と出る不思議

黄泉の住処桜の下と決めている

96億ムンクのひと叫び

松山市 古手川 光

東電の三波春夫のあの台詞

カタカナの言葉に疎くなつて冬

人間のマナーを嗤っている野性

西方浄土わたしも行ける俱会一処

松山市 宮尾 みのり

不特定多数へ配慮する疑似餌

平凡なアヒル白鳥にはなれず

発泡酒で腹の内まで見抜けない

真実と違つた色を持つ記憶

胃の壁に消化しきれぬ痕がある

大洲市 中居 善信

空き缶を拾う不埒な人達だ

妻と二人の時間を無駄にしていない

打ち合いになれば負けない血の巡り

二十八センチの靴で来たのは末の孫

早植の田植えもすんだ老いの野良

西予市 黒田 茂代

春うらら遊び上手なポピーたち

年中風八丈島は風の島

一面フリージア八丈の花祭り

一枚欲しかった本場の黄八丈

悪い人は居ぬを実感島の旅

ビール持つ手に挨拶がまだ続き

重箱の隅で与野党闘ぎ合い

幸せを計るスケールみな違い

晩酌の肴録画の時代劇

SLが古武士のごとく野を駆ける

札幌市 小沢 淳

断りが上手な人だ苦勞人

熟慮から発酵できず干涸びる

人間の匂いが好きで声かける

あなた次第水は氷に湯にもなる

世の中に無駄なものなしこの僕も

砂川市 大橋 政良

この指輪語れば長い私小説

デモのない街の空気は冷えている

私の過去がらくたを拾い出す

歳月を積んで積まれて泣き笑い

年金で死なぬ程度に食べている

弘前市 富士 慕情

日本一の桜が背負う使命感

満開の桜に会えぬバスツアー

春爛漫召される花も咲く花も

咲き切つて悔いは残さぬ花吹雪

北上のさくら海峡飛ぶ構え

来し方を桜と共に振り返る

弘前市 岡本花匠

倒木の桜植樹で花笑い

桜トンネル人を呼び込む花ごころ

林檎公園 楽園浄土かもしれぬ

二度咲きのつつじ笑わせ千の風

弘前市 今 愁 女

梅もも桜いち度に咲いて北の春

停電値上げ楯に原発ゆるすまじ

太陽光元手がかかる電気料

原発廃止少し原始に暮し向き

平均寿命からを余生とすることに

弘前市 高橋洋子

肩書きが取れて存分羽ばたける

羽伸ばすために足腰鍛えてる

年金受給あと一年の長いこと

生真面目で年がら年中スランプに

小細工をしたから尻尾つかまれる

弘前市 稲見則彦

ティータイム午後の一時バツハ聴く

よく笑う膝と仲良くする散歩

妻の留守四合瓶を絞り取る

閉会を告げる言葉に場が白け

履歴書に書けない僕の反抗期

原発は嫌 昔の薪に戻っても

錆止めにデイサービスへ行く日課

拾いたい藁一本に放射能

三食が白いごはんの幸である

バイキング腹八分目にしておかず

弘前市 須郷井蛙

さびしくて張ってしまつた「貸間有り」

葉桜の下で延々乳母車

つばめ来て真理のごとく巢を直す

反転のつばめに老が見蕩れ居る

きつぱりと断わり訳は妻が言う

黒石市 相馬一花

美食には慣れて粗食で開眼す

ヨーガから学ぶいのちの呼吸法

義理堅く風邪もいたたく我がハート

大物は油断めさるな下剋上

創作をせずに真似する手長猿

平川市 小寺花峯

極楽を見たさに泳ぐ茨道

我が家にも海があります青蛙

たんぽぽが咲いているから近道だ

究極の見方を知らぬピカソの絵

乗り継ぎの出口わからず紙芝居

青森県 松山芳生

雑草だつてウツを抱いて生きている
逢いにゆく白い手袋しのばせて
爪研いで猫が謀叛を企てる
軽々と屋根に上つた後の不覚
温もりをおまけにくれる朝の市

さいたま市 星野育子

三面記事にこの街のエピソード
CMもセンス良ければ見たくなる
介護施設に多いカタカナ語
七七忌あの日と同じ千の風
川柳で喜怒哀楽の禅問答

東京都 岸野あやめ

褒められていい子のふりをする子供
淋しさに負けては要らぬものを買う
老婆心ジョークで逃げることもある
冗談じゃないよと納税者の本音
赦されよ匂い袋の自己愛を

横浜市 菊地政勝

努力より血のつながりを誉められる
変身の願望を待つ試着室
買物の母に付き添いお相伴
散骨は桜の下と遺言書
小走りで切り回してる妻と住む

横浜市 小野句多留

注いでやる俺にも注げという酒を
GWの句材は家にとじこもり
百歳の笑顔静かに幕を閉じ(恩師死去)
御同輩スマホでなにを知りたいの
解散と言わぬ共倒れの予感

川崎市 三浦きぬ

七転び八起きそのあと転ぶなよ
駅弁の美味しい北の被災地よ
髪型が素的中味はどんな女
未だ生きていますと友にメールする
私にも耳打ちしてよ刺激欲し

富山市 島ひかる

花衣一期一会の席に酔う
傾いた会社を救う福竹茶
植樹した山の手入れがままならぬ
豪雪に押しつぶされた山の家
誰も見ぬ山に移植の花盛り

静岡県 蘭田 猿 杓

トンボ群れ休耕田を撫でて翔び
原発と向き合っている蓮華草
姐の刻むリズムの母の朝
ふる里の隧道電気がついてない
山焼きの匂い車内にローカル線

可児市 板山 まみ子

なるようになるのは不滿意地もある

あなたとは何時もいたいのにチョコレート

建前で生きて人生大赤字

今日はパリ明日はメキシコテレビ旅

営業の笑顔たちまちな素に戻り

犬山市 金子 美千代

潮干狩山菜採りと春多忙

土作りから菜園に気合い入れ

玄関に幸せそうな花の数

品格を試されたようハブニング

風神雷神ブツツン切れた八つ当り

犬山市 関本 かつ子

ケイタイと睨めっこする付けまつ毛

西暦に計算ばかりさせられる

チューリップ皆にあげたい花鉢

マイナスも消える気立ての良い娘

柏餅供えるだけの子供の日

犬山市 吉田 幸子

とびきりの荀春を配ってる

異常なし晴れても老いの腰が萎え

容赦なく竜巻圍へ落とし入れ

いい加減に過ぎたバカな日を悔やむ

日焼けより好きな友との潮干狩り

愛知県 早川 遯行

どこでも気楽に酔える発泡酒

試飲酒へ下戸も付き合うバスツアー

電柱が地下に潜った観光地

足並が乱れ始めた八合目

植え替えの手間も楽しい花芽時

京都市 高島 啓子

ひらにひらにと回診医が通る

平熱が高くて転び癖がある

青信号渡りきれないおばあさん

定位置において安心させる鍋

江戸っ子の血筋で諦めが速い

京都市 藤井 文代

花粉症の鼻に刺激と草を刈る

妻の愚痴涙で聞ける花粉症

歩きなれた道も新鮮病み上がり

放射能に効く農薬はありません

散らばった記憶たぐってポケ防止

京都市 三宅 満子

届きそうで夢にいつでも逃げられる

里山に楚々と桜の息づかい

増税分パパの小遣いまたダウン

誰にでも特技があるなバイキング

大臣がカンペを見ても間違える

京都市 坪井孝一

古い本アンダーライン懐かしむ

夾竹桃ボクの青春眺めてた

折にふれ青い山脈口遊ぶ

焦つても誤解とくネジ回らない

深刻な話いやがる発泡酒

京都市 榎本宏子

無意識に花時計追う待ちぼうけ

青いバラ ルール違反をほくそ笑む

見えぬものこのころ教えるばあば役

カレー談義レトリトばかり幅きかす

親離れのチャンス気づかぬまま大人

亀岡市 井上森生

衣食住昭和育ちは満足す

天地の叫ぶムンクが値を上げた

手と足の指で元気になる魔法(指体操の不思議)

健やかな自己催眠で日々感謝

子育てが出来る佳い国朱鷺に雛

長岡京市 山田葉子

出直しは青葉若葉に囲まれて

もぐつてももぐつても藍に届かない

バーゲンへ群がる元氣どこ行つた

時効かなそろそろ話してもいいか

気分コロコロ変わらないのが取柄

大阪市 古今堂 蕉子

もういいかい まあだだよつて今日も生き

笑いの種積んで孫が遊びましょ

札つきの生徒かごめの輪で囲む

らつきよぎなんおいしいまでに手がかかる

酒煙草やめず癌まで背負い投げ

大阪市 川端 一步

荒れてきた日本語だれを叱るのか

八月に読む題名は決めてある

豆むくと昔ばなしに花が咲く

戦中派節電ぐらい驚かぬ

年金がない月なのに祝いごと

大阪市 谷口 義

藪脱みの一日仏飯を下げる

早口で願事する癖がある

えらいことになったと影も思つてる

間髪を入れずきつねうどんと言う

背泳ぎも上手になつた低い靴

大阪市 原田 すみ子

たまに飲む葉のようなアドバイス

先々の予定が決まり立ちくらみ

謝ろう影は依怙地に横を向く

責任は果して愛は限り無し

子も夫も意のままならずまして他人

大阪市 神夏磯 典子

決断せよと雷が鳴り出した
アイスクリーム食べると噂こぼれ出す
もの思い邪魔する電話しきりなり
母の日のカーネーションは幸せだ
たつぷりの余白へ落書きばかりする

大阪市 小谷 集 一

自画像を気合を入れて書いている
金婚の轍見事な車間距離
横車押して存在感見せる
真っ直ぐな道を迷つてばかりいる
色褪せてきたな恋でもしてみるか

大阪市 井 丸 昌 紀

やっかいな事がなくなり惚けてゆく
地下街で迷い地上に出たものの
ひとつ拾うとふたつこぼれる
友の死でびたつとやめた酒タバコ
都市砂漠ラクダはこぶをみつつけ

大阪市 岩 崎 公 誠

この命医師に委せて迷つてる
ぶらぶらと生きて貫くものがない
ソクラテスに憧れていて道遠い
凡ミスが続くと自陣から罵声飛ぶ
塩辛い涙真夜中にポトリ落ち

大阪市 江島谷 勝 弘

団塊の夫婦あつまり七並べ
嫌なこといっぱい堪えて今がある
きみまろはセクハラだけで稼いでる
反骨心ときどきもたげ困つてる
先輩のくもつたメガネ気にかかる

大阪市 津 村 志 華 子

傘寿とてまだ香りたし柚子ポン酢
欲望の電車に乗つて臍を噛む
永らえてまた塗り替えるエンディング
隠し玉ひとつポッケのサスペンス
余生とや目減りばかりの預金帳

大阪市 榎 本 日 出

ロボットに裁判まかす時がくる
憧れた一人暮しもあきてくる
好物を食べてストレス眠らせる
足湯には太めの脛が格好いい
手料理で健康守るのが仕事

大阪市 坂 裕 之

硬貨なら落し物だと届けたか
横並びいやでちよいちよい回り道
負けることないと信じて踏み出した
新米の気持うっかり忘れそう
あぶないが悪知恵の利く彼も要る

大阪市 平嶋 美智子

木洩れ日をたどれば家へ続く道

すっかり者この頃同じ世話す

内分も外分もない平凡さ

家計簿がどうあれ外に気を使う

目一杯動き心身溜がない

大阪市 吉村 一風

やさしさが老いをまあるく丸くする

忘れ上手でいい顔してゐる友習う

糸切れた凧もいいなと空を見る

巻き戻しても昨日はかえらない

鎧兜ぬいで酌ぎ合う友楽し

大阪市 大川 桃花

口角を上げると取れる肩の凝り

鶯の声聞きたさに降りる駅

ネガティブな言葉に影もそつぽ向く

どうしても得する側になれぬ僕

指差してたしかめ鍵をかけ忘れ

大阪市 升成 好

レンゲ草大合唱のように咲き

頷いて七面倒に蓋をする

母の愛詰めた箱には底がない

脇役に徹しこれからアンダンテ

枯山水と向き合っているいい時間

大阪市 佐藤 忠昭

尖閣を買って株式法人化

株主は川柳人で引き受ける

海底の含み資源で株高に

尖閣の警備保安は海保庁

沖繩の基地の跡地に工場を

大阪市 中村 叡子

子や孫に護身の大事伝えねば

羨まし声あげ笑う友が好き

夫逝き四年も過ぎて未だ慣れず

歳相応と宥め賺して日々生きる

寝る前に深呼吸する二十回

大阪市 奥村 五月

しんみりが俄然変つた遺産分け

罰当る言つて食べては肥満体

孫の声諍いを止め笑い合う

軋む音錆もでてきて祖父頑固

僕下り妻はいきいき上り竜

大阪市 寺井 弘子

お金出す話になると肩のこり

年金に見栄を張るなと諭される

糠床の手触りやわな夏野菜

母の日に母のお墓にカーネーション

セールの成立靴を履きつぶす

大阪市 松尾柳右子

ウォークの会う人々頭下げ
青天に干した布団に身は軽く
洗濯を済ませて料理考える
かんげいをしてくれているツツジ群
幸せな空見上げれば昼の月

大阪市 田浦實

国債が紙屑になる夢を見る
十七条憲法もまた読んでみる
火を起こし御飯を炊いた母偉い
台所主役この頃電子音
結局はへそくり貯めた妻の勝ち

大阪市 池上清治

無理難題潜り抜けつつ総理行く
ローカルの旅無人駅増え続く
無礼講本音を喋らせる宴
世間体気にしなければ楽だろう
正論を吐けば世間がついて来る

大阪市 笠嶋惠美

願うのは自然のみとり話し合い
風呂工事他もきれいになりたがる
小手毬とわたし絵になる通り抜け
想像でマイセン磁器の宴など
大阪城耳にざわめく中国語

大阪市 津守なぎさ

トイレ付きバス新緑は我が宇宙
今日明日が解らぬ命前むきに
ドライバー信じて命あずけます
連休の天気にあわすフアッシュョン
GWテレビと過す自己管理

大阪市 伏見雅明

妻の顔じつくりと見る勇氣持ち
素朴さがあふれる妻の手巻き鮪
安全を陰で見守る定礎石
この星を汚し宇宙へ夢求め
冥土へは片道きつぷ独り旅

大阪市 榎本舞夢

見守り隊風花うけて通学路
花見会隣り近所の絆出来
花ふぶき哲学の道二人連れ
連休は静かに過す老夫婦
葉桜を見上げて偲ぶ車椅子

大阪市 熊代菜月

心根の良い子に育ち孫自慢
八十路には八十路の夢がたと有る
石を積み君への想い封じこめ
病む友を励ます嘘はたんとつき
バイキング今日はメタボを忘れとく

大阪市 小泉 ひさ乃

五月晴れうきうき白いスニーカー
邪魔だった手摺りが今は命綱
今を抜け明日へ一步を踏み出そう
車内での化粧見事に化けていく
空が青いのにあと半年のカルテ

大阪市 山本 加お里

介護3夫の寝顔いとおいしい
合席で同じメニユーにほつとする
日記見て時の流れを懐かしむ
遊びから学ぶゆとりの今が華
卒寿過ぎ孫と張り合い若がる

大阪市 山崎 君子

胡蝶蘭春を呼びます美しく
いつまでも元気で清く桜咲く
通り抜け今年も桜待っていた
大阪城桜満開春の酒
男びなよろいかぶともひなだんに

堺市 村上 玄也

ミスプリの切手額面より高い
ケータイの買い替え孫に意見聞く
そんなこと知ってた妻の耳学問
頭見て席譲られたことがある
酔ったふりして本音を言うておく

堺市 柿花 和夫

偏屈も端座している竜安寺
ポケットのにぎり拳が冷えてきた
ロスタイムに芝居ごっこか老いの恋
掃除ロボにちびた箒が畏る
ハワイまで来て探してる牛丼屋

堺市 矢倉 五月

穏やかでやさしい声だ深夜便
デザートへ噂話が甘み増す
打算など無く厄介を引き受ける
長電話納豆みたいな愚痴を聞く
まだ少し私にもある青いところ

堺市 志田 千代

グルメ旅郷土料理を食べに行く
手土産のかわりと掃除してくれる
スイーツの後は渋茶で口直し
南無阿弥陀仏息切れしてる和尚さま
堤防は高く海の見えない町になる

堺市 西村 りつえ

大声で凄む裏では動悸あげ
時は鉄のカーテン降りる部屋
ていねいに儚ない浮世楽しもう
知りすぎて些細な事に拗れ出す
地球儀もやがてポロポロ荒れ狂う

堺市奥時雄

麻雀の老人組はやかましい
異次元へ誘い込まれる寄席囃し
徘徊を身につまされて見る映画
きっぱりと改めました夜行性
塾へ行く孫に気兼ねの酒を飲む

堺市遠山唯教

傘寿の春ひとの心が見えてくる
年金ではばたく距離が知れている
一献の席で味方と信じ込む
葉桜が迎えてくれる山の墓地
残業がなくなり暗いビルの窓

堺市宮本かりん

全身にばねを入れない朝六時
失言へ少し大人になっておき
人生のプランはいつも変えられる
やさしさがカーネーションの絵でとどく
思いやり忘れた時の高い声

堺市加島由一

ネギ刻む音春眠にさからわず
一輪のカーネーションの母の日よ
葉桜の青より蒼い五月病
ネギ植えて夏はやっぱり冷や奴
楽しくて思わず蝶は飛ぶんかな

堺市山本半錢

原発ゼロ喝采はすぐ掻き消され
御念仏亡母が笑顔で逢うてくれ
御破算を願いましては生き残る
詮索なし聞いて下さる百度石
見入られたように竜巻までおこり

堺市内藤憲彦

鈍だけど裏表ない過ぎた妻
百均もグッチも走る俄雨
オフレコだと言つて全部聞かされる
定年後元気の秘密大極拳
スカイツリー首都を見下し天を突く

堺市澤井敏治

ボタンキューひつじ百匹残される
近頃の子はと言われて喜寿近し
海山が動けど妻を愛してる
本物を目指す形振り構わずに
場の空気読めずふわふわシャボン玉

堺市大隅克博

言い過ぎた言葉やがてはブーメラン
とてもよく効くとは書いてないサプリ
仲人の口に負けたがいい女房
消去法適用されてお呼びなし
四十年年金もらう母がいる

堺市 源田 八千代

懐かしい話題が弾む食事会

遠目にも彼女とわかる身の熟し

八十路なお若い先輩見習おう

お酌する如く煎茶を淹れてくれ

弟の訃老母に代りスペインへ

堺市 荻野 像山

原発事故の東電値上げ義務と言う

寝転んで漫画見ているテスト明け

親切な調査書認知・要介護

道連れと来世の話乗ってこぬ

転んだらあかんよお世話かなわんで

池田市 栗田 久子

一日をのんびり辞書を繰りながら

信じてるあなたはきつと味方です

喜寿なりに少し心を引き締める

許容力見せるゆとりは持っている

芽を出したゴーヤ楽しい日が続く

和泉市 横山 捷也

露天風呂心のしわも伸びてくる

ガソリンの値上げ旅情が遠くなる

本当の事聞きそびれ母が逝く

欲捨ててやっとな本道に出る

一病も二病もあつて妻と旅

茨木市 藤井 正雄

無位無冠生涯に生きた祖父

ガソリンの補給と友に酒を注ぐ

わんこ蕎麦仲間と競う旅半ば

七人の敵一人逝く数珠を持つ

姉さんの料理色彩だけ豊か

茨木市 島田 誠一

渋滞を避けた裏道事故が待つ

大河ドラマ経済効果まで背負い

銀行に首を預ける町工場

選挙戦勝つまでの弁勇ましい

体型のまままで干してる妻の服

大阪狭山市 矢野 梓

絵手紙に食べたくなつた柏餅

母の日の届いたメロン香の確か

捨てきれぬ物を並べて衣更え

逝く順序勝手に決めている夫婦

喜寿の坂付いていけないデジタル化

交野市 森本 弘風

歩幅だんだん狭くなる歳

右側も崖のある道避ける足

万札が財布にあると落ち着かぬ

卒寿まで元気でいよう酒のため

あれもこれも維新だからと楯をつく

河内長野市 坂上淳司

若者の力借りたい休耕田

トキの餌養殖したい休耕田

千枚の月映したい千枚田

千枚田から蛙の歌が降りて来る

農繁期休暇があった昭和の子

河内長野市 黒岩靖博

原子力制御出来ない国になり

三代目築いた城に穴をあけ

ケータイに要件のみの愛想なき

政界に維新が送るつむじ風

オベ濟んでやつと退院日本晴れ

河内長野市 山室光弘

ガレキ拒否絆の文字が色あせる

妻病んで料理入門四苦八苦

妻の酌やつと表の顔を脱ぎ

ツッコミとボケが行き交う戎橋

あげまんの妻の支えで断つピンチ

河内長野市 植村喜代

要支援2私もこんなことになる

迷子の呼び出ししてる間にいない

ばあちゃんに見せる自転車スピード出す

乗り遅れバスより先に家に着く

立ち座りはがゆくなって老いに入る

河内長野市 水谷正子

セールスを巧く断る芸を持ち

ちくちくと溜めた貯金が物を言う

受話器置きほつとするほど長話

桜待つ頃のときめき今はない

半世紀二十五人の首相とは

岸和田市 堤 植代

デジタルで恋を咲かせる高齢者

クールビズうちわ片手にかき氷

茶畑が賑わっている八十八夜

連休は疲れるための休みなの

生きている生きているからああしんど

岸和田市 岩佐ダン吉

自己宣伝さみしい僕になつて

買った道じぐぐを振り返る

狐うどん私はこれで押し通す

汗流す明日のことはわからない

ロマンとは問われ拳固を見せてやる

岸和田市 原 さよ子

呑気ですという幸せの中にいる

楽しみに買った全集目がかすみ

覚え書きしておく味のある言葉

パパのまねママのまねして糸電話

お彼岸の墓へわがやで咲いた菊

岸和田市 雪本 珠子

夏ばてをいつもビールに助けられ
クールビズ板に付かない戦中派
ユーモアで人の心のドア開ける
鈍行で恋のしがらみ捨てに行く
人生譜見直し粹に生きてます

岸和田市 森元 ふみよ

パースデー八〇本の花の束
年金日孫忘れずに訪問す
母の日に亡母の味まね五目寿司
自閉症腫は何時も語ってる
お揃いのパジャマ爺婆若やいで

吹田市 太田 昭

子を叱るために涙を溜めておく
土壇場で笑い袋の封を切る
赤信号を走る男の孤独感
遠吠えを試してみたくなる電池切れ
拝啓も敬具も書かぬメール来る

吹田市 瀬戸 まさよ

グループの長寿社会のこの弾み
十歳の恋忘れない傘寿です
桃恋しみかんいちごに飽きました
シヨパンより第九好きとは男の子
傘不要濡れることない街に住む

吹田市 須磨 活恵

刻々と時は流れて人は死す
人間も花も必らず散る。さだめ
花を愛で雨を憂いて姥となり
独り居て気怠るさ残る花の後
五月晴じつくり自分を探さねば

吹田市 野下 之男

島買うとお澄まし顔で言う度胸
復興の意気を見せてる鯉のぼり
ノンアルを端然と飲む午後六時
女房の背中をにらむ散歩道
薄幸をつい思い出すゴッホの絵

吹田市 木下 敏子

一日中草むしりしてみどりの日
子供の声一つもしないこどもの日
鯉幟り上げたお空のいい時代
背競べした末っ子がもう五十路
子の笑顔財産として胸に溜め

四條畷市 吉岡 修

また借りるつもりで返すのもけじめ
アンケイトよいしよする気でみんな丸
蓮の葉にころころあれが無の形
引き際の未練が立場弱くする
化かされてみてもいいともあのえくぼ

高石市 浅野 房子

休憩し一休みして家事こなす
ミスばかりつづき生き様考える
顔見知り消えて淋しい故郷よ
損をするために生れてきたようだ
タクシーで行き帰りして旨い物

高槻市 指宿 千枝子

明日は明日考えましようもう寝ます
人生のおまけ楽しむ喜寿の春
席ゆずる譲られる人いい笑顔
赤ちゃんの笑顔に知らんぷりは出来ぬ
作句の手止めさせるのはダルビッシュ

高槻市 富田 美義

荒む世に吠えて失うものばかり
ケータイがぬるま湯さそう誤字脱字
リサイクルの市場に並ぶ俺の首
老々の介護の奥の吹き溜まり
出る杭の鬨志買われて今の位置

高槻市 富田 保子

クイズ抱き静かに眠る棺の中
正しい敬語使う青い目ふり返る
菖蒲湯に浸って年輪ひとつ積む
飾るもの無いので独り深呼吸
イエローカード地球もボクもかすれ声

高槻市 佐甲 昭二

自分史にこつそり本音つけ加え
たつぷりとあつた時間の底が見え
一人歩き試して杖を遊ばせる
クラス会別れたままになつた友
役員にされて社長の楯となる

高槻市 左右田 泰雄

菜の花の芽生えを鳥に知らされる
インターホン鳴つても空寝続けてる
川風に揺られて育つ黄水仙
なんのその鎮守の森の女坂
よく出合う顔だが話したことは無い

高槻市 片山 かずお

夢に出ておいでと願うひとがいる
「もう」とでも「まだ」とも言える古希になる
作り笑いと楽しくなつてくる
好き嫌い見た目ですぐに分けている
何もないとこで転ぶという不思議

高槻市 杉本 義昭

大空を一气飲みするこいのぼり
床柱時代を過ぎて黒光り
どん底を救ってくれたのは友だ
伸び切つた輪ゴムのような朝帰り
独立の医師に患者も移動する

高槻市 初代 正彦

高望みもうほどほどで止めておく

天つぺんの夢を見ていた青年期

ファッション誌見入ると妻も若く見え

百均の雑貨にあつた宝物

雑草と言われ意地でも花咲かす

高槻市 峯村 勲 弘

空洞化進み清流甦えり

チャリンコがのんびりさせぬ遊歩道

消費税コップの中で競い合い

あこがれの団地の坂も今重荷

老いの坂日野原先生はるか先

高槻市 井上 照子

国交が大事政治家海渡る

ゴールデン・ウイーク事故のニュースで心病む

サングラスまともな話通じるか

髪染めて若返りせぬ足と腰

易の本晚年良しは慰めか

豊中市 水野 黒 兔

儲けたら寄付をしますと願かける

カフェテラス明日の風を妻と読む

特価品賞味期限に急かされる

光る眼が意外に柔和阿修羅像

子にかけた夢はそのまま孫が継ぐ

豊中市 江見 見 清

遠雷が話を振り出しに戻し

空からは皆平等に見える筈

好き勝手とことん疲れたらゴロリ

すれ違いのメール話をもつれさす

五月晴十三大橋を歩く

豊中市 藤井 則彦

昨日今日明日へと変えてみる自分

不出来でも達成感がバネになる

正論を吐かれ掛けたくなる寝技

先達を立てると人は寄ってくる

笑われたら笑い返せるのが取柄

豊中市 松尾 美智代

私の生きる根っこは好奇心

七十年生きていつばいある汚点

思い出をたどれば今もほろ苦い

長い旅ちよつと一服しています

五十年やつとコンビが板に付く

豊中市 松村 里江

あたたかい童話育む森の土

旅情豊かに手桶に浮かぶ冷ヤッコ

一人芝居月のスポットライト浴び

過去すべて水に流そとする握手

三猿を忘れた微罪うずたかし

富田林市 片岡 智恵子

三代目多芸が故の甘い脇
夜行バス客の数だけ明日を乗せ
仰山のくすり時々喧嘩する
いけばな展千の花です無限の美
ボケないで長寿の遺伝オンにする

寝屋川市 森 茜

とぎ水が澄むまで春愁をこぼす
真夜中のコールはしのび泣くように
出遅れた子にもさくらが咲いてくれ
ワンテンポ遅れたドラム耳を裂く
文机プラスモードに切りかえる

寝屋川市 平松 かすみ

老介護おっとり刀募集中
年金で買って上げたいサイボーグ
一本のドリンク効いた風邪の熱
ありがとう ありがとう言う午前二時
快眠枕しても睡眠不足

寝屋川市 森田 麗

姑も蟠りなく無洗米
この齢になれば分かると言つた母
世界遺産テレビで夢のような旅
久し振り緊張感で行く歯医者
里の春墓の守りした兄も逝き

寝屋川市 富山 ルイ子

高血圧こわごわ生きているような
自覚症状なくて血圧あがる
家のまわりだけ歩いてる万歩計
日日好日死と向き合つて生きている
朝どりの豌豆友に少しづつ

寝屋川市 山本 三郎

ハロワーク出でから泳ぐ人の波
男の子居てかやすらぐ鯉幟
寄席を出ると普通の顔になる
寄席を出ても笑いを嘸み殺す
発表は徐徐に詳しくなるテレビ

羽曳野市 三好 専平

ハブ酒が好きで奄美に隠れ棲み
勉強のできる奴だけちやほやし
教会の横にお寺とラブホテル
げんげ田に水引くこともなかりけり
隆明も逝つて紛争忘れられ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

七回忌五人兄弟揃つた日
頑強な兄の弱音を聞く法事
思い切り笑つた遺影写真撮る
儉約に疲れ御馳走食べに行く
孫達の溢れる笑みを持ち歩く

羽曳野市 吉村 久仁雄

生と死を沈思黙考する化石

笑門と名づけて福を呼び寄せる

時々は神と行き交う熊野道

抜けそうな釘に命がぶら下がる

湧き水でおごる両手を洗い切る

羽曳野市 永田 章司

頑固だね友がだんだん去っていく

三日月へ省エネするなほやいてる

御曹子いきなり部長そりやないぜ

戦後の日ギリシヤ以上に耐えた日日

どじょうにも一本あつた太い骨

羽曳野市 徳山 みつこ

一食二食派いいえ私は日に三度

ダイエットしてはスイーツ食べてはる

鬼ごっこはだめ隠れんぼはできる

夏だ夏だと十葉が湧いて出る

君が代はオリンピックがよく似合う

羽曳野市 安芸田 泰子

恋心見抜かれそうで目を伏せる

いろいろの資格を持つている無職

満天の星古里は変らない

いざと言う時の荷物が多すぎる

花よりも野菜と庭のプランター

羽曳野市 福田 悦子

津波など知らぬ存ぜぬ天の川

パスポートもつと美人に写してよ

一人暮し知ってるらしいミニトマト

好きやねん浪速女にある誇り

母からの手紙ふるさと近くする

阪南市 森村 美花

一日のすべてを包む羽根蒲団

正直で優しい人で隙だらけ

ラップして心まるごと差しあげる

家族がいるやっぱり温い夕ごはん

輝いて生きたい私だけの彩

東大阪市 佐々木 満作

十五分正座してみる朝ドラマ

花曇り鐘の音遠く遍路旅

落札値ムンクも驚愕の叫び

胸襟を開くと毒が抜けてきた

人情が溶け込んでいる北の旅

東大阪市 北村 賢子

マンネリへ食器を変える差し向かい

明日の虹掴む男の血が滾る

惚れちゃったなんて言わない自尊心

生き返る予定ないので生き尽くす

オハヨウで今日の元気を確かめる

枚方市 寺川 弘一

片想いでよかつたなと思ふ
百円シヨップ必ず出会う同じ人
看板も風格がある五つ星
生きるため番号札と言う絆
言えぬこと書いて置きたい日記帖

枚方市 海老池 洋

順風を自力と過信してしまふ
おっとり生きるよと決めた大病後
黙もくと重さに耐える象の脚
良心が見張りしている無人店
人生観大きく変えた退院後

枚方市 伊達 郁夫

諦めぬ雑魚には雑魚の海がある
水澄んで私の影がうろたえる
雨宿りあなたも迷い子さんですね
人生の覗き窓です入院日
春あらし軋む男の風車

枚方市 丹後屋 肇

指繰れば亡妻宇宙のどのあたり
快晴に溜息を吐く五月病
骨密度手加減してる万歩計
割烹着姿に照れている鏡
老いらくの背中を粋な風が押す

枚方市 小林 わこ

うす桃色の背になるまで拭いてあげ
湯気に描いた秘密なんです消しておく
ワイパーの力を借りてウツを消す
朝の鏡気持よい日を願ひ拭く
恥ずかしい涙をそつと拭くそつと

枚方市 安達 忠央

それとなく守つてくれる友がおり
のんびりとなりゆきまかせからわず
傘寿でもタツプダンスがまだ上手い
出遅れも大器晩成あせらない
天衣無縫内緒の話はずされる

枚方市 二宮 紫鳳

日溜りの二人を癒す歌がある
六十路坂自分の色が見え始め
白椿父の笑顔を偲ぶ午後
鼻歌で波風しずめ和を保つ
鯉のぼり夢いっばいに泳ぐ庭

枚方市 二宮 山久

よどまない川に教わる人生観
余生まだあるぞガタガタするでない
人生の方程式を解く夜長
口喧嘩ごめんね言えぬコップ酒
五月五日今年はこない子の育ち

藤井寺市 高田 美代子

連休明けいつも通りの風が吹く
また負けたビールの泡も消えている
愚痴つてもどうにもならぬさりながら
半分こ出来ないものもあるのです
限り有る時間だったと今更に

藤井寺市 鈴木 いさお

生きいきと演じるボクのエピソード
つばめに託すスーチャーさんへの伝言
雑踏の中で黄昏れてる孤独
医学部だそうなお金持ちだそうなお
何をしてはるのやろうか凄い家

藤井寺市 吉田 喜代子

好物も一時になる旬の物
土作りしんどい先の夢を見る
青い空昔話が溶けてゆく
落札にムンク驚く黄泉の国
土地を捨て安住の地も竜巻に

藤井寺市 伊藤 アヤ子

街角の噂話は気にしない
二人して育ててみたい庭の花
花は黙って咲いている無人駅
お洒落なカーテンいつもしめてある
二三枚撮りたい孫とチューリップ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

公園の時計は五時のまま夕日
いつも持つポーチは亡母の帯だった
好奇心持つて内緒が多くなる
肩パッドははずしてスランプから抜ける
頑固さも温い介護に解けてくる

藤井寺市 俣野 登志子

食べ難いがおいしさに負けミルフィーユ
今日はもう丸く掃いとくそんな日も
生き甲斐とまでいかぬ趣味二つ三つ
天候不順あした着る服決まらない
部下の罪知らなかつたで済むらしい

藤井寺市 若松 雅枝

日向ぼこ私に媚びる猫といる
路地の奥木の芽吹き出す音がする
失敗を重ねて書いた僕の画布
世情不安明治の元老招きたい
心機一転此の世に何か残したい

藤井寺市 津田 シルク

チマキ食べたべ計った背丈縮んでた
鴉なく里の老母が気にかかる
作句する食事するのもつい忘れ
テープ切る胸のリボンが畏まり
心底が覗えて友との距離を置く

松原市 森 松 まつお

新聞のバズルへ妻とタッグ組む

熱爛にスルメで聞いている演歌

しみりと飲みたい時もあるのです

いい人だ車内で本を読んでいる

脱法ハーブまるでタバコを買うように

箕面市 出口 セツ子

選ぶまで迷うが悔いは残さない

傷ついているから平気なふりをする

荷物にはならず老いる難かしさ

まっ白になるまで動いている体

意地悪に強いが優しさに弱い

箕面市 広島 巴 子

若葉風ゆりかごのよう身をゆだね

花の精やさしく人を解き放つ

幸運の鍵を探しに人の輪へ

ムンクより叫びたくなる事件事故

ギリシヤからユーロさておき聖火発つ

守口市 井上 桂 作

帰化されるキーン博士も同胞に

再稼働安全ですと机上論

久しぶり花見行くのも悪くない

生きるとは天が与えし持ち時間

また地震マグマ静かに頼むから

八尾市 寺 川 はじむ

鼻息の荒さが物語る自信

社会復帰勇気をくれた無二の友

ジーンズはもう似合わぬと古希の愚痴

頑固だが涙を零すいい男

熱爛が出ると緩んでくる頑固

八尾市 村上 ミツ子

竜巻も加えておこす怖いもの

別れから始まる幸せな未来

合併へ元の名称わからぬ

やる気スイッチどうやら故障らしい

時には間尺に合わないことだつて

八尾市 高杉 千歩

過ぎ去つた時間幸せ満ちている

拘りを捨てて素直な絵具筆

退化した右脳揺する好奇心

敗戦の哀歌今こそ語り部に

竜巻の利那がよぎる老い独り

大阪府 米澤 俣子

労いのひと言やる気ポランテイヤ

ときめいて老化しばらくストップす

輪くぐりに拍手喝采イルカショー

午後のお茶遠い日思う粽の香

美しく老いてポックリ死は奇蹟

大阪府 初山隆盛

神戸市 伊勢田 毅

たらの芽を摘むと五月が香りたつ

黄金週間価千金風録

労働歌唄えば五月薫る風

きな臭いはなしに核やミサイルや

悲しみの彩うすめよう一周忌

大阪府 野田栄呼

成長の過程と黙す反抗期

先走る気持に体従わず

はねっ娘をなでしこにする浴衣帯

髪染めて脳へ息吹の駄句並べ

巧妙な口に消された老後資金

大阪府 桑田 ゆきの

ギャル御輿美脚揃いで街湧かす

落札のムンクの叫び祈する

黄砂降るぼやけつつあるマニフェスト

捨て切れぬ野望男の固い拳

人褒めて新茶がなおも美味しくて

神戸市 山口光久

決断が下せず揺れている拳

風を読み土と相談してた亡父

わたくしを綺麗に飾る一行詩

物陰で母はポツンと独り言

失態を演じ仰天するワタシ

退院日妻満足の寿しとそば

退院の妻が鏡と睨めっこ

病床で妻が見ている旅の本

退院の妻に家計簿リレーする

退院の妻が駆けこむ美容院

神戸市 山田 婦美子

土の香を嗅いだ祖先で土が好き

高層に住んで上からものを言う

高層のマンション鳥の目で眺め

世も移りビルの谷間の天守閣

蒲公英の未来どうあれ綿毛飛ぶ

神戸市 木村 貴代子

どれほどの涙吸ったか昭和の世

だまされた責任がある原筈に

未来から借りてる今の気楽さよ

食べたいと思える幸を嘔みしめる

日溜りの猫の気楽に見惚れてる

神戸市 山口 美穂

もうとまだ使いわけして生きてます

補聴器は聞いていませんその噂

カーテンのためだけでないゴーヤ植え

昨日今日齢重ねた訳じゃない

思考路がぶつつり切れる午前二時

相生市 中塚 礎石

鈴つけて輪の中にいる猫と犬
子供にはやれぬ恩師の平手打ち
新築で蠅一匹が遊んでる
大学の桜異国で咲きたがる
サクラサク長女次男が控えてる

明石市 糺谷 和郎

老いてなお冒険心がうずき出す
原兎が活断層に胡坐かく
笑顔から今日を始める朝鏡
休んでもリベンジの灯は絶やさない
子に示すものはないけど笑顔ある

芦屋市 黒田 能子

曲り角風吹く方へ曲ります
美しい文字そのままのお人柄
守るものいっぱいあつて忙しい
めらめらと燃える若さがまだ少し
イメージはいい人だったそのまんま

芦屋市 竹山 千賀子

花園に罪の数だけ種子をまく
気付いてねドレスアップの私に
有名校尋ねなくても聞かされる
バーゲンの元値をすぐに見てしまう
直球を投げたばかりに煙たがれ

尼崎市 春城 年代

花吹雪浴びて桜の化身なり
桜と散った都大路の事故かなし
やがてこの身も桜ふぶきと舞い納め
町の死角にわたしの恋を散らすなり
黒い電話は亡夫の書齋に肅とある

尼崎市 藤岡 りこ

夫婦ゲンカ最後は犬にとぼつちり
不意に脇を自転車と風通り過ぎ
独りのつもり皆来てくれた誕生日
タンスには瘦せた時着る服眠る
赤ちゃんと犬の寝言はよく似てる

尼崎市 山田 耕治

事務局という脇役で忙しい
ええお月さん出てますというメール
電池切れのランプ点っている心
奇跡的と言う大見出し待っている
帰省の子びつくり箱を持つてくる

尼崎市 加川 靖鬼

実印を押す印鑑の顔のぞく
ホームドラマ男はみんな棘が抜け
私の本性知っているのは猫
脇役のままに舞台の降り仕度
異じやない蜜をあげます花の愛

散る桜余韻楽しむ花筏

尼崎市 軸丸勝巳

三度目は呑まぬ花見の通り抜け

風邪ひくな大連休は休診日

昭和の日昭和の歌が出る散歩

百均は倒産しないから不思議

尼崎市 林昭三

葉ざくらの下に二人の散歩道

古里の銜昔の儘老いず

病名はなく家族にはお歳です

病癒えジョギングシューズ洗い干す

連休に万歩計だけ誘われる

加西市 金川宣子

幕引きを企む政治舞台裏

二幕へのトンカチ音も遠慮がち

タンポポもレンゲ畑の脇で生き

無料だと聞いてホイホイ列の中

注射打つ上手い看護師指名する

川西市 米原雪子

嬉しさを包み切れずに笑みこぼれ

遅しく売上げ伸ばす看板

スカイツリー技術の進歩誇らし気

老の心知る大きくなった文字

愛情に包まれすぎた第一子

持ち合せないが笑顔はすぐ出せる

花可憐名はドクダミや犬ふぐり

柩より達者なうちに欲しいバラ

晩学のペンの滑りに酒が要る

面映い昔話のクラス会

三田市 久保田千代

暴れてる地球が叫ぶ自然保護

パソコンでペンだこぐつと優しなり

無遠慮な鏡に一言もの申す

生き様を心に刻む予定表

悩みありいよいよ増してくる歯痛

三田市 田中章子

東北を旅し芭蕉のうまさ知り

時々はからだの文句聞いてやる

いつも子に両手合わせる母である

黒か白引き分けはない相撲道

ビタミン愛とりすぎということはない

三田市 福田好文

注射器が怖く献血せずに老い

哲学など無縁でただの頑固者

花より団子より好きなのはお酒

停電と聞いて張り切る戦中派

惚けられぬ妻がお酒の所為にする

三田市 石原 歳子

夫逝つてやたら目につく夫婦連れ
所帯主になつて淋しき増してくる
亡夫のこと思つても夢に見ず
手に取ると涙こぼれる亡夫の本
仏壇屋へ行つて決めますお仏壇

三田市 堀 正和

生足のまぶしい季節やつてきた
孫台風来襲連休三日間
そろそろトラジオ体操始めるか
扇風機OKゴーヤ植えなくちや
緑陰を指す新刊書抱いて

三田市 上 垣 キヨミ

誕生日孫のメールに四ツ葉の絵
辛かった事は五月の風に消す
胸奥に咲かすつもりの花の種
トキのヒナ生まれ一面飾る記事
金婚の夢 引き裂いたガン告知

西宮市 山 本 義 子

隠遁の術でかい蓋探してる
母の蓋いつも適材適所なり
落し蓋 雑学すこし煮つめとく
ときどきは口にあてがう蓋が要る
蓋すべきかこは少おしつき放そ

西宮市 亀岡 哲子

まだ希望あつてたまには服も買う
島へ来て島の手作り帽子買う
崩れそうな系図支える子が一人
見捨てるでないぞと未来言うている
女子大生になつたアキコの初化粧

西宮市 緒 方 美津子

花の下原発のことふとよぎる
声高の夫婦げんかもポケ防止
腰曲げて歩いて憚ることはない
高速道神も仏もお留守です
ごはん粒一つになると疎まれる

西宮市 片 山 忠

村興しやたらに物を売りがる
イメージトレーニングではいつもパープレイ
平和から人は学ばぬものらしい
太陽に当たると弱い無頼漢
写さずにみんなこの瞳に焼き付ける

西宮市 藤 本 直

感動はメダルの影にある涙
人間を超えたと思う金メダル
競い終え素顔に戻る美しさ
メダルなどいいよ涙を拭きなさい
ロンドンを楽しみなさいなでしこよ

西宮市 秋元茂

ひがな一日パズルで遊ぶ老母と住み
ばあちゃんの頼み軽いがしつこくて
なーんだ君かと言われそで止めたTELくやし
遺書めいて日記この頃気乗りせず
カタカナはみんな英語と思つてた

西宮市 足立茂

絵に描いた餅にもひよつとしてチャンス
酔いが醒め大風呂敷をたたむケチ
反面教師でまともに育つ子が嬉し
飲む量にスランプなんかない私
むつつりとしてる男のかくし味

西宮市 吉井菜々子

朝日より夕日に馴染むカーシート
ケータイはしばらくオフに深呼吸
日暮れからちよつとお粧しをしてライブ
バイオリンの音色に弛緩して涙
初夏のときめきカーテンが揺らぐ

西脇市 七反田順子

早苗歌旨い米よと千枚田
手を繋ぎ公園デビュー青い空
言うなればドラマチックな出会いから
猫アレギー目薬さして追っかける
眠れない湯タンポ抱いて魔の三時

姫路市 古川奮水

春にがみ山菜料理卓に盛る
母の味コビーをなぞり露を煮る
点滴中イヤホーンで聴く冬の旅
蠟燭のあかりで祝う誕生日
三面鏡くるくる覗き着付中

奈良市 米田恭昌

帰る家なく燕戸惑う被災の地
あの人も仲間か粗品だけの客
ガス欠か男のやる気萎えている
見栄っぱり引き際さえもポーズとる
母乳たつぷり明日の日本を背負うため

奈良市 阿部紀子

明珍火箸音色と余韻いと涼し
あら嫌だ近所姑になつている
日々食べて涼しいゴーヤのカーテン
祖母ゆずり金糸銀糸の帯締める
香を聞き優雅に浸る夢心地

奈良市 辻内げんえい

ロボットに負けて雑用だけの僕
お役所の桜まつりは蕾でも
和のこころ何処に無くした日本人
愛犬が危篤夫婦で添い寝する
「また来てね」孫の言葉が愛おしい

奈良市 加門 萌子

命は一つそれでも数で言つてくる
高速に何度乗ったかこわかった
みんな自分の身においてみな原発論
分断をされぬ国家で良かったよ
寄せ植えをあちこち飾り平和なり

奈良市 岩本 浩二

色と欲担いで登る八十路坂
ざわざわと傍がうるさい老いの恋
色と欲老いの心も乱れがち
表面良いけど妻を泣かせてる
この国の未来が読めぬ恐ろしさ

奈良市 大久保 眞澄

志も恋も忘れて生きている
ロボットも脱原発に諸手あげ
痛いところあると寝姿までいじけ
年寄りにこそ要るのです遊ぶ金
謝つとこ心当たりはないけれど

生駒市 飛永 ふりこ

人に酔い青葉若葉にどっこいしょ
怠けるな睨みきかせる君子蘭
くしゃみが三回誉め殺しのメール
お隣の犬が私を嗅ぎにくる
甲斐甲斐しアツシー君で遅刻せず

香芝市 大内 朝子

大空に抱かれ孤独を遠ざける
ときめきをサプリメントにして元気
父母のこと偲び姉妹で子に返る
無印でスイスイ生きている気楽
今が華精一杯に咲くつもり

大和郡山市 坊農 柳弘

栗一枚春のページを抱いたまま
七月のドラマを仕切る星まつり
自分史に自己陶醉の絵空事
去る者は追わず私の影法師
民主主義寄らば大樹のクールビズ

奈良県 渡辺 富子

乗り越した駅でうっとりおぼろ月
トキの巣立ち待って列島夏になる
削除キー押しても消えぬ過去あまた
一悶着あつてお隣遠くなる
礼節をひらりと跨ぐ長い足

奈良県 天正 千梢

百年も過ぎし桜に勝もらい
一筋の涙残して寝てしま
すね枕一度やつたらやめられぬ
るす酒を医者のはつきり認めてる
鳥が十羽止まればこわくなり

和歌山市 喜田准一

和歌山市 田中みね

浮かぬ日は明るい記事の拾い読み
以上でも以下でもなくて恙い

横揺れにじつと耐えてる縦社会

台所茶碗ぶつけた音がする

力抜く術も覚えてほんまもん

和歌山市 松原寿子

血が通い流れ奇跡へ捻子を巻く

得意科目は今は秘密にしておこう

内幕も外幕もない透明度

生も死もドラマ命を書き記す

散つてなお青葉に満ちている精気

和歌山市 福井菜摘

この道より知らず助走をくり返す

ゼロになり本当の愛が見えてくる

肩の荷がおりてやさしい眉になる

足るを知る暮し厨の灯が温い

スイッチを切り替え明日にジャンプする

和歌山市 土屋起世子

私より利口な猫で媚び上手

勿体ない先祖の音が耳底に

痛みにも馴れて噂の主人公

そよ風に素直に回る風車

友はみな喜寿で最後のクラス会

ご近所に心が痛む認知症

パツとせず然りとて散りもせぬ私

腹見せて孫んちの犬いらつしやい

完璧主義あなたお疲れ出ませんか

のろのろと見せて火種を持つあなた

和歌山市 武本碧

薫風へ幸せ色をオンにする

カード切る手もあざやかな生き上手

ブータンに習い幸せ自己暗示

追い風へメロスになつて雲に乗る

器からこぼれた運が走り出す

和歌山市 柏原夕胡

まだ君と居るしがらみよフルムーン

尻を叩いて第二の職も走らせる

苦勞乗り越えて菩薩になりました

ファッションリング恥ずかしいほど欲がある

無表情のまま北風を躲そうか

和歌山市 坂部紀久子

エレベータービルが上から降りてくる

各部屋に屑籠があり勉強家

タイムスリップしたら逢わねばならぬ人

他人より我が子の気持ち計りかね

引分けのルールがあつて物足りぬ

和歌山市 玉置当代

ETCカードさくらを追いかける

金婚を祝うさくらも満開に

母の日には好きだった花供え

そら豆に元気をもらう五月晴れ

肩の荷を下ろし留袖気が緩む

和歌山市 松尾和香

善悪を聞き分けているジャンボ耳

生かさされてリズムに乗ってするけんか

台湾へ弾む足音句会旅

里の道人に会わぬが鹿に会う

でこぼこの人生越えて喜寿の僕

和歌山市 堀 富美子

七回忌あなたの歳になりました

子や孫と墓参りする至福の日

祭り事まだまだしやんとしなければ

和菓子屋と花屋から来る誕生日

老いるほど楽しくなつて来る余生

和歌山市 上田紀子

心の眼洗いゆつくり出す答

潔い敗者でいいと明日に立つ

無添加の愛にひと振り塩コショウ

体温のないロボットが扱き使う

何をどう塗つてもハリも艶もない

岩出市 藤原ほのか

アドバイス受け入れ今日も軽やかに

大声をあげて命をつないでる

キッチン染みひとつにもある歴史

俎板のうえでさつぱり裁かれる

大蛇を振るつてみたい世相です

海南市 堂上泰女

亡父母の汗が染みてる里の道

風薫る墓前おとなう旬の花

幸せの彩で呼んでるライラック

スニーカーもヤッホー今日は五月晴

新樹光キラキラ散歩でもいかが

海南市 小谷小雪

キレのあるワインしやしきしやき感がする

蟻さんはごつつんこから譲り合い

いい医者ハードな勤務口にせず

休業の貼り紙へ斜めから風

お手本にする母と過ごした時間

紀の川市 宇野幹子

信念の強さへ帯を締めあげる

決断をすれば真つ直ぐ流れ出す

饒舌な蛇口うかつがほとぼしる

とびきりのヒントがあつた水たまり

爪丸く切つて溶けこむ茜空

紀の川市 北山絹子

雨垂れの音に心を遊ばせる
スリル満点素足のままで踏む氷
団子鼻神様からの贈り物

ローン返済家も主人も朽ちてくる
青一色あれば直ちに初夏の彩

田辺市 岡本昇

どんと来い叩いた胸が疼き出す
ふくらんだ笑い袋を持ち歩く

お目当ては車内カラオケバスツアー
合いの手を入れて話を聞き流す

俺一人ぐらいと思う無責任

鳥取市 森山盛桜

毎日を省略算で生きている
スパーの明細だけはちゃんと見る

君が代を歌う歌わぬその辺り
無駄骨と他人から言われたくはない

得体が知れて爽やかに見えて来た

鳥取市 夏目一粹

削除キー押して見たくもなる齡
がんばれの中身おしえて欲しいもの

ゼロになるから人間は満たされる
生きるのも死ぬのも怖いでも不思議

捨てがたいともに歩んだ古い靴

鳥取市 竹口清信

天国をみてきた人に会ってない
極楽も地獄も行く決めてない
有るがまま成るがままでも人生だ

儘ならぬそがこの世の面白さ
すつきりと生前整理するがよい

鳥取市 高浜勇

やさしさがそつと見ているまわりから
逆らわず流れのままに生きていく

もう少し磨けばひかり放つ石
列島の頭を冷やす雨風

若い人みるたび懺悔ばかりなり

鳥取市 前田楓花

おしどりと言われているのでそうしとく
庖丁を研いだその日に指切った

雑草も咲けば可愛い花になる
する事が無いから部屋の模様がえ

折れそうで柔な私じゃありません

鳥取市 西川和子

雨風に我家の過去がさらされる
すねに傷私にいつも付きまとう

忘れたい過去がくすぶり眠らせぬ
ご都合で過去は忘れた事にする

孫達の忘れられないエピソード

鳥取市 土橋 はるお

名刺から転げ落ちてる役もある
この村で役人風を吹くじやない
父さんも育児の本を読みましよう
酒のんで運転してて幸いか
蟹食えば食事時間が長くなる

鳥取市 池原 天馬

八十路こえ敬老会も友わずか
敬老会新入り児童より多く
荒れた山筈道のど真中
プロパンに負け荒れた山無残なる
異常気象日本破壊を加速する

鳥取市 有 沢 せつ子

一輛の電車で小さい旅をする
連休のけじめ家族で庭木剪る
スリッパを替え玄関が夏になる
冷静になれば小さな事だった
不遇の日ふと思ひ出す柏餅

鳥取市 奥 谷 彩 子

過去つむぎ渋味を増して傘寿坂
輝いて生きるつもりと本を積む
クリームシチュー湯気の向うに亡夫もいる
大風呂敷ひろげた愚痴がためない
思ひ出をいっばい溜めている家族

鳥取市 加藤 茶人

見て聞いて学んでスマフオなどいらぬ
妻の留守味噌に砂糖にシャツがない
初詣したはずなのにこの惨事
気苦労は死ぬまで絶えぬ妻白髪
二番手でいい奴上を狙う奴

鳥取市 平尾 菜美

津波跡思い巡らす焼野原
パラダイス里山になら開けそう
生き残り晩学背負う羽目になり
森の向こう子等に未来の風光る
軸になり傘と歩いて生き残り

鳥取市 近藤 佳子

のびやかにひらひら春の雪が舞う
肩叩きだけに娘が寄ってくれ
働いた勲章かもね木の葉髪
忘れな草の藍をたたえる春霞
物忘れひどくなります先祖さま

鳥取市 吉田 弘子

未だ役に立つ老人だ自信もつ
無駄な過去ない人生は本物だ
日記帳昨日のことも書けれない
物事を分析の癖治らない
旅好きがこれが最後を繰り返す

鳥取市 春木圭一郎

正確な決断いつもしているか
自らが決めた結果を悔やまない
今日よりもステップアップ狙いたい
無理をせず一所懸命やつてみる
物差しを持ってば即断できやすい

鳥取市 深澤千恵子

隠してもいつか出てくるお人柄
駅弁に旅の楽しさ添えて食べ
御破算でお聞きにする内輪探め
鏡拭き明るい顔へ変えていく
嗜好き少し歪めて撒いている

鳥取市 鈴木一弘

縁あればいつかは会える夢だより
間柄いつか結論欲しいのだ
包丁の切れあじ見事たまご焼き
共食いは神の仕組んだ知恵の罨
野の花が可憐に咲いて名も知らず

鳥取市 福西茶子

ハッピーな顔で輪になる花の下
善人になつた気がする巡礼後
土壇場の動きはおんな俊敏だ
これ以上生きると消える葬儀代
サンキューとゴメンできょうを締めくくる

鳥取市 池澤大鯨

聞くのは好きそれでも音痴だと思ふ
恥の数まだまだ奴に及ばない
しらつと嘘妻にはまんた負けている
ゴミ捨てて所有権など割り出され
三叉路に出て見通しを模索中

鳥取市 岸本孝子

安近短老人会のバス旅行
チュニックに少し肥満を助けられ
このごろは大きな服は子に着せぬ
惚けぬようキツチン守る役もらう
断捨離で筆筒ひとさお空きました

鳥取市 中村金祥

真青な空に胸襟正される
ゴーサイン出して世界のはぐれ者
消費税アップ談議で花見かい
人生も満開だろう花見酒
孫達の天使へ札も羽根が生え

鳥取市 永原昌鼓

招かざる老醜迫る背後から
故郷を出た後ろめたさが拭えない
美辞麗句飾つて故人送り出す
ボール蹴るだけで世界が盛り上がる
刺す殺す盗むと怖いスポーツ語

鳥取市 吉田 孔美子
全身が楽器ボーディーガードが要る

青春の残骸ドラムとオートバイ
朝な夕な四季に委ねて発芽待つ
黄金の過去に成るやも知れぬ今
空財布妻は強かなる役者

鳥取市 中宇地 秀 四

飯食えるトイレも行けるありがとう
無駄に無駄重ね努力の花咲かす
妻の愚痴火を付けぬよう聞いてやる
使い捨て出来ぬ昭和を生きて来た
目はぼやけ耳遠くなり腰まがる

倉吉市 山本 玲子

水溜り勇気を出して飛んでみる
まだ役に立つのか声をかけられる
弁解は舌が纏れて出来ません
寒くて愚痴り暑くて愚痴る甘えん坊
十五夜に早寝するのはもったいな

倉吉市 山中 康子

朝夕のお経するりと無の境地
据え膳でご免なさいと嫁想う
許されてどこ迄ぐうたらな暮らし
満腹の笑顔に勝るものはない
水入らず四人の邪魔はせぬように

倉吉市 猪川 由美子

君の瞳に僕の姿が映らない
何があっても増税総理目離せぬ
友達がセレブになつてぎこちない
両陛下支え寄り添いお美し
エナジーの元僕はいつでも恋してる

米子市 竹村 紀の治

頑張れよ無理するなよと独り言
二度三度起きては朝を確める
鯛大根半分ほどが酒の当て
コンビニで個食孤食のお惣菜
朝めしが旨い当分大丈夫

米子市 高田 振作

川柳を作る爺ちゃんボケてない
ボケないけど介護保険は払います
永田町よりしつかりしてる我が家です
古里に帰れば治る認知症
ボケぐあいくらべ安心クラス会

米子市 吉田 陽子

おもちゃ箱介護ベッドに押し切られ
平仮名のリズムで散つていくさくら
柿若葉なぐさめ上手だから好き
子どもの日母の日トキに幸よあれ
嘘見抜くまで筈をむいている

米子市 中原 章子

石ころも見付けてくれる人が好き

夫には価値観似てる人が良い

価値観が同じで話よく弾む

温泉の夕食椅子でありがたい

孝行に温泉疲れどつと出る

米子市 後藤 美恵子

華やかにくずれる牡丹憧れる

スイッチオンヒューズ飛ぶまで突つ走る

つくづくと子どもが見せるわが背中

燕待つ糞の掃除も厭わない

「大きくなれ」稚鮎を放つ園児たち

米子市 成田 雨奇

蒲団蹴り枕蹴られて避難する

短冊を白紙のまま出す度胸

咲かすなら灰は根元に撒くもんだ

勝ちそうな方見きわめて加勢する

母の日の自分に妻はキーキ買う

鳥取県 石谷 美恵子

ジャムつくり粒選り苺漬す悔い

ポリープは良性病夫へメロン買う

仲直りしたはずの目が笑わない

白黒をつけずほほえむ老いの知恵

少しだけ高いが近い店で買う

鳥取県 竹信 照彦

二時間でお開きよろし酔っ払う

万歳も酔って候 乾盃だ

七十は若いと八十路翁が言う

政界も世界もごった煮の模様

世の中の悪口どんと言つてやる

鳥取県 深田 俱久

伝来の農法棚田田草取り

目標は百メートルと決め水着

平凡がいい夏休み団扇連れ

扇風機だけは認めてエコの夏

夏痩せを美容効果と痩せ我慢

鳥取県 細田 裕花

鈴の音のきれいな方へ従いてゆく

近頃のカラスはスマホ持つている

働き蜂定年後にも群れ遊ぶ

平均という甘い居場所をキープする

行列の先に時代の夢がある

鳥取県 西谷 悦子

にんげんのスイッチ入れる桜咲く

根雪からポトリポトリと春の音

つまらないプライド飼わぬようにする

星空へ五線譜描きくちざむ

ココアに読書独りもいいな雨の音

鳥取県 斉尾くにこ

空気感救うジョークに笑いましよう

淋しいな終日ひとり嬉しいな

さきざきが貼り付くガラス戸の夕日

ぼっかりと満月はこの世の出口

風に乗りにたくて五月はダイエツト

鳥取県 佐伯やえ

つまづいた石の丸みによぎる人

過疎の村グミは悲しい彩で熟れ

天に舞う風へ義足の骨が鳴る

手作りの花美しい女見舞う

一卷の写経に罪を許される

鳥取県 山本正光

日々暮らす家族の思い気づかずに

浄土へも風はあたたか万福寺

好きなこととして生きているまだ生きる

いい仲間飲んで唄って褒め合つて

種あかし知ればスツポンポンばかり

鳥取県 岩崎和子

見とれちやう夫手塩の牡丹咲く

夫植えた木々のみどりの目映さよ

花が咲き愛でると草も背を伸ばす

疼痛はすでに今無く春爛漫

山菜は少し大人の味がする

鳥取県 松川行男

茶柱に興味示さぬ男達

説教は意見と違う聞いてくれ

上役になりたくないに辞令くる

連休も母の日も無い客がこぬ

川柳塔昇るに妻の援助乞う

鳥取県 山下節子

仏壇の写真に嘘はかくせない

バーゲンで必死で買ったゴミの山

スカイツリー流石とうなる技術です

巣立つ子へ明るく出そうゴーサイン

競り市の蟹のものがきは値を上げる

松江市 松本文子

白鳥が帰って湖はウツになり

老人ホーム予約するのはまだ早い

尊敬する救急車の運転手

全没になった句帖を撫でている

独り言言わせてしまったボジョレ

松江市 三島淞丘

坂の上の雲追っている喜寿半ば

時どきは歪に笑うシャボン玉

老いてなお七つの仮面使い分け

仮面みな剥いたら僕のデスマスク

怖いのは種も仕掛けもない鏡

松江市 石橋芳山

頸椎をすべつて止まらない不安

一斉の罵声の中を逆走す

ひねくれた男が選ぶ隅の方

難しい話うまづらハギになる

因縁のように突然雨が降る

松江市 小川注湖

反省をする人やはり前も見ろ

男料理経済学はありません

年だから診断ハイと聞いている

美容院新奇の話題溜まつてる

勢いのある者先の先を見る

松江市 錦織禮子

一服の抹茶で庭をひとめぐり

知らぬ街どうにかなると風が言う

サクラ草互いの花を思いやり

祭りの夜神を困んで和む膳

返り咲き夢見た服も色褪せる

松江市 松本知恵子

新緑の勢い浴びて山下りる

うぬぼれた人間に天の警告

トンネルを抜け原発の町となる

つつじの香かく想い出連れてくる

うぬぼれを聞いて聞かせて春の午後

出雲市 富田蘭水

真つ赤な日の出を拝む今日も幸

運命知るベッド始めて目をひらく

新緑に負けぬ畑に水をやる

我が事なのに病院検査他人ごとに

抗ガン剤まだまだまだ生きる恋残し

出雲市 竹治ちかし

進化論猿はやつぱり猿が良い

ボランティアいいところ取りでないですか

おもてなしまでも食べさす京の春

おのぼりの目には疲れている都会

記紀ブーム神の匂いのある出雲

出雲市 小白金房子

仏壇の亡母に手向ける白い百合(母の日)

大根の花咲く里や牛の声

一日を大事にくらすドッコイシヨ

食堂の予約子連れの賑やかさ

内職飾つて招く一番茶

出雲市 伊藤玲子

淋しくて心身に塗る故郷の風

故郷は足の先まで癒される

杖の音私の生きる足音だ

競わずに余生楽しむ蝸牛

スカイツリー文化の花が空に咲く

出雲市 多久和 敬子

我が道を進む雑音気にしない
勢いを少し落して下る坂
脇道に進む度胸がまだつかぬ
写真帳トントン昔しやべり出す
信じ合いちよつと騙して二人旅

出雲市 岸 桂子

時々は心に無駄を遊ばせる
失敗もする人だから握手する
父の姿が母の姿が道しるべ
幸せの勲章ですネ笑い皺
妥協して心晴れない日が終る

美作市 大石 あすなろ

摘むのはやめたまだ咲きたいと言っている
星の降る音がしそうな夜の底
言い足りぬ言葉が喉にひつかかる
栄光の過去は語らぬホームレス
切り捨てた尻尾がしやべる過去のこと

美作市 山本玉恵

お年ですと言われ病院きらいです
裏表ない人生の孤独の背
葉ずれ音遠いあの日の夢のせて
女で居たい白寿に近い紅も引く
素通りはさせぬ男に橋ひとつ

美作市 福原悦子

巢立つ子に振り回されている二人
止り木で本音を吐いているめだか
雑魚ですがいつか拳を突上げる
そわそわと呱呱の声聞く祖母が居る
人生の破調に生きた父の顔

竹原市 岩本笑子

玄関の風を誉められても困る
野菜シャリシャリ残り時間は無いのんよ
肩がこったので一番風呂入る
五年日記いいえ葉の周期です
自由という姿で猫が昼寝する

竹原市 石原淑子

入道雲洗ってたたんで着せる倅
向日葵の笑顔勇気を日本力
老醜を敢えて晒すも花水木
かいがいし母の笑顔よ豌豆豆
御先祖の隠れ住んでた里のこと

府中市 岩本雅代

若葉萌ゆ指も萌えます五七五
露天風呂他人同士の暖かさ
飽食の暮しに溜るゴミの山
老大で蝶の変身見て感動
嫁の留守酒の毒舌聞いて耐え

府中市 藤岡ヒデコ

さわやかな風が運んだ萌黄色
異常気象なかなか出来ぬ衣更え
逆縁の甥の淋しい三回忌
法話聞く一年振りの再会で
何食わぬ顔して喜寿が通り過ぎ

府中市 馬場利子

七月の誕生石は持たず居る
不況の風出口が見えぬこの地球
よきことを口には出さず紅を引く
生きるとは助走ばかりの繰り返し
先が見えいらぬ取り越し苦勞抱く

宇都市 平田実男

旧姓に戻り一皮むけました
プライドをまだ捨て切れぬ紙オムツ
集会有一些日が僕の休肝日
八十の坂もやつぱり妻が杖
子のためにじつと我慢の赤い糸

東かがわ市 清川玲子

あるがまま生きてこの地の土になる
たくさんの命息づく土の中
花束になれぬ嘆きの白い菊
花の下だけは平和な声ひびく
声なき声日本列島埋めつくす

東かがわ市 川崎ひかり

百六億どうりで高い紙おしめ
平成に昭和一桁うとまれる
メードインジャパン探すにひと苦勞
周りから世話焼きさんが居なくなる
その内にインコに負ける記憶力

高知県 小澤幸泉

浮くことを教えてくれた塩の海(聖地への旅)
定年のシナリオまでも描き直し
終章の第一行がまだ書けず
終末を思い明日の米をとぐ
遺書を書くその気にさせた友が逝く

唐津市 樋口輝夫

万歩計無茶はするまい八十路坂
酒よりも饅頭がよい歳になり
塩加減秤のような老母の指
うとうとと老母はむかしの夢ばかり
棺の中揺り起こしたい妻の貌

唐津市 山口高明

理想郷いまま夢見し実篤の碑
執権を握り人間小さく成り
民意では無いぞ比例で坐る椅子
杭打ってジュゴンの棲家なくす気か
学生の時から徒党くんだ仲

唐津市 井上勝視

多事多難炊事洗濯家事雑事(老妻入院六ヵ月 5包)

物忘れ施錠火の元二度三度

野菜不足炊き込みご飯ばかり炊く

これほどの仕事を妻はやったのか

妻の留守ピッチが早い晩酌だ

唐津市 坂本蜂朗

鯉職歌う園児の太い口

揺れるたび東京の子に電話する

バランスの悪い夫婦で五十年

未完成あしたへ繋ぐ強い紐

地雷原一歩一歩と現在地

熊本県 高野宵草

スタイルの語感に遠い私です

虚栄心腹に自慢の虫騒ぐ

忍耐の歯噛みへ義理が押してくる

幸せのひとつとき笑顔の中に居る

反省の現場に阿呆な僕が居た

熊本県 岩切康子

増員の難しさ知る勧誘電

刺避けて上手くタラの芽摘んでいる

久し振り見舞えば涙で迎えられる

百歳の達筆羨む私の手

豆焦し始めに戻る味噌造り

(前月分) 大阪市 佐藤忠昭

飲みすぎの反省会で先ず乾杯

失業でツケの効かない顔になる

恐い顔損する事はあまり無い

二次会を断わる勇氣持たぬ僕

勝てば買い負ければ買わぬスポーツ紙

(前月分) 岸和田市 原 さよ子

畔に咲く花もしつかり四季を持つ

庭に咲く花に近所の知恵をかる

余生なお趣味を楽しむスケジュール

老いてなお人目気にする身づくろい

トラブルを避けて小さく生きている

番傘川柳本社八月句会

(47回 水府忌)

日時	8月6日(月)	18時
締切	18時30分	
会場	ホテル大阪ペイタワー	
お話し	「二十四時間女です」	
宿題	森 中 恵美子	
「身内」	選者名	当日発表
「結ぶ」	美馬	りゅうこ
「器」	鮎子	嘉子
「ひまわり」	植野	美津江
「序で」	村上	直樹
「城」	片岡	湖風
各題	2句	席題なし
会費	1,000円	

川柳塔の

川柳讃歌 ⑨

木津川 計

道しるべ手垢まみれの母の辞書

福井 菜摘

この五月に逝った詩人・杉山平一さんにつぎの詩「辞書」があります。

辞書の中に迷いこんで／行きつけないで
／よその家に上りこんで／紅茶をのんで
帰ってきた

人生もまた迷路の旅です。だから「人の世の寂しきものにみちしるべ」(岩井三窓)と詠まれたのです。その寂しさをまぎらせ、と菜摘さんのお母さんは、手垢まみれの人生指南書で川柳への道に導いて下さいました。

涸河渡る列車鋼の響きあり

高橋 宏臣

水量豊かな川は橋脚をやらかく包むのでしよう。鉄橋を渡るとき、列車は「ごとん、ごとん」と響くのですが、涸れた河は、「ギトン、ガトン」と鋼鉄のように聞こえます。

「鐘の鳴る丘」は♪鐘が鳴りますキンコンカンでしたが、その響きは晴天で、曇天なら「ギンゴンガン」と聴こえねば嘘だ、と音感鋭い宏臣さんには思えるのでしょうか。

お互いに行き先言って行く散歩

江見 見清

天野さんの詩「幸福よ急げ」に感心します。老夫婦が女房の誘いで散歩に出ました。辺りを見ながら行った池の傍でアベックがたこ焼を食べていた。「あれはまだ食べたことあらへんわ」と女房の言うのに亭主は、「そんなら今度はたこ焼やなあ、そう言い合つて、につこりして老人たちは散歩した。

夫婦には同伴文化もあれば別文化もあるのです。天野さんも見清さんも幸せです。恐いのは、行き先も言わぬ別々文化なのです。

故郷の山河が消してゆく記憶

足立 茂

故郷への対し方には大きく三つに分けられます。一つは望郷型で、三木露風の「赤とんぼ」や啄木の漁民村恋歌が代表例です。二つ目は、志を果たしていつの日にか帰らん立志型で、錦を飾るべき故郷観です。三つ目は呪詛型で、萩原朔太郎は呪い続けました。さて、茂さんはどの型でしょう。故郷の山河は忘れた記憶を甦らせるのに、違う、消す

のだと。ん？ 恐らく、変容の山河が記憶を消す、失意型な第四の類型かも知れません。

涙だと思ふ溢れているグラス

安土 理恵

杉山平一さんの「詩は」が区別します。

「夜には詩がある／昼にはない／さらばには詩がある／こんにちにはない／敗北には詩がある／勝利にはない…」

この伝で言うなら、涙には詩があり、笑いにはないのです。理恵さんの句が「笑いだと思ふ溢れているグラス」では印象が薄くなり、川柳も詩も孕むものは同じです。ペンを涙に浸して書いた句が胸を打つのです。

六十四だんだん向こう見ずになる

居谷 真理子

麻生路郎は「六十一」まだ情熱は燃えに燃えと炎を噴いて七十七まで爆進しました。真理子さんも情熱的で、六十四にして「向こう見ず」ですからお元氣やなあ。

僕も「向う見ず」で、七十一から「一人語り劇場」を旗揚げしたので。路郎の時代はみな早世で、「六十一」背広の旅をまだ続け」と自慢でしたが、七十六の僕は轍を肩に、田舎道を歩きながらの旅興行です。

『上方芸能』誌発行人

新川柳鑑賞 (5)

麻生 路郎

何の因果か西瓜はつらに値を書かれ

(孤 浪)

夏になると八百屋や果物屋の店先に、西瓜が山のように積みあげられて、のどのかわく人たちの味覚をそそるものである。

ところが、その西瓜のつらに、一々値段が書かれている。何の因果で西瓜のつらに値段が書かれてるのか、西瓜としては甚だ迷惑な話であると、擬人法として詠んだところこの句のヤマがある。西瓜のつらに値段が書かれているのを見てフトとユーモラスに感じたのである。この句などネライの面白さである。

この艶で腹まで腐っていたリンゴ

(どんたく)

リンゴの艶の美しさは処女の頬にも比べられる。しかし、ガブリと歯をあてた時中味が腐って、フワフワと綿を噛んだような味だったとしたら幻滅の悲悲哀を感じずにはいられない。

この句はリンゴそのものを詠んだというよりも、姿かたちの美しい女だと思つていたら、腹の中まで腐っていたという女を諷刺したのである。

押しで行けと云つてた奴が失戀し

(高 志)

「恋なんて、一にも押し、二にも押し、三にも押しですよ」といかにも経験済みのようなことをいつてた奴が、失戀したと云うのである。しかし、それ見たかとも云えない。「そんな時には、まあ一パイ呑んで忘れるんだネ」今度はこつちが知つたかふりなことを云つて慰めても、「酒で忘れられるような恋ではないのだ」と沈むであろう穿ちの句である。

地味に着いても晶子の血がさわき

(友 子)

非常に地味な着物は着ていても、君を思えば与謝野晶子のような熱烈な恋愛の血がさわぐという句である。

「地味に着ていても」で、うちに秘めた物静かな女性の恋のころを充分に汲みとることが出来るし、「晶子の血が」で燃ゆる思いの熾烈さを巧みに表現しているではないか。

別人のような顔して執務中

(美 路)

一社の事務室と仮定する。昨日の日曜にゆかいにアベックした彼と彼女とが机を隔てて、別人のような顔をして執務しているというのである。彼と彼女は課長と女事務でもないし、重役と女事務でもない。とにかく、昨日、ふざけたり、甘えたりしたことは素振りにも出さず、澄まし込んで執務している女をかくも鮮やかに描出して見せた手際を推奨したい。

俄か雨銅像だけが駆け出さず

(花 村)

予想もしなかつた雨が車軸を流すように降る。人間どもの慌てまいことか。僅かな木陰を目かけて駆け出す姿は見られたザマではない。こんな時にも、銅像だけは駆け出さない。平然として濡れるがままに突っ立っている。それは降るものは降ると悟つた姿であるとも云えよう。しかし、人間とは考えさされもするが一読ユーモラスな感じのする句である。

引返す勇氣もほしい山登り

(万 古 人)

夏休みが来ると、年々山登りが旺んになるようである。そして、昨日も遭難、今日も遭難で、若者のいのちをむざむざと奪つてゆく。山に対する経験の乏しいものもの無暴さをいましめた力強い句である。

白選集

小島蘭幸

カープ命の二女がお嫁にまだゆかぬ
詩集読むハート鍛えているのです
プロとして輝きだしたのは銀だ
過去未来一千号にある絆
握り拳二つと耐えているのです

恒松町紅

老いの癖ですと笑ってすまされぬ
晚酌の味が染みこむ総入れ歯
弱音など吐くなど老いの背を押され
何気なく口に出してる出雲弁
側からの元氣もらって呑む食べる

津守柳伸

GWを無事に過せたかしわ餅
自立心育む愛の平手打ち
雪解けへ風が味方の鯉のぼり
自尊心捨てたところから後齢者
満月が覗く至福のしまい風呂

遠山可住

都倉求芽

演説の下手な候補でまじめそう
夢一パイ孫の漢字の名が読めぬ
熱弁の拍手を票と勘違い
ええ人やけど相性が合わぬだけ
介護用器具にこにこ迎えられ
連休の雑踏連れて孫が来る
それなりの時間が浮かぬ休刊日
早寝するようになった妻も僕も
少し休めと鏡の顔が言うている
本当の休みは煙になつてから

土橋螢

高い樹にとまつたことがない燕
さむらいの無念を知っているさくら
友だちを誉めて世間を広くする
長男の扶養家族にしてもらう
波高くなれと歌った海ゆかば

中原諷人

介護扶助まだご心配かけまする
母の日の老いたクシャミが熱を出す
老衰やバイオリズムの波うねり
母を看ながら還暦と古稀くぐる
白寿から百寿に母の四月馬鹿

西出楓楽

神様の好きなロシアンルーレット
瞬きの音がしそうなつけ睫

風さやかちよつと自分を甘やかす

飛花落花こは仮の世なのだろう

ジグソーの一片なくす梅雨の冷え

仁部四郎

お品書きカタカナふえて三代目

店屋ものやつぱりいつものものになり

駅前うどん屋ネオン審議中

大将の味マスターが継ぐカレー

駅前のカレーソースの太い瓶

林瑞枝

悠久の自然は恋の船溜まり

東京の娘のよろこび台場の松の影

陽の匂う文字に体温ある手紙

戦中派苦勞ばなしをして笑う

金色夜叉の明文たちは宙で言う

前 たもつ

GW明るいニューストキ育つ

GW虎の連敗見ていたり

GW木洩れ日浴びて城散歩

GW竜巻恐怖都合なし

GW優先順位礼拝堂

政岡未延子

柿若葉ゆつくり大人になればいい
青の幻想刻は私を老けさせた

神話いきなり千三百年を引き戻す

大正の歌を唄うとおふくろが泣く

訳ありのような散り方白牡丹

三宅保州

思いやりのこもつた嘘もあるのです

出世という餌がいちばん効果的

バランスの極致シンプルイズベスト

歳月に裁かれ角がとれました

死に顔を他人に見られたくはない

宮西弥生

ぶらぶらと怠けたぶんを生きてやる

ふるさとでぶらぶら笑顔戻つて来た

盃を伏せた裏にあるいくさ

折り紙でやさしい仏さま出来る

山の辺の歌碑眩しくてなたね梅雨

八木千代

「法務省」
贈本をじっくり見るも久しぶり

巢別れの名に愛しさがこみ上げる

わたくしの名だけ消さずに機械文字

欄外で覚悟うながす法務省

ひとり往くのか来たのもひとりだったから

八十田 洞庵

み仏は化粧せずとも器量良し
大往生ひとは言うけど悲しいな
太陽の恵みに芽ぶくこぼれ種
有頂天の帽子はすぐにとぼされる
ぴつたりと言われて買う氣試着室

兩川 洋々

放射能怨むが故郷捨てはせぬ
ときめきを乗せた春風僕に吹け
罰金ですむなら不倫してみよう
錆の浮く脳をリフオームして欲しい
窓際が似合う男になり下がりがり

河井 庸佑

目が覚めた今日の命に感謝する
再びは来ない今日無駄にせず
楽しさを暗転させた車事故
残り福信じて先に手は出さぬ
世の荒波に揉まれ抵抗せず流れ

川上 大輪

自分史はまだ横道に逸れたまま
主語のない会話やつぱり夫婦だね
不眠症流れが少しずつ変わる
止まったら私も川も澱みだす
ぼちぼちでいいよ定年後のリズム

木村 あきら

爆音も聞かずに過ぎた七十年
伝来の農を守って九十年
定年で不要になったゴマスリ器
赤字でもヘソクリだけは貯めてあり
何を着て行こうと傘寿でも女

小西 雄々

大山を背筋のばして仰ぎ見る
ちぎり絵の椿に思う母のこと
還らない兄へ七十年すぎた
誰が食う一萬円の松葉蟹
氏神へ五年たつても行つてない

斉藤 焔

理科室ですくすく子らの芽が育ち
森の切株で明日を模索する
甲子園で頭脳プレーした帽子
画紙いっぱいいきいき走る子の絵筆
目札を交わして道を譲り合い

奥田 みつ子

久しぶり朝のラツシュに氣をもらう
四十年沖繩の現実祝えない
金環食わたし傘寿のお祝いか
ひとり住み気楽の裏にある不安
気楽さに影の支えが有難い

板尾岳人

正論を万年筆が味方する
がむしやらにおんなを守る ねつくれす

果てしなく僕を褒めてる憎い妻
折り紙のキリンの首にあるコント

薔薇に棘あること知らぬ紳士録

塩満敏

長生きし孫の結婚見届けた

大阪の市長なら憲法守るべし

歳時記に鶴彬忌載せる年

幸せな椅子は美女のヒップ載せ

四月からメダカの学校やつてます

新家完司

さくら散る隣はポチのお葬式

ピーヒョロ口大根島は花盛り

十日目の牡丹は後期高齢者

上弦の月の形の脂肪肝

逃げないで瓦礫の山と向き合おう

第131回 大阪川柳の会

日時 8月20日(月) 午後5時開場・18時締切

会場 ホテルコムズ大阪 地下1階アーバンホール

宿題と選者(各題2句)

△「時」代「失沢」和女 △「混ぜる」赤松ますみ

△「節」電「山岡富美子」△「やはり」磯野いさむ

会費 1000円 欠席投句 8月18日まで 本田智彦宛

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

温故知新

『清水白柳遺句集』より

大臣の花輪は色のあせるまで

たばこやのとこで木枯曲がるなり

団地出て土やわらかいものと知る

百合咲いて天気予報をあざ笑う

夫婦二タ組どちらも女肥えている

正直に言うて薬局ひまが要り

左利き食欲がないように見え

壁に塗る土へ雑草根をおろし

着飾った女を脱がす眼に出合う

半額は踏み倒す気の前払い

先生が動けばうごくみんなの眼

酔眼もうろう大切なものまたぐ也

腰かけを積んで屋台も朝となり

冬近きサーカスの旗雨に濡れ

今日もお休みと失業へ無邪気なり

まん中に交番がある長い坂

グループのおばはんひとり小走りす

反戦の旗を見おろす鳩の脚



川上 大輪 選

山口市 中前 幸子

主語ばかり並べて夢が描けない
空っぽの頭の中で独楽まわす
海鳴りの夜葬った愛さがす
こめかみが拒否反応をして困る
廃屋の民話を語る風という
青葉ゆらゆらわたしの企みをのぞく

松江市 藤井 寿代

あの人を待ち続けてた風の駅
恋のしづく払って恋をあきらめる
あやふやな心を抱いたやじろべえ
ブレーキを踏む準備はいつもしてる
分離帯切れたあたりが揉めている
綿棒がそつと核心ついてくる

岡山市 工藤 千代子

新刊を開き孤独を追い払う
空腹を満たせば平熱に戻る
ひらがなで痛いところを突いてくる

今日使う笑顔少々不足気味

小さな抵抗 つぼみのまま枯れる
吹っ切れぬままの四角いお月さま

橋本市 石田 隆彦

ライバルの扉もたまにノックする
打ち明ける勇気が咽に引つ掛る
子にとつて亡くても親は重石役
朝ドラが忙しい主婦の手を止める
逃げ技で星を稼いだ勝名乗り
半音を下げて深夜の口げんか

八幡市 今井 万紗子

春はそこかなり濃い目の紅をさす
誉め言葉老いの境を温くする
平凡な恋にスパイス振り掛ける
忘れたい過去にかぶせる蓋がない
蓋取つてときどき噂かき混ぜる
味のないロマンスでした蓋閉じる

北九州市 小松紀子

一つ覚え一つ忘れて老いの坂
失明の老猫園を嘆かない

なんだっけが多くなつたきのう今日

ごめんネと一言いえば楽になる

なる様にしかならないと出た答え

はてどなたとは言えぬから笑ひ返す

竹原市 國實 力

回り道寄り道ついに八十四

お金持ちみたいな顔に惚れたのに

昔はね正座で法話聞いたのよ

何色を足せば余生に艶が出る

もう一度褒めとお隣りの野菜

断ると言わず考えとくと言う

大阪市 高杉 力

戻りたい昭和 忘れたい昭和

恋続くええとこ見つけ合いながら

幸せの物差し変えて楽に生き

遠来の客だコーヒーサイフォンで

人参も少し入っているジューズ

カニふぐは例外なのかダイエツト

竹原市 若年 幸子

花びらの踊りと語り合うカメラ

森林浴みんな美人になつていく

バラ一本誰に告白するのだろ

焼けすぎのパンが一枚残される

一心と書いて少うし筆休め

竜巻に注意をしろと言われても

紀の川市 辻内次根

咲いて散るさくら今年は見えていない

この人と何処かで会つたことがある

脳トレになるかくすりのカタカナ語

納付書に追われこの世が嫌になる

お食事と丁度テレビの便秘薬

絵手紙にうれしい花の春になる

池田市 上山堅坊

うやむやにしないでほしいマニフェスト

サイコロで決めてもいいな老いの恋

役員に推され張り切るボランティア

未だ元気なのにあれこれいう息子

長生きへサプリを飲めとコマーシャル

余生ですうんと明るく生きなくちゃ

札幌市 佐藤 登美子

種蒔きをせよと山鳩姦しい

初打席いきなり入るホームラン

不器用を嘆くと父が夢枕

行く先が気になるらしい両隣

一癖の馬飼いならす妻の皺

紆余曲折夫婦の絆固結び

神戸市 能勢利子

カーナビより勘を頼りにする夫
避難袋水乾パンは期限切れ
忘れても思い出すまで気にしない
ゼロ歳児家族全員振り回す
定年後妻に教わることばかり

神戸市 木村忠義

花は皆最高の美の自己主張
体調の快復景色美しい
赤ちゃんの肌は若葉のように見え
日本地図貼って自分の土地と見る
おかしいぞ忘れることが増えてきた

神戸市 新保登美子

万札を崩し太ってきた財布
見送られ背筋をシャンと伸ばさねば
切れ味の良い包丁は棚の奥
積んどくの山積み直す休刊日
あやふやな記憶で綴る旅日記

加東市 安達厚

初物の西瓜回転寿司で食べ
最高の味は空腹だとわかり
朝の雨今日の予定を狂わせる
聞いとけばよかった母のかくし味
山椒の葉のびて筍待っている

篠山市 酒井真由

こつそりと覗くあなたの秘密基地
来て下さい人には知られないように
奇跡としか思えぬ君のホームラン
乾杯につられて鬼が迷いこむ
少年が屯す個性のない街で

三田市 雑賀一泉

嬉しくもケーキもないがバースデー
タンス預金あるわけないがひよつとして
患者への檄ならウソも許される
度の過ぎた笑顔の裏を読んで見る
試食して買わず立ち去るのも勇氣

三田市 上田ひとみ

その眼鏡はずせばきつとシャイなひと
噂では夢は叶うと聞いている
とび出せばほらこんなにも軽い脚
この風をいっばい吸って泣くもんか
じゅげむじゅげむわたいい子かしこい子

宝塚市 丸山孔一

お迎えを待つと言いつつ葉飲む
同窓会業で終るフルコース
遠吠えを聴いて合唱したくなる
気にくわぬやつがやたらと付いて来る
欲しいもの無くなりチラシ邪魔になり

西宮市 泉水 冴子

本当の苦勞した人しやべらない
わたくしの図書館になるタブレット
推敲をしすぎて私が居ない
相性もよろしいようでさくらんぼ
だんだんと数より質になる齡

大阪市 松田 聰

からまれてからみかえした酔っぱらい
ふりむくと迷いが深くなつてくる
思い出にひたる暇なく流される
負けないでそんな言葉を軽く聞く
何の日か気にもしないで休んでる

大阪市 柴本 ぼつは

七十五歳妻のいけずはほんまもん
七光り嫌い通して旅役者
七転びのまま自分史閉じた父
七つの海見て来た娘まだ嫁かず
七変化永田町なら可能です

堺市 羽田野 洋介

テレビ消しやつと自分を取り戻す
希望するだけではドアは開かない
腕試しあんなにうまくいったのに
飲むほどに仲間の絆強くなる
この世相一年中が四月馬鹿

池田市 多田 契子

噛み切つたするめに歯痛かえされる
インフルに異空間へと運ばれる
ぼつぼつと鬼が来るらし豆を炒る
悲しい事ぼつぼつ捨ててみませんか
平凡に花も嵐も少し踏む

泉佐野市 稲葉 洋

危機管理とつくに落ちた飛翔体
ゲリラ雨何に機嫌を損ねたの
気の迷い濾過してくれる天の青
大きくしゃみ儂が噂の主らしい
大方は歳ですなあで片が付く

川西市 山口 不動

古稀過ぎて同じ葉を飲む夫婦
ふられても脈はあるでと笑つてる
よく持てる虫の好かない奴だけど
ストレスを解消してる無駄話
タイプだな浮気の虫が目覚ます

岸和田市 増田 隆昭

今日の無事謝しつつ日捲りを剥がす
神童と呼ばれた友の認知症
やりくりの話はしないクラス会
廃校後も校歌生きてるクラス会
年金の暮らしに縁のない貯金

豊中市 池田 純子

思ひ出は普段使いの腕の中
青春にきやしやと度胸が同居する
ウトウトと深い迷路に落ちる春
母の日にお赤飯よと遺影にも
落書きが溶け込む壁の家がある

富田林市 関 よしみ

書き損じまた書き損じラブコール
病みし身にヘルパーさんという家族
遊ばれているとは知らぬ蛙の子
顔浮かべあなたへ贈る白扇子
一番茶ひろがる口に湧く力

寝屋川市 岡本 勲

アルバムのこの人まさか俺の妻
ピッターとは歩幅合わぬが仲がいい
そんな子に育てたおぼえ少しある
玉の輿乗ったとたんに転げおち
乗り替えもつぎ木もできぬ歳になり

阪南市 坂口 公子

竜巻のなんとなんとの暴れよう
金倉が在ればだけでも月旅行
子供等に気に入られるような遺言書
老齢だから来い来いなんて言われても
歯痒さは杖もとうとう似合う齡

松原市 市川 雄太

嘘ついて出世しよう和小競り合い
カクテルの色は自分の心です
一分でも遊ぶ時間が大事です
ため過ぎたストレス出してみませんか
苦悩の日々も宝になると信じてる

八尾市 田邊 浩三

尾頭を用意して待つサクラサク
鯛焼きをかぶる彼女に惚れ直し
畳替え古新聞に読み耽る
折角のスマホも女房メールのみ
猪豚じゃないかと揉める牡丹鍋

大阪府 小栢 こずえ

明日という日が来るから早寝する
まだ出来る意地が疲れの元になり
美味しいと言われ自信に花が咲く
怠けてはいないが歩み遅々として
急ぐことがあるのに出来ぬもどかしさ

米子市 野川 宣子

飛んで出る度胸もなくて群れに居る
私の都合で進む二十四時
初物を食べて今年も生きのびる
右も左も食べてる顔は円満だ
老いふたり一升釜を持て余す

鳥取県 大塚 美代子

停まるたび土産に走るバスツアー
客二人乗せて田舎の路線バス
美人湯に話はずむ露天風呂
かき捨ての旅で笑ったどじの数
喜寿の旅しつかり胸に親娘連れ

倉吉市 岡崎 美知江

人生の厚いページはまだ続く
枝を切る鉄の音に嘘はない
咲く時も散る時も風さわぎ出す
洗っても流しきれない罪の数
ワインではまだ見えかくれする本音

倉吉市 前田 喜美子

朝が来てするりと起きるこれぞ幸
漠然といつか来る日を思う八十
気掛かりな砂上の政治永田町
玉砂利に手こずる庭の草むしり
息子にと密かに思う隣の娘

奈良市 前田 弘恵

一頁読んだ続きは夢で読み
隣人に無事を伝える雨戸開け
言葉尻捕えきれない耳苛つ
独り居は今日も喋らず日が暮れる
レトロ服捨てよと出して踏ん切れず

奈良市 尾畑 なを江

ときめきは箱詰めにして小出しする
回り道今は坂道下つてる
お土産は軽く小さいもの選ぶ
知らぬふりするたび我慢強くなり
耳の底ああ母の声父の声

奈良県 谷川 憲

国訛潮の香りを連れて来た
朝電車メールが喋りやうるさかろ
分かったと言うが最後は我を曲げぬ
受話器からオレオレと言う声がある
老いの坂ガタピシギーギ音がする

田辺市 小川 イセ

母の辞書休憩の文字見当たらぬ
頬染めてもじもじしてる青い恋
雨後の竹の子私あんなに伸びたいな
子の便り涙ぼとりと字が滲む
生きて行く無駄な荷物も背負いつつ

和歌山県 森下 よりこ

かたつむりが生まれる今日も雨である
満足度百パーセントうまいお茶
雷が空襲警報みたいだね
竜巻の知識毎日テレビから
絵手紙で連絡がくる粹な人

雲南市 菅田 かつ子

雲困気に流され酔うてきたグラス
深呼吸背なを伸ばしているつもり
褒められてくすぐったくてうれしくて
塵出し場カラス狸と揉めており
親友という名で杖を支え合う

松江市 相見 柳 歩

仕事する全て遊びの要領で
残されたひとの中から妻探す
声聞いただけでますます好きになり
目指そうよ家庭も国もユートピア
よく切れるはずだ毎朝キスをする

岡山市 藤成 操 江

一日を反省ばかり夜の鏡
吹っ切れたあたりで気力湧いてくる
気まぐれな人だがなぜか温かい
目も耳も加齢のせいにされて雨
来年も欠けず会いたし花の下

岡山市 前田 恵美子

知恵袋いつになったら活性化
旅の夢綿毛に乗って空を飛ぶ
荒れはてた庭でウグイス鳴いている
カタツムリ私の方がまだ鈍い
野菜さんごきげんいかがが朝散歩

広島市 岸本 清

悪友はいつも手ぶらでやって来る
酒は良い心の凝りも和らげる
旅慣れた友の手荷物一つだけ
生き甲斐に色んな役を背負い込み
抜け毛ケア頭皮を叩く音空し

阿波市 三浦 千津子

新緑の生気いただく深呼吸
繰り言を母の気持ちで聞く余裕
いい味が出ている母の匙加減
正直な鏡が好きになれない日
わたくしの誇り微笑み忘れずに

今治市 渡邊 伊津志

切れ者じゃないが笑顔の絶えぬ人
曖昧な記憶が周囲振り回す
盲導犬無駄な動きは見付からぬ
旨そうな目が一番に食べている
隠し味程度の嘘を混ぜておく

大洲市 花岡 順子

健康のレシピに味が欠けている
考える振りをしている将棋盤
軸足を変えたと視野が広くなる
ファイナレはまだ見えてない絶頂期
けらけらと笑ってさくら風に乘る

山鹿市 三谷 たん吉

憲法の記念日なのに国旗なし
君が代も国旗も無視の日本人
悪いこと直せる奴が見当らぬ
満月に向き合う資格田舎だけ

山鹿市 米加田 恭代

考察は物より人が面白い
言い訳をぐつと飲み込みごめんなさい
恐怖症克服したらスカイツリー
過小評価している君の笑顔好き

シドニー 坂上 のり子

ジェスチャーと笑いで交わす外国語
手を振った後姿が点になる
帰路近く急に気になる猫植木
旅終えてぐったり大の字に眠る

弘前市 高森 一 呑

卓袱台に父のオチヨコがセピア色
ひだまりで昼寝楽しむ花筏
笑い袋さがしに街にぶらり出る
募金箱どこでどうして生きてるか

塩竈市 木田 比呂朗

母の日も父の日も過ぎ恙無し
ファッションへ進化しましたクールビズ
節電を唱え連夜の缶ビール
涙腺はいつも閉じてる胡蝶蘭

昭島市 野口 忠

大粒の涙が主張する二歳
マドンナに告白されて抓る頬
貞淑な妻にもあつた牙の跡
警察が裏をかかれたノーマイク

東京都 大竹 一良

スーパードで値も見ずに父籠に入れ
大失敗開き直つた酒の味
ほいほいと安うけあいでも損かぶり
甘い顔つい誘われて午前様

横浜市 巖田 かず枝

語つてよ戦争の事真実を
少々の暗い暑い我慢する
強がりと言つても葉飲んでいる
年寄りと言われそうだよ四時起床

相模原市 赤木 妙子

辞書めくるまるで読書をするように
眠り薬に古典落語の一節を
落語は父川柳祖父の血で目覚め
青さ少し残したままで老いていく

佐渡市 高野 不二

私のは使えぬ臓器ばかりです
テレビ見る為の曜日は覚えてる
びつたりと葉呑み切る事がない
貰えそうにない年金を掛けている

富山市 有澤嘉晃

一つの夢命を燃やし追っている
店先の野菜に浮かぶ農の汗
覚悟したようだよさしい顔になる
子の疑問知ったかぶりでかわすパパ

岐阜市 平野あずま

行先を知らずに蟻の列に入る
一寸に満たぬ藁天目指す
見え透いた嘘丁寧な厚化粧
在宅の日日ベン胼胝に励まされ

静岡市 渡辺芳子

天国で歌って欲しい声の友
せつかちににらまれている赤信号
サビ釘になって個室に居坐りぬ
引力に負けたくなくてマッサージ

熱海市 三谷圭角

童謡で喜寿も傘寿も元氣出し
夜半起き昼寝のし過ぎ思ひ出す
何時がわが寿命なのかと鏡見る
老人のヘソクリ宛に予算組み

江南市 脇田雅美

踏まれても野に咲く花に意地がある
年寄りを急かす青色信号機
遺言にあれもこれもと書いた父
夫婦茶碗欠けても笑顔夫婦仲

豊橋市 藤田千休

お守りに一度聞きたい守備範囲
廃線のバスストップは風ばかり
会ってすぐ娘をくれと馬の骨
集落に主役がない子供の日

愛知県 樺嶺志

古き友ひよっこり一本ぶら下げて
明日ゴルフ笑顔で去った友へ雨
昼は鮎夕卓秋刀魚季を忘れ
肌寒い春初夏と書く挨拶状

京都市 清水英旺

花売りは花に負けないいい笑顔
空想と遊ぶ時間がふえてきた
ああでもないこうでもない脳試す
白地図に変哲もない足跡ぞ

大阪市 西川冷子

子供連れ躰のなさに疲れ切る
津波来てわたしの旅路消し去った
フラワー園彩り薫る庭作り
はまなすの手折れぬトゲに困り果て

大阪市 前川善之

手入れさえすると使えるこの体
大津波で流れたボールから絆
物言えば心の中が見えてくる
外れくじ事故に遭わないおまじない

古来稀もう古くさいその言葉

京の水すいすい魚泳がせる

満開の桜見ている防護服

原因は飛ばんボールと言うけれど

大阪市 平井露芳

酒ビール人間動かすガソリンだ

許されて菩薩の顔をじつとみる

駐車場車はやつかい物になり

年寄りはお医者通いも趣味のうち

大阪市 浅井公平

しつこいなあかん言うたらあきまへん

開幕戦負けてストレス始まった

沖繩にNOと言えない義理がある

カーネーション岸和田弁が光つてた

大阪市 太田としお

夢やろか昨夜向かいでボヤさわぎ

ダイエツト用に大根煮ています

五月病人生まだまだプロログ

さつきですツツジと一緒にせんといて

大阪市 安藤なつこ

定年で憧れた暇持て余し

肩叩き本音が見える孫の知恵

母の日と優しさ届く花一つ

我が家計こまめに締めてゆとり出し

大阪市 阿野寿美子

万緑の奥より唸るバイク音

嫌われも知らず毛虫が罷り出る

よりテンション上げて老鴛法螺を吹く

ストレスと睡眠不足を皮膚に溜め

大阪府 高木道子

経済は金が回つてこそ活気

日米欧いずこも満身創痍です

死の灰の危険孫子に残せない

渡り鳥災害列島敬遠し

堺市 増田和幸

もつともつと泣こう笑おう心から

高速が通りふる里他人めく

父母居ない実家の敷居高くなり

もたついて何度やつてもこんなざま

堺市 近藤治子

春よ来い黄砂の土産もたず来い

酒飲めず損をしたよなクラス会

同窓会躰には触れぬ思いやり

節電にひと月早いクールビズ

泉大津市 助川和美

はらはらもどきどきも無くただ同居

肩書きが外れ自分を見失う

弁解の余地の中には嘘と策

風当たり真っ直ぐ受けて立ち直る

河内長野市 藤塚克三

岸和田市 中岡香代

古代史のロマン化石が語り出す
子の目指す未来が違ふ反抗期
見え見えに騙されてやるのも辛い
大切に育てた花の半開き

河内長野市 穂口正子

人知れず警戒地域花見頃
今年また老いを知らせに桜咲く
同じことまたしゃべってるこの人に
お婆さんあなたは誰と見る鏡

河内長野市 渡邊修

朝晩もヘルスに乗って気を使い
安パク文句言つてはまたメール
竜巻に孫悟空さえ乗り遅れ
ここに来て政策飛んで受かる術

河内長野市 大島友子

楽におなり重い上着を脱ぎ捨てて
石橋を叩きそれでも渡れない
趣味一つお一人様を支えてる
いつかオーラ放つと誓う舞台袖

河内長野市 谷久美子

節くれた指が知ってる野良仕事
ブライドが邪魔をするから出遅れる
地図追ってノスタルジアに浸る午後
媚売って後でどっぷり自己嫌悪

河内長野市 木見谷孝代

手折るなどあざみの棘のひとり言
煽られなかなか役を降りられず
おこごとが葉のように効いてくる
詰めすぎてストレスたまる予定表

河内長野市 山本エミ

何か変言葉の端に出た皮肉
黙秘権喋ってくれたベアルック
六根清浄苦しみ救う登山道
地球の日来世讓れぬシーベルト

河内長野市 梶原弘光

買い立ての自転車見せに森へ行く
新緑の風がペダルにタツチする
形から入り形の中に居る
不景気な顔も見せずに花爛漫

河内長野市 辻村ヒロ

定年後妻に合わせた時間割り
ちゃん付けでお下げに戻るクラス会
お若いとお世辞言われた心地よさ
競争心笑顔で隠す同年

河内長野市 松岡篤

通学路疲れた顔とヤンチャ顔
ネズミ見てフンとあしらう家の猫
吊橋でお喋りさんが黙りこみ
掻くたびに痒み前線移動して

高槻市 田中 由美子

自分自身を信じ切れない物忘れ
スタートで遅れた亀は考える
予報士も想定外の傘を持つ
爪に火を灯し育てた子がニート

豊中市 荒巻 夢

痛み止め飲んで出掛ける花見時
好奇心テレビの旅で宥めてる
暖房器と扇風機とが同居する
人の手の温みじんわり肩たたき

豊中市 源田 啓生

苦しさをオブラートして飲んでいる
維新の会時々花火揚げなはれ
分け入っても分け入れど宇宙謎ばかり
世は薫風我は骨折苦吟中

豊中市 貝塚 正子

酒やめた今日からオハギしぶいお茶
さみしいと指が言ってる禁煙中
察してよしびれてるのよこの足が
誘ってよ地獄にだつて付きあうよ

富田林市 山野 寿之

新しい風が私を呼んでいる
偶然に出会ってからの恋ひとつ
俎板の凹みに見える妻の意地
四幕目仮面を捨てて僕らしく

富田林市 古田 千華

ほどほどの仕合せ願う縄電車
負の連鎖日本中で事故多発
涼しさは憤怒のしぶき上げる滝
滝しぶき浴びてひととき避暑気分

寝屋川市 小谷 滋彦

花柄のマスクにかくす花粉症
安全な車間距離こそ嫁姑
薫風に夢いっぱいランドセル
辻褄をどう合わせるか蜃気楼

羽曳野市 安本 美喜

童巻の一疋二疋猛威知る
富裕層つてにつぼんに居るのかな
濁りなき心を持つて何にでも
若葉寒クールビズとの風邪も引き

羽曳野市 磯本 洋一

原発の無い国夢見節電す
ひらめきを一晚過ぎて思い出す
池静か蛙と遊ぶアメンボウ
鯉職 贈った孫も成人に

東大阪市 西田 いくひろ

目に青葉若葉が外へ誘いだす
オール電化疑め節電させられる
プライバシー保護で名簿閉ざされる
底上げの土産見栄えで買っている

桜咲く思い浮かぶは友と酒

枚方市 松原 保

時は今想定外が乱れ飛ぶ

国ほろぶいつまで続くこの騒ぎ

老犬と互いの歩幅見て散歩

枚方市 河田 洋子

仏壇に朝一番に祈る日々

一日を終えて感謝の床に着く

特売と聞けば財布の紐ゆるむ

惚け防止編物に精出します

箕面市 寺井 柳童

背伸びしてスカイツリーは世界一

車椅子交じる親子の徒競走

三きようだい互いに競いロンドンへ

白寿まで生きてわかれは別のもの

箕面市 酒井 紀子

虫よけの薬も効かぬ男たち

虫くいの亡夫のセーター捨てられぬ

父の日に父居るごとし話しかけ

父の日に父を偲んで酒を買う

八尾市 山根 妙子

ちろちろと落葉をくぐる春の水

暗転の舞台さながら花のあと

雨あがり竿のしづくについ見とれ

残りもの混ぜて即席ちらしずし

外出は鎧兜で身を守る

八尾市 前田 紀雄

災厄が絶えない日本祈祷する

格安便安全までは保障せず

再稼働ダメなら値上げ許せない

大阪府 神野 千恵子

何時からか傍観してる自分が居

栓抜きが暇だと缶にぼやいてる

病院で時間の浪費など思い

親だけが読める名前の新入生

大阪府 畑中 節子

朝掘りの筍夕餉の顔となり

無住寺の桜淋しく門に舞う

昨日降り今日もまた降る梅雨の入り

朝散歩景色ごちそう息吹く春

大阪府 石田 ひろ子

ブランドの売場にそぐわないわたし

ブランドになつて水茄子ツンとする

猛者揃う句座でのたうち指を折る

お手持ちの草餅午後の茶が笑う

神戸市 輿水 弘

笑われて楽しくさせてまあいいか

青だけで渡ってきたが悔い残る

夕闇の響く鐘の音飲む合図

朝掘りのかぶらの白さ艶めかし

神戸市 白川 淑子

背伸びした日が詰まつてる日記帳

指切りの余熱二人の内緒ごと

爪に絵を書いて出来るの家事育児

未来より過去が輝く寂しい日

神戸市 長川 哲夫

しろがねの衾たじろぐ春の使者

パワー全開卒寿の口がよくすべる

鯉のぼり呑気なものよ風まかせ

日本の匂い風の中土の中

神戸市 山根 弘子

招かざる客が笑いをさげてる

坂道を人という字で支え合い

落款を押して展示の句が映える

ざわめきに春の兆しが目をさます

尼崎市 市坪 武臣

生命線短いけれどはや古稀に

ひよつと口を横から出して揉める羽目

問診表嘘を書きたい酒量欄

お帰りと響く故郷の寺の鐘

尼崎市 小池 幸子

両隣独居老人高齢者

すすむ老い弱音思わず口に出る

もう少しあたりで止める腹八分

返事はないがわかった顔のうちの猫

加東市 岩本 美緒子

春が来た山は若葉の目覚め彩

愛らしい曾孫手を振る帰り際

今年も会う千年藤の棚太樹

居直って生きるしかないご老体

加東市 黒崎 美紗子

訪問の何用なのか黒カバン

順番のことわり出来ぬ役つとめ

強い風飛ばされまいと急ぐ足

老いるとはみんなおんなじなぐさめる

川西市 日野岡 和之

各停で良かった人生観る桜

老いてなお暑さ寒さに文句つけ

目いっぱい笑って歌う演歌道

倅せの記憶は記録また明日

篠山市 谷田 多美子

虎ファン婆ちゃん炬燵で旗を振る

信じてた灸もききめがなくて春

積み上げた我が家の歴史子に託す

花吹雪あの人か知らひよつとして

篠山市 永井 かほる

年とって姿変われど声同じ

本当の匂は私の野菜園

へそくりの袋が弾けしほみ出す

こっそりと監視カメラに覗かれる

篠山市 佐々木 勇

敏感な犬の尻尾にある予感
ネギ刻むリズムに今朝が動き出す
オクターブ下げた声から出る本音
じつくりと聞いて頷く好きな耳

篠山市 北澤 稠 民

あの人もこの人も好き罪深い
人妻のなぜか気になるあの一句
老いて行く現実直視したくない
田の匂いやつぱりここが落着いて

篠山市 藤 井 美智子

不思議やね音声電波でうちへ来る
無事にねと思わずバスに声かける
欲言わず置かれた立場に感謝して
老いの身へいいことこつそりためしてる

篠山市 酒 井 健 二

緊張感少し流れて座が開ける
宝クジ奇跡を信じ何千万
正調のウグイス聴きに竹田城
戒名と来世請け負う布施の高

三田市 辻 開 子

春眠がねぎ刻む音遅らせる
匂の味必ず食し出す元氣
携帯を換えてメールが溜りすぎ
他人事黄金週間なくてよい

三田市 尾 崎 一 子

生きてこそ泣くも笑うも供養なり
満開も散る桜にもある気品
足腰が折れても達者減らぬ口
生きたいと思う心が奇跡呼ぶ

宝塚市 生 駒 利 明

なさけなや力むたんびに声が出る
錆びついた心を解かす孫の顔
いやなやつ味方に入れてほつとする
洩らすなよ言うたしりから皆知れる

西宮市 株 元 玲 子

まだ出来ると呪文のようにいいきかす
スマートホン便利が過ぎてややこしい
老いの一徹五月の空を泳いでる
脱原発ムンクのように叫びたい

三木市 山 口 久 子

衣替春夏秋冬早すぎる
五月晴れひ孫の鯉が誇らげに
過ちを言訳しすぎ失敗し
見る人を山紫水明誘うよう

和歌山市 坂 部 か ず み

冬物のシャツ一枚を脱皮中
体操のリズムが合わず慌てだす
五月雨誰かの所為にしたくなる
一斉に若葉広げて自己主張

和歌山市 平田元三

なるほどの手持ちが多いお年寄り

今日こそは黙っていたい救急車

惜しみなく曝けるきつと気が晴れる

稲村の火何げなく見た紙芝居

和歌山市 磯部義雄

ごみ出しの懦夫はマスクにサンングラス

叱られて貝になり切る反抗期

王手飛車ハツと気がつく一大事

まだ杖は要らぬ御前が愛のツエ

和歌山市 坂田喜久子

ひとつだけ空気読めないドミノある

メールからおいしい匂い漏れてきた

はいはいと口よりも手が早やとちり

あのころのドングリ今も背くらべ

岩出市 村中悦男

なるようにしかならないと発芽待つ

勲章の裏に笑顔の妻がいる

靴ひもをしめれば若くなる歩幅

歳だから遠い耳にも幸がある

紀の川市 楠原富子

逆転の一打に今日もくやし泣き

いかなる時も母は笑顔で自然体

車間距離ほどよく開けて仲が良い

したたかに生きて孤独に耐えている

田辺市 大峠可動

生命線これより先は白寿の世

風習に沈み化石になつていた

血縁という筋があり逢いに行く

喜怒哀楽一度も来ない福の神

鳥取市 坂本とも湖

若者へ皺寄せゆずる消費税

逆算の泣いた人生無駄にせぬ

笑うなよ老いには老いの愛芽生え

日の当たる老母の部屋には猫も寄り

鳥取市 津村律子

地球の怒り地震竜巻雨霞

あせらずに百まで生きるコッ学ぶ

かぞえなら百二歳です叔母元氣

デイサービス明るい叔母の弾む声

鳥取市 近藤秋星

千本桜散らずに待つて居てくれた

負けん氣で八十年を生きて来た

明日よりも今日が大切今日を勝て

挑戦に応じた亀の闘魂よ

鳥取市 山口千代子

喜びも悲しい時も酒が出る

勿体ないと娘のお古母が着る

幸不幸色んな形があるようだ

賢人美人見上げられるも此の世だけ

鳥取市 大前 安子

荷物にはなりたくないと言ふ歩計
つまみ食いシャツトアウトの調理器具
年掛けて揃えた家財ゴミという
三歳児あやういことへ目を盗む

倉吉市 堀 かずこ

物言えず泣き泣き後へ引き下がる
いやな人耳栓持つて会いに行く
健気にも岩の破片に花が咲く
涼しげにシャツがおどつてクールビズ

倉吉市 中村 毅

リハビリに精出す孫を抱けるまで
ランドセル小さな背なになじむ頃
暇はなし余暇に始めた川柳で
イヌフグリ漢字で書かぬ方がよい

倉吉市 田中 紀美恵

株買つて利子を夢見て貯金空
二枚舌約束破る為にある
春が来た森がざわめき花粉飛ぶ
負けるが勝ち夫婦喧嘩は妻が勝つ

境港市 中井 虎尾

退職後いそがしいのは金ばかり
薬飲みほら元気ですこの笑顔
黙禱に一人時間をはかる人
わかんないアヤメかシヨウブカキツバタ

米子市 生田 寒之
上げ底の夢を見たつていいじゃない
この頃は電話もしやべる電子音
スーパ一の試食子どもが梯子する
大切な人はそれぞれ黄泉の国

米子市 湯浅 久司

宝くじ買つて忘れる抽選日
裏方で他人に拍手して帰る
眠られぬ夜に時計が喋り出す
こわめしを貰い隣の春を知る

米子市 見山 温子

ありがとう身近な方に忘れてる
一病が一寸優しい女にする
たてまあと本音の交差介護する
今日は陰心の窓が開かない

米子市 田村 周子

人生の進路はいつも迷わされ
シンピジュームいい花咲いたありがとう
川柳のおかげで今日も日が暮れる
のんびりと隠居の出来ぬ八十歳

米子市 加藤 正二

独り言毎日添えて自炊膳
老いひとり五体バラバラ勝手する
日替りの天気予報に急かされる
独り者くしゃみもせきも齒切れよく

米子市 後藤 宏之

文明が進み文化が退歩する
スイッチを押せば相手も押し返し
意地という癖をつくつて仲たがい
いつかまた会う約束の友が逝き

鳥取県 田口 清帆

クールビズさあ節電の夏が来た
ミニスカートの足に見とれて揺れている
昭和の日みどりが遠くなつていく
ためらいをきつぱり捨ててゴーサイン

鳥取県 下田 茂登子

町医者へ行くので下着取り変える
老い二人向き合つていて何も無い
文句言うな頑固爺の口癖だ
老夫難聴嘘かと思う時もある

鳥取県 飯野 菖子

燃料費節約できぬ老いの冬
内緒だよ渡す小遣い孫の手に
一日をベストつくして生きていく
震災はこの目の中に生きている

鳥取県 橋谷 静江

スカイツリーテレビの中で見て終り
喜びは孫と同行できた旅
海外へでかけ日本の良さを知り
愛犬の散歩朝夕一万歩

鳥取県 岡村 孝明

晩学の師は切り抜きのページから
成長をしたかと軽く蹴つてみる
入院も楽し名著を読みふける
不治の病新薬さがし生きている

松江市 山根 邦代

山々が丸くやさしさ見せて夏
ふる里で山菜摘んだ指の色
つらくても心よごさず生きて今
知つたふりついついしたく風笑う

出雲市 黒目 英男

負けまいぞ夢叶うまで辛抱だ
グローバル物の見方も変えて見る
原発が国の命運握つてる
キャッチボール親子の絆深めてる

雲南市 武島 ちよえ

日本晴れ気分いいから医者へ行く
軽い脳でも支えてる肩は凝る
葉桜になつて血圧穏やかに
退屈は何所吹く風か雑魚の群れ

安来市 原 煩惱児

掛声と溜息だけの今日一日
友葬る遺影にしばし語りかけ
菜の花を施設の妻に携える
桜咲くやつぱり僕は日本人

岡山市 永見心 咲

ほどほどにしろと言われりやムキになる
倅せの沸点人より低く置く
阿ねらず私色で生きてます
葱坊主邪心さらさら無いと言う

備前市 森 ふみか

寝たきりの命にほぐす焼き魚
不似合いな原色まとう迷い道
触れた手にしがみついている冬の海
世渡りの嘘がさみしい歯の汚れ

美作市 小林 妻子

遊びすぎ余りうろろしなさんな
派手だとか地味とか言わぬおじいさん
階段はバックで這うて降りるべし
屑籠も感づいている春の音

竹原市 六田 半徳

庭に立ち新芽のツバキ覇氣もらう
今やれば道は開けることを知り
延期して良かったことがたまにある
今日の目を静かに送り感謝する

竹原市 土井 輝恵

妊婦さんを見た日の心ほんわかと
カメラ好き義兄の遺影が見当らぬ
青春に三面鏡を乗っ取られ
気が付けば眨した道を歩くなり

宇部市 高山 清子

正論が日の目見るのは先の先
泥水で洗った顔で再出馬
言い訳をしつつ読んでる場の空気
果せない夢に身をおき見るドラマ

四国中央市 篠原 久

マジシャンの鳩の一羽がそっぽ向く
煙突を抜けると自由になる煙
空瓶を枕に昼寝から覚める
百度踏む雑念入る隙間ない

高知市 三谷 待太郎

古里の訛りどつぷり蘇生した
残り花それはそれなりに悪くなし
ねえあなた天下り先の居ごこちは
天下りオレが行かなきゃ国亡ぶ

香南市 桑名 孝雄

TPP攘夷攘夷とムシロ旗
香典返しビールにしてはもらえぬか
なんでも反対見慣れた顔が映つてる
無謀に無法なんと嘆かわしい日本

福岡県 本田 さくら

お祭りの太鼓もみじの手も拍手
花嫁の服に妖精見えかくれ
つつじ咲く客に愛嬌ふりまいて
孫じつと心の奥をのぞき込む

唐津市 北村 松風

おねだりのチャンスとママが背中押す

名人位護る男の背の孤独

生粋の江戸っ子だよと自慢され

大好きと知ってか野良がついて来る

唐津市 岩崎 實

ビール酒のまずに体整える

新緑にタンスの中も衣替え

捨てきれぬ物もぼつさりしてやられ

喜びの感謝忘れず精を出し

唐津市 吉富 節子

雨あがり虹も手伝う仲直り

鉢作り藤が咲く日を鶴首する

言い張って違った時の間の悪さ

災害の科目が増えた竜巻科

佐賀県 清水 園實

ダイエット一息いれてよもぎ餅

アクセルは踏まずぼちぼちブレーキし

宅配で夕ぐれ市も気にならず

生きているだから食べたり歩いたり

大阪市 梅里 南天

名人が黄泉の高座の奪い合い

言問はば出でて答えよ放射能

(前月分) 福島県 七ツ森 客山

心解くツバキ優しく開く朝

ツボミだけ挿して乙女をひとり占め

横殴り雨がセシウム混ぜて打つ

さああなた今からですが逃げますか

(前月分) 大阪市 木村 青生

茶柱を立てて夫婦の口ゲンカ

聞き役に回ればまさかの事ばかり

退屈を絵にしたようなタバコの輪

飼慣らした積りが猫に家出され

第31年度 夜市川柳ご案内

回	兼 題	選 者	締 切
1	まだまだ	新家 完司	6月20日
2	大 阪	岩田 明子	7月20日
3	夜	鈴木 公弘	8月20日
4	知 る	高瀬 霜石	9月20日
5	仲 間	川上 大輪	10月20日
6	野 菜	政岡未延子	11月20日
7	解 く	阪本 高士	12月20日
8	つくる	奥山 晴雄	1月20日
9	運	森中恵美子	2月20日
10	嵌める	天根 夢草	3月20日
11	からだ	大野 風柳	4月20日
最終	成 長	小島 蘭幸	5月20日

中島生々庵句抄

(句集「生々楽天」から 昭和五十一年発刊)

昭和二十二年～三十年

無駄足をせっせと押しの手で運び

要点を巧みにぼかす契約書

要点の結局金の無心なり

下心あつて自宅も教えとき

我がままでないと我がまま押し通し

電話帳の隅にはそぼそ我が屋号

立ち話もう二度目のさようなら

フランス語で云うさようならで振られて居

ぜんざいで商談すます律儀者

発奮の日記三日目までつづき

質搦きの餅では父の氣に入らず

武者修行のつもり二日酔に耐え

すれすれの次点大物らしく落ち

長尻を追い出すように俄雨

釣銭がないと見込んだ値切りよう

立志伝前半生を子にかくし

月賦住宅満期待たずに雨が洩り

寿命が延びたとかで半生もてあまし

三百六十五日こうもあつけなし

英語 de Senryu ⑦

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代
(岐阜保健短期大学)

初戀の思ひ出になる夏蜜柑

*a memory
of my first love---
Chinese citron*

ナフキンへ誰が書いたか戀の唄

*who wrote
the love song
on a napkin?*

～リバーウィローのため息～

昭和12年に阿部佐保蘭、木村明朗の主唱で「川柳翻訳研究会」が生まれました。英文学の宮森麻太郎、百々巳之助両教授らを顧問に、榎谷紅ン坊ら賛助会員9名、会員16名を擁し、5月には創立記念句会を開催しました。機関誌『S.H.K.』第1号が9月に発刊され、昭和13年に2号から4号、昭和14年には5号が刊行されました。中でも『S.H.K.』4号(SHK特集号)は『川柳きやり』(207号)の合併号として編集され、「イタリア大使館にて」メルジェ、「一周年を迎えて」阿部佐保蘭、「川柳英訳名句集」堀英四郎が掲載されています。昭和14年の『川柳きやり』(209号)には、(戦線・SHK特集号)が組み込まれ、荻原井泉水より『S.H.K.』へ寄せられた書簡(川柳は俳句より西洋人にわかる)が表紙を飾りました。『S.H.K.』は、折から日中戦争の進展で紅ン坊、清水淳吾ら有力会員がつぎつぎに応召し、時局の深まりと共に中絶しました。川柳翻訳研究会の生みの親である阿部佐保蘭は、後に『S.H.K.』に掲載された原稿や彼のレポートをまとめた『川柳と翻訳』(昭和41)を出版しました。彼の川柳翻訳への努力と業績は高く評価されねばならないと思います。

川柳と俳句

—麻生路郎の辞世をめぐって—

小池 正博

辞世の句とはどのようなものだろうか。

今年三月に仙台の「杜人」で追悼句会が開催された。昨年亡くなった大友逸星と添田星人の二人を追悼する句会であった。そのとき配布された二人の句集によると、両人の最後の句は次のようなものだったらしい。

川柳の尻尾に掴まりながらどぼん　大友 逸星
つまらないギヤグだな鼻毛だけ伸びる　添田 星人

逸星の句は「辞世」、星人の句は最後の句会で披露されたものである。いづれも川柳人らしい句である。有名な芭蕉の辞世「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」とは、明ら

かに手触りが違うように感じられる。

さて、よく知られているように麻生路郎の辞世は次の句である。

雲の峯という手もありさらばさらばです　麻生 路郎

「さらばさらばです」と言つてのけるダンディズムは、さすが路郎にふさわしいと評価の高い句である。別に分かりにくいところは何もないのだが、この路郎の辞世にかねがね私は何か腑に落ちないものを感じてきた。それは「雲の峯」という語と「手もあり」という部分にかかわっている。「雲の峯」は入道雲（積乱雲）のことで、「雲の峯幾つ崩れて月の山」（芭蕉）など俳句ではよく見かける、れつきとした季語である。麻生路郎ほどの川柳人が辞世の句になぜ「雲の峯」という季語を使ったのだろう。謎というほどでもないのだが、ここには川柳にとつて考えなければならぬ問題が隠されているような気がするのである。それはすでに解決済みの問題なのかも知れないが、この機会に私の感じていた疑問を述べて読者のご教示を仰ぎたい。

そもそも「雲の峯という手もあり」とはどういう意味だろうか。もちろん「こんな手もあり、あんな手もある」と

いう場合の「手」であるが、「雲の峯」が季語であるだけに作者の意図がどういうところにあるのかと考えてしまふ。俳句であれば「雲の峯」という季語を使うという手もあるが、川柳人の自分は季語を使わないというのであろうか。それとも、季語を使える俳句は辞世を詠む場合にも便利なものだなと揶揄しているのだろうか。私は以前ブログで「死に臨んで俳句の季語に喧嘩を売ったところに川柳人・麻生路郎の面目躍如たるものがある」（週刊川柳時評）平成二十二年十一月十二日『麻生路郎読本』と書いたことがあるが、あまりに乱暴すぎる言い方であった。

臨終が冬ならいろはおくりで逝かんかな

路郎が亡くなったのは昭和四十年七月七日であった。もちろん夏だが、もしこれが冬だったら、「いろは送り」で逝くところだというのは、一種の諧謔であろうか。「いろは送り」は文楽・歌舞伎の「菅原伝授手習鑑」の寺子屋の段である。我が子を犠牲にした松王丸夫妻は、いろは送りで小太郎の野辺送りをする。路郎の脳裏には人形遣い・桐竹紋十郎の後ろ姿が浮かんでいたかもしれない。それにし

ても、夏季なのに冬季のことを考えているというのは、ここにも一筋縄ではゆかない発想がある。

気になるのは死を前にした路郎の意識の中に「川柳と俳句」の問題が揺曳したということなのだ。

路郎は川柳と俳句の問題をどのように考えていたのだろうか。「川柳と俳句の相違点と類似点」という文章がある。『川柳とは何か』（学生教養新書・至文堂）に収録されている。そこで路郎はこんなふうに言っている。

「形式から云えば川柳も俳句も同じく十七音字中心の短詩であるが、用語が俳句の方は韻文であり、川柳の方は主として平言俗語であるため一読した時に、形式まで違っているのではなからうかと思うほどに違った感じがする」

俳句は韻文、川柳は俗言というのは、俳句は文語中心、川柳は口語中心ということだろうか。ただし、現代では口語俳句は珍しくないし、一時期の「革新川柳」では文語が意識的に使用されたことがある。

「川柳の方では切字がどうか、季感を表わさねばならないとか云うような約束は一切ないのである。季感のある句もある。俳句の季感をそのまま用いることもあるが、それは俳句の季題と用法が同じだとは云えない」「つまり川柳は俳句にくらべて表現上かなり自由ではあるが、無制限に自由ではない」

川柳でも季感のある語を使うことがあるが、それは季語として用いるのではないという。先ほどの「雲の峯」の場合はどうなるのだろうか。

「川柳と俳句は共に一行詩であるが、俳句は『名月や』と『池をめぐりてよすがら』のように二つの観念に分けることが出来るが、川柳は『母親はもつたないがだましよい』のように詠まれて二つの観念に別けることが出来ないから、俳句は二呼吸詩であり、川柳は一呼吸詩であると云うように分類している人もあるが、これとて例外もあるので、そういう違いもあると云うに過ぎない」

「一呼吸の詩」とは山村祐がさかんに使った用語であるが、「一呼吸詩（川柳）」、「二呼吸詩（俳句）」と「切れ」とはどう関係するのだろうか。

現代俳句の最先端で活躍している俳人に池田澄子がいる。池田は若い世代にも人気があつて、彼女のよく知られている句に次の作品がある。

じゃんけんで負けて蛭に生まれたの　池田　澄子
ピーマン切つて中を明るくしてあげた

「蛭」「ピーマン」という季語の力が働いているから俳句なのだろうが、俳句と川柳のさまざまな相違点は現在では

いつそう不明確になっている。

路郎は結局次のように言う。「俳句は叙情詩であるが、川柳は単なる叙情詩ではなく批判詩である」

「川柳は批判詩」というところに彼の最終的な認識がある。彼は叙情を否定しているのではない。「君見たまえ葎草が伸びている」は路郎の叙情・ポエジーを代表する句である。川柳は叙情詩の部分（詩川柳）を含みながら批判詩の部分の本質とするということだろう。

路郎の作で、もう一句、気になるのは次の句である。

一行詩これが私の墓だとは

「これが私の墓だとは」というのは卑下ではなく自負だろう。『麻生路郎読本』に「一行詩人」（『川柳雑誌』昭和三十二年十月）が収録されている。彼はこんなふうに書いている。

「川柳は一呼吸の一行詩に過ぎない。いずれは滅亡する。それは間違いない事実だ。しかしと私は云う。その短い一行詩に私のいのちを捧げつくして、燃やしつくして、悔いない魅力を持つことが何故いけないのかと反問したくなる」。「一呼吸一行詩の川柳はたとえ短い十七音字中心のものであろうとも私の生命を刻み込むのに尤もふさわしい木

石だと云えるのである」

川柳滅亡論が彼の心を去来する瞬間があつたのだろう。彫刻家が木や石に姿を刻みこむように、彼は川柳に自己の生命を刻み込む。川柳が彼の自己を捧げた形式である。

さて、橋高薫風は『川柳全集2 麻生路郎』（構造社）の解説（人物像）で、路郎の死を芭蕉と重ね合わせて描いている。それは「私（＝薫風）の脳裏で演じられた幻の舞台の描写」であるという。

「路郎は死後の世界でまだ夢を見ている。いや、うつうつと夢幻の虚空を漂いながら、渾身の力で生きた五・七・五の世界を見返っている。すると、朦朧とした視野の中に一人の達人の姿が浮かび上ってきた。路郎が、俺にように似ていると思うほどもなく、その達人はどうやら俳聖芭蕉であるらしいことに気付いた」

薫風が路郎の辞世として挙げている二句を、もう一度引用してみよう。

臨終が冬ならいろはおくりで逝かんかな

雲の峯という手もありさらばさらばです

薫風の幻想の上にもう一つの幻想を重ねてみるとすれ

ば、これは芭蕉に対する挨拶かもしれない。「芭蕉さん、あなたの亡くなったのは冬でしたね。もし、夏に亡くなったのなら、枯野ではなくて雲の峯という手もありましたね」もちろん路郎がそんなことを思ったはずはないが、「夏でありながら冬ならばと仮定するところに川柳の自由がある。俳人であれば、辞世の句はやはり当季にしただろう。雲の峯（積乱雲）は夏の季語である。「雲の峯という手もあり」とは、季語を相対化することに他ならない。いずれの句においても、路郎は俳句ではない川柳人としての自己を意識しているように思える。

「雲の峯という手もあり」とは、俳句に対する気の弱りなどではなくて、路郎が最後に放ったアイロニーであつたのだ。いま私はそう思っている。

プロフィール

昭和二十九年生まれ。「MANO」「豈」同人。「現代川柳点鐘の会」会員。句集に『セレクション柳人6・小池正博集』『水牛の余波』、評論集に『蕩尽の文芸―川柳と連句』、編著に『セレクション柳論』。本年十一月に創刊予定の新誌「川柳カード」編集人。

『麻生路郎読本』を音訳して

岩崎 千佐子

川柳を始めて、句を作る楽しみも苦しみも判りかけた十年目ぐらいだつたらうか、堺市の広報誌に音訳ボランティア募集の記事を見つけた。

音訳というのはその記事によれば、視覚に障害のある人に本を読んだり、録音図書を作る事とあった。もともと本を読むのが何より好きで、川柳にも田辺聖子著『川柳でんでん太鼓』がきっかけで入った私は、「もし自分が失明し本が読めなくなつたらどんなに辛いだろう、私に出来るならやつてみようか」と思い応募した。約二年半の講習（一月に約二時間の講習を一回から二回）を受け、何とか音訳ボランティアのスタートを切つたのだつた。

講習を受けながら、いつか、どなたかの川柳句集を読めたらいいのだが……などと思つていた。友人に音訳を始めたと言ふと、たいてい何語なの？と訊かれる。翻訳じゃなくて音訳で本を読むと言ふと、じゃあ朗読のこと？と言われる。実際、音訳と言つて一度で解つてくれる人は少ない。それ程に世間では音訳は知られていないという事なのだ……。

そもそも音訳は、視覚に障害のある人や文字を読むのが困難な人の為に読むので、朗読のように自分の感情を込めたりせず、あくまで見えない人の目代わりとして読む事を求められる。その為には正確に読む必要がある。誤読は論外、日本

語には同音異義語が多いので正確なアクセントで読む必要がある。

また、図や写真が入った本には説明も必要だ。好きな読書でボランティアが出来るくらいの気持ちで始めた私だったが、講習を受けている間にそれが大変な作業だという事に気がついた。読む前の下調べが大変である。

また、現在はパソコンを使って録音しているが、昔はオープンリールやカセットデッキによる録音だったそうだ。録音も科学のお蔭で少し楽になつた。

録音図書を何冊か完成させたころ、リスナーの方から『麻生路郎読本』を読んでもほしいと、堺の点字図書館に申込みがあった。そのリスナーさんは川柳塔千号記念川柳大会に友人と参加されたそうで、ご自分は川柳を作つておられないのだが、川柳に非常に興味をもたれたそうだ。

偶然その場に居合わせた私は「川柳の本なら読んでみます」とお引き受けしてしまつた。麻生路郎師のことは、川柳の六大家の一人で、有名な「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の作者として存じ上

げていたのだが、実際にその膨大な作品を前にして圧倒される思いがした。

引き受けてはみたものの五百ページを超える大作に何度も投げ出したくなったのだが、読み進めていくうちに路郎師の川柳に対する情熱がひしひしと伝わって、これは絶対に完成させなければいけないと強く思うようになった。

特に東野大八氏の「麻生路郎物語」は興味深く読ませて頂いた。路郎師の人となり鮮明にして読者の胸を打つ。また、麻生路郎語録からも多くの教えを頂いた。曰く、句はその人のころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である。

また、曰く、川柳は十七音字を基調としたリズムを持つ批判詩である、など。麻生路郎師やあの時代を生きた川柳家たちの川柳に懸けた情熱を忘れてはならないと思う。

音訳を始めたころに願った川柳句集も何冊か読ませていただいた。今、糖尿病などの病気や事故などによる中途失明者が増えているそうだ。そういう方達にとつ

て新たに点字を学ぶのは大変難しい。点字図書だけでなく録音図書が必要とされているのにはそんな事情もある。専門書を要望されることも多いと聞く。

音訳を勉強したおかげで、披露の時ずいぶん注意をするようになった。どこで区切ったら句の意味が正しく伝わるのか、アクセントは大丈夫か、など思わぬオマケを頂いた音訳なのである。

約一年三カ月掛かってようやく完成した『麻生路郎読本』の録音時間は三十三時間余り。「サビエ図書館」という点字図書館のネットワークにもアップされている。

『麻生路郎読本』は私にとつて、これからも音訳を続けていく上で大きな糧を頂き、川柳についてもたくさんさんの刺激を頂いた著書であった。

プロフィール

「泉北すばる川柳会」「現代川柳点鐘の会」に所属。音訳ボランティアを始めて10年。

サビエ図書館

サビエは日本点字図書館がシステムを管理し全国視覚障害者情報提供施設協会が運営を行っています。サビエ図書館ではホームページから点字データ13万タイトル以上、音声データ13万タイトル以上、音声データ13万タイトル以上がパソコンやケータイ電話によつてダウンロードでき、しかも全国の点字図書館が所蔵する50万タイトル以上の膨大な資料がオンラインリンクエストによつて利用できます。

サビエ事務局

大阪市西区江戸堀1-13-2

☎ 06-6441-1078

(受付 火く金)

サビエ大阪サポートセンター

(日本ライイトハウス情報文化センター)

☎ 06-6441-1171

『麻生路郎読本』
を読む会

古今堂 蕉子

自身の濃さもさる事ながら、余りの本の部厚さに本棚の飾りになりそうになっていた『麻生路郎読本』。これでは編纂された桑原道夫先生のご努力も、大勢の方々のご苦勞も「勿体無いもつたいない」と取り組んだのが、川柳塔すみよし句会の後に始めた「麻生路郎読本を読む会」である。

参加、不参加は自由、本を忘れてきたらお隣さんと仲良く一冊。無理しない、頑張らないで始めた会。読むのも初めからではなく、「今日はこのあたり読みましょか」「今日は葎乃先生を読みましょか」と行きあたりばったり。

適当な区切りでバトンタッチして順に読む、読む声を聴きながら、字を追う。難しい字が並ぶ。つかえる。助け舟が出る。みんな分からなくて適当に意味を

探し当て誤魔化す術も……

五時までの、三、四十分、読むことに、聴くことに、文字を追うことに熱中する。そして感じたことを誰彼となく喋って openness に。ただそれだけの会だけれど、路郎師の偉大さに「凄い先生だったんだねー」「葎乃先生も尊敬だねー」と毎度言っては本を閉じる。近頃は本の部厚さが頼もしく嬉しくなってきた。まだまだ続けられる。まだまだ楽しめる。

私は路郎先生にお会いした数少ない子供かもしれない。

父・栗に連れられて中学生のころ先生のお宅に伺った。先生は柔和な目をしておられて、ハンサムだった。父の言葉から子供心に偉い先生なんだと思った。

私の結婚式は昭和三十九年十一月三日だった。父がお願いしたのでろう先生からお祝いの色紙が届いた。

お二人に精一杯に菊かおる 路郎と書かれてあった。

しかしその色紙を見てその頃は「なんだ、これが偉い先生の句かいな」と思った。縄目のようなしやれた額に入っていた色紙は、東京転居を初め六度の転居のたびに貧しい壁を飾ってくれた。また

皆 呑んでるぞ ビールが散るぞ夏

路郎

というまるでビールの泡が散ったような字で書かれた扁額が鴨居に架かっていた。

私が中学生のころ、住んでいた松屋町の家は、一階で職人さんやぼんさんがせんべいを焼いていて、表に店があり二階に私たちが住んでいた。

二階の鴨居のその額を見ながら毎日眠りについた。へんな句やな。これが川柳かいなと思いつつ……

何度か父に「これがええ句やのん？なんでここに飾ってんの？」と聞いた。父は笑って「分からん奴にはわからん」という顔をしていた。そうして美味そうにお酒を飲んでいた。

路郎読本を読んでいて、こんな昔の事を思い出した。

エッセー募集

一行 18字 65行

原稿の採否は編集部に一任願います。

民族の詩歌 (2)

―民謡から川柳へ

三好 専平

奄美よりすこし南の沖縄方面でも同じような「方言」が存在する、私は専門家ではないので、紹介するにとどめたい。有名な八重山の、「安里屋ゆんた」から、

(サア) 安里屋 ぬ 5音
あんちゅらさ まりばし 5音・4音
くやま に 4音
またはあーりぬ つんだら 6音・4音
かぬしやま ゆー 5音
(大意・安里屋のクヤマは、あんなに美しく生まれたために、はー、晴れの日に、かわいらしいおれの恋人よ)

奄美、琉球には、古くから「人头税」があつた。その桎梏にくるしんできた。

民謡は、どこでも、そういう庶民の暮らしや労働から生まれたもので、中国の詩経、

アイヌの民謡しかりである。子守歌や童謡の形をとり、歌い継がれてきた。日本だけで、四万八千曲にのぼる。

人々はその生活の苦しみから逃れるために、精神的支柱として宗教を求めた。日本の神道をはじめはアニミズム信仰で、万物が神。そこへ、まず仏教がもたらされた。最初は「鎮護国家」であつたが、のちに「庶民救済」の宗教となつた。

文字のない時代から、「口承」で歌い継がれて来た民謡は、文字を得ても、声に出して歌われた。その伝統は、仏教の場合も同じであつた。仏教音楽は、梵唄・梵唄、魚山と呼ばれる。呂川と律川に囲まれた魚山、「その音の微妙なること筆舌に尽くし難し」と古文書にある。今では、四国巡礼に、「般若心経」を唱えるが、昔は「声明」を歌つた。「声明」が、僧侶によつて作られ(行基・百石讃歌)など、多くは「和讃」として庶民に広まり、五七を基調とする。仏足石歌もそのひとつで、今に伝わる。

みあとつくる いしのひびきは あめにいたり つちさへゆすれ ちちははがため

に
もろひとのため

古代の歌については、折口信夫の「古代研究」に詳しい。「言霊信仰」を彼は説くが、今でもその伝統は残っているようである。調べよく歌うことによつて幸せがもたらされる。

折口信夫は、大阪市浪速区の生まれで、柳田国男の民俗学の流れをくむ。釈超空が歌人名で、「死者の書」は大津の皇子をテーマにする稀有な小説である。犬養孝は私の大学の師で、彼の説を継承し、晩年には、万葉の故地をまもるといふ観点から文化財保護運動に携わつた。

話を元にもどせば、「歌」は「喜び」であると同時に「怒り」や「呪い」であり同時に「祈り」・「救い」である。かくして、宗教と民謡は合体した。以後の勅撰集には「釈教歌」という部立てがある。川柳の源流はこの短歌に求められる。

私の家の窓から二上山が見える。雄岳は峨々と、雌岳は優しく。そこに大津の皇子が祀られている。その山を見ながら、私は川柳に取り組み、短歌を詠む。

誹風柳多留一一篇研究 83

伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦・山口由昭
小栗清吾
清 博美

657 三会め母ハ巻歩で行けといふ

伊吹 美女武両あく女巻分と三会目安七信2
のように遊女へ二両と遣手に一步が一般的
だったようなのに、どら息子にとつて大切な
三会目を一步のみで行けとは、無茶なこと
を言う母親である。

ちう一にしやれと母は巻歩かし 一九三

山田 「無茶なことを言う母親」でなく、母
親の才覚では一分しか都合が出来なかつたか
らではないか。それにしても、大甘な母親で
すね。

山口 出来た母親なら吉原行きを禁止はせ
ず、節約して遊べと遊びのやり方を修業させ
ているとも。そんな出来た母親は商店のおか

みにもいないか。
小栗 単に、吉原のしぎたりをしらないとい
うだけではないか。
清 同右。現実にはあり得ない話で、作つた
句。

658 泣き出すを聞いてしなのハいとまを

伊吹 毎年二月二日に据える灸を二日灸と言
い、この日に据えると効験著しいと言われて
いる。また信濃地方出身者が多い通称椋鳥
と呼ばれる季節労働者は、十一月から二月
二日まで江戸でさまざまな仕事に従事する。
二日灸を据えられた子どもが泣き出す声を聞
きながら、椋鳥は農閑期の労働を終え暇乞い

をして信濃に帰る。例句の豆炒りは、灸の
あとに食べると血の循環をよくすると思わ
れていた。

豆いりをかミくしなのいとまこひ

明二礼七

清 贊。

659 六文八ついて巻文ぶつつける

伊吹 小賭博のことを二文四文という。また、
手に握つた銭を一枚ずつ親指の腹で突き出す
ように並べることを、突銭(ツキセン)または
ツキゼニという。正月の家庭内博奕などの
小賭博をしていて、負けたためその賭金の六
文(二文プラス四文)を突き出しているところ
へ、物乞いが来たので腹立ち紛れにそれへ
一文の喜捨をぶつつけた、というのは如何で
しょうか。

銭のおと札者にこく申をき 天八12 15

そろばんを巻文なげて置なをし 一三18

山口 どうも真田一族が信之だけを徳川方に
付けて、親子で豊臣方に一付いた句のような
気がするのだが、解が明らかにならない。

六文の一文残る夏御陣

二二西26

小栗 山口兄のいわゆる通り、「六文」「一
文(二門)」となると真田のにおいがするが、

阿達先生の本をはじめ、諸先輩はとり上げておられぬ。保留にしたい。

清 句意明らかならざるも真田を詠んだ句ならん。

660 くゞり戸が明いたと御用湯へしらせ

伊吹 どちら息子の朝帰り。我家の戸はまだ明いてないので、御用に頼んで朝湯へ時間潰しにと行く。暫くして、ようやく潜り戸が明いたとその御用が知らせてくれたので、無事ご帰還という具合になる。

清 贊。 母おやの目にはあさ湯と見へる也 二二17

661 大坂屋ねごとを書いてやねへ出し

伊吹 大坂屋は大坂屋平六で、薬研堀にある薬種屋。声をよくする「すぼうとう」や解熱剤の「うにこうる」などの、寝言のような耳慣れない単語が書かれた看板を屋根に出している。

清 贊。 薬種屋のかんばん朝の一仕事 七13

662 じゃうぎらで居て店たてを度くくくらい

伊吹 常綺羅は、普段いい着物を着ていること。そうしていると衣裳代に費用がかかり、その結果家賃が滞りがちに成り、たびたび借家から追い立てを食うことになる。限定できないが水商売の人たちなどもその範疇に入る。例句の三両は、玄関番などの年俸。

山田 贊。 三両で常ぎらで居る其ひどき 四29

山口 贊。 初かつを買と大屋は店をたて 幸々安元情3

清 山口説の通り者の類であろう。

653 おんねんがこわいと富をとらぬ同士

山田 今で言う「宝くじ」にあたる富札は、一のとみどころかのものがとりハとリ 二五11

百両はふらついて居てとかまらず 二12

富札の引きいて有ル首くゝり 七22

などという悲惨な結果に成りかねない。これは現在も全く同じであるが、そういつた連中

の「怨念が怖い」ので、当たらなくて良かったと、外れた者同士が云っている。もとより負け惜しみであろうが、その「怨念」は、一体何処に向けられるのだろうか。

山田 贊。 金は浮世の恨みの根源というか。 増田 贊。 当つた奴の所へはずれた奴の怨念が渦を巻きます。

小栗 贊。 負け惜しみ。 清 贊。

654 能男むかしの女中むして喰い

山田 「昔の女中」は、江戸城大奥、七代將軍徳川家継の生母月光院付の御年寄・絵島、「よい男」は、木挽町の山村座の役者・生島新五郎。正徳四年一月、上野増上寺への代参の帰途、山村座で遊興し、蟲貞の生島と懇ろになり、その後、大胆にも、生島を饅頭を蒸す蒸籠に入れて大奥へ運び込み、愛欲の限りを尽くしたと云われる。

買喰がこうじまんぢう取よせる 義道8

まんぢうの皮をかぶつたいゝ男 傍二11

これが露見して、絵島は信州高遠へ、新五郎は三宅島に流された。

うつくしひ流人大めしくらひ也 拾六8

清 贊。

愛染帖

新家 完司 選

大阪府 古今堂蕉子

情熱は続かず倦怠が続く

(評) 理性で制御できることなら簡単なのだが……。もしも、夫婦間のことであれば、せめて、顔や態度で倦怠感を表さないように。

豊中市 藤井 則彦

礼状には使いたくないボールペン

(評) ボールペンしか使ったことのない世代には理解できない句。それほど万年筆は廃れてきたが、やはり筆記用具の王様であろう。

鳥取県 斉尾くにこ

聴き役に徹していると眠くなる

(評) 「それは、身を入れて真摯に聞いていないからだだろう」と、突っ込みたいが、確かに、興味のない長話にはアクビが出てくる。

唐津市 山口 高明

日本語を壊すテレビのオバカキャラ

(評) もちろん、文法を無視したオバカキャラたちの喋り方も問題だが、視聴率狙いでそれに乗っかっていくテレビ局も同罪。

三田市 上田ひとみ

娘が嫁ぎ家まるごとのモノトーン

(評) 明るく朗らかで、我が家の太陽であった娘。嫁入り道具と一緒に色彩まで持って行ってしまったよう。早く娘離れしなければ。

四條畷市 吉岡 修

天国へ歩いてゆける距離にいる

(評) 遠い遠いところだと思っていた天国。

徒歩でも行けるほど近くなってきた。便利で有り難いが、行くのはもう少し先にしよう。

藤山県 酒井 真由

今一度ききたい青江三奈の歌

井戸水がとても美味しい麦の秋

唐津市 仁部 四郎

国会の日本語語尾がむづかしい

選挙区を出ると方言忘れられ

大阪府 小泉ひさ乃

ストレスを消すのに長い無駄話

演壇の前列どなたにも拍手

枚方市 寺川 弘一

愛してるふりは一番重い罪

酒と焼酎あれば地獄も天国さ

橿原市 居谷真理子

わたくしを生きて子二人孫一人

人間の生きる匂いのする場末

堺市 増田 和幸

少子化は公園行けばすぐ分かる

山野荒れ野鳥昆虫減るばかり

鳥取県 平木 公子

七十も悪くはないな医者安

フルムーン服も着馴れたものを着て

奈良市 米田 恭昌

よいしよする盆にまた酔わされる

パクリ文化孔子の国も地に墜ちぬ

たまに来て電球替えていく息子

(評) たまにしか来ないのは親離れしている証。電球を替えてくれるのは親を忘れていない証。遅く優しい理想の青年ではないか。

札幌市 三浦 強一

都市砂漠自動ピアノが鳴っている

(評) 気分によってアレンジしたり間違えたり。それが生演奏の人間味。自動ピアノはミスをしなが、決まり切ったコンビニ弁当。

箕面市 出口セツ子

賢沢だ人が煩わしいなんて

(評) 看取る人がいない孤立死が増えている。そのことを想うと、煩わしいほど人間関係を持つていけるのは有り難いことではないか。

川西市 山口 不動

啓蟄におばさんが出て立ち話

(評) さすがのオバサンも冬は苦手。暖かくなつて虫と一緒に復活。これからのスリーシーズン、ずっとオバサンの季節である。

羽曳野市 徳山みつこ
ふたりきりだから衝突するのです

河内長野市 梶原 弘光
絆の字糸が半分ほつれかけ

紀の川市 北山 絹子
長男に個性の強い嫁がくる

香南市 桑名 孝雄
マニュアルは苦手俺には勘がある

京都市 三宅 満子
病院で元氣ですかと言われても

京都市 都倉 求芽
出揃った葉が花よりもよく喋る

亀岡市 井上 森生
自分から惚れ込む粋な句でなくちや

朱鷺殿に棲んでいたかく佳い国に
檀原市 安土 理恵

鯛のあら煮今日は夫の誕生日
野暮のままあなたも後期高齢者

島取市 土橋 螢
わたくしと一緒に歳をとる女

乱世を見送っている曼珠沙華
岡山市 工藤千代子

神様の都合か絵馬が落ちている
オバちゃんを越えようと婆ちゃんになった

唐津市 井上 勝視
四苦八苦初心忘れて句に迷う

経費言わず口角泡の理想論

京都市 高島 啓子
雹が降るレタスに穴をあけながら
八十はのつびきならぬ歳である

島取市 福西 茶子
ヘルベスに連れ戻された遍路旅

池田市 上山 堅坊
居酒屋の話の種は無尽蔵

三田市 堀 正和
だんだんと妻が酒豪になつてきた

大阪市 井丸 昌紀
仲直りしたきつかけも酒だった

西宮市 吉井菜々子
髪切つてよかつた明日も傘マーク

寝屋川市 岡本 勲
介護では散るが遺産で集まる子

今日あたり竹の子くると糠を買う
大阪市 柴本ぼつは

空つぽの財布だエイツと投げつけた
公園はわたしの個性消えるところ

ためらい傷どこにも見せず散る桜
カタカナに出合うと狂う古時計

藤井寺市 太田扶美代
おまじないが効いて何となく陽気

悠々自適クモの糸にぶら下がると
高槻市 片山かずお

ヒゲを剃り毎朝ネジを巻いている
錆止めに恋だ愛だの句を作る

和歌山市 柏原 夕胡
こんなことしてる場合かパチンコ屋
チンをするだけの鬱の日の食卓

海南市 三宅 保州
獅子岩と言われてみればそう見える

消印有効の消印が消えている
弘前市 高瀬 霜石

すべからくほどほどがいい長生きも
さまざまな人いてさまざまなお酒

尼崎市 春城 年代
渡りたしわたりたくなし黄泉の国

晩酌は君の写真と差し向かい
泉佐野市 稲葉 洋

再稼働せねば停電だとバルーン
だとしても行灯暮らしともゆかず

奈良県 渡辺 富子
女三人ジョッキ傾け雲に乗る

バッグにはアメと口紅保険証
倉吉市 中村 毅

大トロを最後に食べる貧乏性
年金に祝儀袋が頭下げ

堺市 内藤 憲彦
ピーポーピーポー命拾つてくれる音

朝は苦手 ゴルフは別腹である
奈良市 大久保真澄

しょうがない不良品でも私の子
気はこころ太らんように腹九分

益軒の養生訓が守れない
今ならば笑ってサユリストと言える

藤井寺市 鈴木いさお
島取市 高浜 勇

筍の時期だけ欲しい竹林
筍を五本ももらいたい忙しい

島取市 有沢せつ子
豊中市 水野 黒兎

ケータイは通信機能付き玩具
夢のなか段階み外し目が覚める

弘前市 今 愁女
大阪市 江島谷勝弘

シャイですが子どもも孫もちゃんという
聞き耳を立てれば耳が忙しい

大和郡山市 坊農 柳弘
三田市 田中 章子

体調をくずしいい句が浮かばない
人様のブログで雪も花も観る

堺市 奥 時雄
大阪府 米澤 俣子

子らの世にいくさ無いよう紙兜
俺に席譲る無礼な奴がいた

河内長野市 村上 直樹
倉吉市 岡崎美知江

「ぼけないで」帰る娘の置き言葉
接着剤探す心が折れている

松江市 石橋 芳山
箕面市 広島 巴子
災の字はいや消しゴムでギョッキョッと

身内面して飲んでいる通夜の酒
にこにこと酒の肴になつてやる

堺市 村上 玄也
堺市 矢倉 五月

縁側には人寄せ神が在します
ボーナスの支給派遣の退社後に

西宮市 緒方美津子
大阪市 高杉 力

寿し鰻肉も食べたい誕生日
積み重ね出番待つてる筈の知恵

三田市 上垣キヨミ
河内長野市 松岡 篤

念入りな医者の説明怖くなる
天国をちらり覗いてUターン

倉吉市 山本 玲子
和歌山市 田中 みね

眼鏡不要喜寿のあなたがチト憎い
運のいい財布持ってた交番所

八尾市 吉村 一風
青信号安心しては渡れない

吉屋市 黒田 能子
三田市 雑賀 一泉

春うらら車窓の山に見るエクボ
羽衣が欲しいと思う春霞

貝塚市 石田ひろ子
島取県 西谷 悦子

ゆつくりと五体スイッチ入れる朝

ヤワラちゃんの頃はとつても好きでした
愛想だけは誰にも負けんつもりです

西宮市 泉水 冴子
松原市 市川 雄太

すいませんと言われて胸のモヤ消える
次の世は妻は会いたくないだろう

大阪市 大川 桃花
堺市 加島 由一

ストレッツチより階段五階登り降り
聴くに足る番組なくて爪伸びる

豊中市 松尾美智代
米子市 成田 雨奇

痩せてきた証拠あちこちシワ目立つ
煽てられ漢字検定受けてみる

東かがわ市 川崎ひかり
高槻市 初代 正彦

ケアマネが来ると言うので化粧する
目の化粧すれば涙はこぼせない

鳥取県 山下 節子
熊本県 高野 宵草

ピクニック嬉々と帽子も風に飛ぶ
人並みの暮らしへ愚痴は不敬罪

西予市 黒田 茂代
唐津市 坂本 蜂朗

臨終のせりふ書き出し吟味する
思つたらすぐ実行といかぬ歳

尼崎市 小池 幸子

三田市 石原 歳子
虫食いの野菜を食べて美人肌

藤井寺市 鴨谷瑠美子
おかしくてキャベツ一枚そり返る

唐津市 岩崎 實
それぞれの木はそれぞれの葉をひろげ

鳥取県 細田 裕花
新緑のオーケストラがこだまする

弘前市 高森 一存
出会い待つ野良で息子は嫁さがし

神戸市 山田婦美子
飾ること一切捨てた姑介護

八尾市 前田 紀雄
戦中派節電なんか怖くない

和歌山市 土屋起世子
余生など無かつた亡父自営業

大阪府 初山 隆盛
君が代はお口開いてはつきりと

大阪市 神夏磯典子
老いてきて包丁磨くのが恐い

鳥取市 中宇地秀四
夢はまだピンピンしてるロスタイム

備前市 森 ふみか
川柳が家事の隙間を埋めている

米子市 生田 寒之
絆という便利な言葉闊歩する

枚方市 小林 わこ
想定外を期待しながらドラマ見る

鳥取市 岸本 孝子
蹟くとふと口ずさむ夫婦坂

大阪市 坂 裕之
我儘を許してくれるでかい妻

藤井寺市 若松 雅枝
何年も履いたことないハイヒール

枚方市 松原 保
問診で酒は良いかと医者に聞く

高知市 小川てるみ
白旗を何度も上げて生きて来た

富田林市 山野 寿之
レシートに特価半額並んでる

阿波市 三浦千津子
子の意見こころ広げて受け入れる

米子市 高田 振作
赤い糸ゆるめ引つ張りダイヤ婚

奈良市 尾畑なを江
人生の真ん中辺で座り込む

鳥取市 池澤 大鯨
かすみ目はドライアイOR老眼か

篠山市 円増 純子
亡母の歳越えて母の日母思う

和歌山市 平田 元三
容赦ない罵声が怖い甲子園

堺市 遠山 唯教
スカイツリーに負けたらあかん新世界

大洲市 花岡 順子
締切が迫ると脳が働かぬ

岩出市 村中 悦男
冷暖房休憩をする好季節

鳥取市 津村 律子
絡む猫横蹴りしつつ菜を刻む

黒石市 相馬 一花
ライオンを真似て生肉食うグルメ

奈良市 加門 萌子
子役にも流行りすたりがあるみたい

東大阪市 西田いくひろ
貯金箱あるが中味が増えてない

日高市 根岸 方子
もう五年車使えと天の声

高知県 小澤 幸泉
長生きをせよと神さま言うてはる

高槻市 富田 保子
好きだよとどちらとも言わず古希迎え

岸和田市 増田 隆昭
だんだんと元気な友が減ってゆく

河内長野市 辻村 ヒロ
友の愚痴最後はのろけ聞かされる

大阪市 津守 柳伸
草引きもルンルンの雨あがり

富田林市 中井 アキ
雑草の様な次男に期待する

岸和田市 雪本 珠子
娘の笑顔奪っていった憎い癌

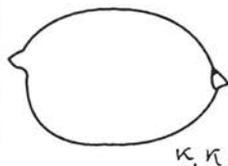
西宮市 藤本 直
職もなく未来も無いが税は増え

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 738句)



「調理器具」

富士慕情選

脱原発納屋の七輪呼び戻す	河内長野市	坂上	淳司
土佐包丁乱れた今を切りきざむ	高知市	小澤	幸泉
正宗の出刃で魚も指も切る	鳥取市	福西	茶子
味噌こしで麵の湯切りもこの通り	池田市	栗田	久子
みそ汁を休むと杓子怒り出す	大阪市	神夏磯典子	
味噌汁ができたらチンとパンが焼け	鳥取市	土橋	螢
山椒のすりこぎばあちゃんの形見	和歌山県	森下よりこ	
ピーピー早く起きろと炊飯器	喜屋川市	平松かすみ	
調理器に呼ばれハイハイどれだつて	尼崎市	軸丸	勝巳
トースターポンと弾けて朝の詩	東大阪市	佐々木満作	
赤飯にご機嫌となる炊飯器	札幌市	三浦	強一
釜炊きのおこげは今も母の味	松江市	藤井	寿代
おしゃべりに囲まれてる大土鍋	和歌山市	坂部紀久子	
お玉持ち孫いっぱしの歌手気分	札幌市	佐藤登美子	
包丁が錆びてしまった母の死後	松山市	高橋	宏臣

「調理器具」

池森子選

大誤算オール電化の調理器具	河内長野市	坂上	淳司
提げてきた手鍋もやがて五十年	藤井寺市	鈴木いさお	
定年後マイ包丁を用意され	塩竈市	木田比呂朗	
鍋ハサミレンジ駆使してまだ独身	堺市	矢倉	五月
音声であれこれ喋るレンジ買う	大阪市	岩崎	公誠
留守番に電子レンジという味方	唐津市	仁部	四郎
多機能のレンジも爛に使うだけ	堺市	村上	玄也
カフェオレにお呼びのかかるミルクパン	大阪市	坂	裕之
多機能を使えずレンジ嘲笑う	箕面市	出口セツ子	
調理器具揃えて外で食べている	大和高田市	鍛原	千里
慣れるまでとまどう菜箸の長さ	池田市	栗田	久子
母の手は何でもこなす調理器具	豊中市	松尾美智代	
キッチンのおール電化に悩む夏	尼崎市	軸丸	勝巳
夕ごはん今夜はチンで出来上り	神戸市	山口	美穂
ストレスを菜味に変える下ろし金	米子市	竹村紀の治	

歳月を語るすぎやき鍋の錆
 人事部長夜な夜な出刃を研いでいる
 包丁が殺傷兇器になる怖さ
 鍋釜で武器を作っていた戦
 グチというあくを掬っているシヤモジ
 俎にのせられていた君と僕
 マニキュアも指輪もさける調理器具
 まな板に母の苦勞がにじみでる
 まな板の凹み女の修羅場知る
 齒こぼれた包丁人生知っている
 チャーハンはプロ単身のフライパン
 フライパン僕の自慢はたまご焼き
 前掛けが似合う親父のフライパン
 I日思い出の鍋捨てさせる
 多機能を使えずレンジ嘲笑う
 大きじ小さじスイッチONで母を追う
 一台のレンジが主婦の顔をする
 包丁と俎板はずむ嬉しい日
 賑やかな娘だったね泡立て器
 家族中に好かれてます土鍋です
 手のひらを真魚板にして豆腐切る
 包丁と通帳妻に握られる
 トングより菜箸ピーラーより包丁

米子市 政岡未延子
 奈良市 米田 恭昌
 大阪市 板東 倫子
 池田市 上山 堅坊
 交野市 森本 弘風
 篠山市 酒井 真由
 奈良市 加門 萌子
 江南市 脇田 雅美
 大阪府 米澤 優子
 大阪府 野田 栄呼
 唐津市 仁部 四郎
 札幌市 小沢 淳
 高槻市 左右田泰雄
 羽曳野市 宇都宮ちづる
 箕面市 出口セツ子
 篠山市 遠山 可住
 羽曳野市 福田 悦子
 阿波市 三浦千津子
 橿原市 安土 理恵
 大阪市 柴本ばつは
 和歌山市 坂田喜久子
 茨木市 島田 誠一
 八尾市 高杉 千歩

チン一つあれば手料理すぐ出来る
 まな板の凹み女の修羅場知る
 二人と一匹生きるに余る調理器具
 味噌汁ができたらチンとパンが焼け
 一台のレンジが主婦の顔をする
 単身赴任器用にかえずフライパン
 炊飯器電気を食べる音がする
 正宗の出刃で魚も指も切る
 節電へ調理家電をもて余す
 調理器具どれを取っても武器になる
 いら立ちのリズムまな板知っている
 胃袋も愛も掴んだ調理器具
 山椒のすりこぎばあちゃん形見
 コトコトとひね豆を煮る落とし蓋
 子育ての歴史が残る鍋の煤
 皺の手に大事にされている土鍋
 定年後僕は便利な食洗機
 播り鉢で昭和平成ゴマを播る
 調理器具飾り惣菜買ってくる
 われ鍋にきっちり合わす妻の蓋
 おろし器と料理鉄で同棲中
 縁故疎開祖母とお鍋と包丁と
 まな板がわたしの心読んでいる

神戸市 山田婦美子
 大阪府 米澤 優子
 藤井寺市 太田扶美代
 鳥取市 土橋 螢
 藤井寺市 福田 悦子
 茨木市 藤井 正雄
 堺市 柿花 和夫
 鳥取市 福西 茶子
 鳥取市 中村 金祥
 松江市 石橋 芳山
 奈良市 渡辺 富子
 鳥取市 加藤 茶人
 和歌山県 森下よりこ
 砂川市 大橋 政良
 富田林市 山野 寿之
 雲南市 菅田かつ子
 京都市 三宅 満子
 和歌山市 土屋起世子
 香芝市 大内 朝子
 松江市 三島 浜丘
 大和郡山市 坊農 柳弘
 大阪市 川端 一步
 鳥取県 西谷 悦子

ミキサが嘘と本音を捏ねまわす
 硬化した愛を蒸し器が蘇生する
 買ひ替えるたびに小さくなるお鍋
 子が菓立ち小さくなったカレー鍋
 鉄鍋は肉じゃが用と決めてある
 大鍋に鯨ゆつくり横たわる
 逃げ道が少うし欲しい落し蓋
 旨すぎる話はざるで漉してから
 月食に見惚れて鍋が焦げている
 見習いの日々黙々と皿洗う
 皿洗いまだ包丁は先のこと
 包丁一本老舗支える料理人
 鍋釜も輝いている妻の城
 母さんの目線はいつも鍋の底
 提げてきた手鍋もやがて五十年
 われ鍋にきつちり合わす妻の蓋
 見渡せば兇器だらけの台所
 まな板のくぼみに隠す破裂音
 ぐつぐつと絆を煮込むおでん鍋

秀 句

豊橋市 藤田 千休
 明石市 梶谷 和郎
 紀の川市 楠原 富子
 西宮市 藤本 直
 弘前市 稲見 則彦
 西宮市 山本 義子
 和歌山市 武本 碧
 和歌山市 古久保和子
 和歌山市 石橋 芳山
 松江市 小野句多留
 横浜市 稲葉 洋
 泉佐野市 澤井 敏治
 堺市 加島 由一
 堺市 雑賀 一泉
 三田市 鈴木いさお
 藤井寺市 三島 淞丘
 松江市 高瀬 霜石
 弘前市 中井 アキ
 富田林市 寺川 弘一
 枚方市 北野 哲男
 三田市 尾崎 一子
 三田市 松尾美智代
 豊中市

気遣いて掃鉢蓮華大奮闘
 ヘラ一つ和菓子のコツを覚えてる
 あれこれと道具揃えて冷奴
 包丁使い遺影の妻の櫛が飛ぶ
 包丁を研いで心の凧を待つ
 ジューサーにかけて一気今日鬱
 調理器具味方にひとり生き延びる
 摺子木で母の小言をすり下ろす
 二人では土鍋の余白埋められず
 トングより菜箸ピラーより包丁
 人事部長夜な夜な出刃を研いでいる
 見渡せば兇器だらけの台所
 元氣かと電子ポットに見張られる
 包丁と俎間の唄うたう
 女系が続き揃り粉木なおも禿びてゆく
 自己主張のとっても強い泡立て器
 旨すぎる話はざるで漉してから
 ゆきひらをここと亡母と話す
 レンジでチン愛を素早く温めたい

秀 句

富田林市 古田 千華
 熊本県 岩切 康子
 和歌山市 坂部かずみ
 枚方市 丹後屋 肇
 橿原市 居谷真理子
 河内長野市 村上 直樹
 吹田市 木下 敏子
 吹田市 太田 昭
 鳥取県 斉尾くにこ
 八尾市 高杉 千歩
 奈良市 米田 恭昌
 弘前市 高瀬 霜石
 奈良市 谷川 憲
 八尾市 村上ミツ子
 米子市 政岡未延子
 大阪市 谷口 義
 和歌山市 古久保和子
 寝屋川市 森 茜
 高槻市 富田 美義
 米子市 成田 雨奇
 富田林市 中井 アキ
 尼崎市 藤井 宏造

『夢』

松山 芳生 著

木本 朱夏

序文は青森の怪人ならぬ快人・高瀬霜石さん。「句の男 松山芳生ここに在り」も、岩淵黙人さんの跋文「いのちの音を聴く」にも、芳生さんへの温かいエールが満ちている。それは取りも直さず、芳生さんのお人柄の反映と言えよう。

永年連れ添った愛妻への相聞・挽歌はキラキラした出来合いの言葉ではなく、素朴に温かい心情にあふれ、読み手の胸に静かに沁み通つてゆく。

命日に亡妻のほたるが舞う遺影

微笑んでくれる遺影だとしても

灯籠流し点になるまで語り合う

父無念胸部貫通銃創記

軍服が静止画像のままの父

斎場の煙ぶつきらぼうになる

句集は「鎮魂」の章から始まる。平成十九年の夏に亡くされた最愛の妻への鎮魂、そして戦傷を負い八十年の生涯を全うされた父への鎮魂。平成十六年から始まった芳生川柳の原点をここに見る。

芳生さんは北海道旭川に生まれ青森県で育つた。雪と闘い雪と共存する日常であらう。「雪が降るもうどなたでも許したい」は、雪と闘つた果ての叫び、絶唱、あるいは悟りでもあろうか。

少年の夢が嵐の中を発つ

遠い日の夢水色のまま朽ちる

ときめいた夢のかたちが捨ててある

青春のところがどこにある残夢

見舞いには来ないで髪が伸びるまで
病院の廊下が僕の散歩道
手を握り愛するものを確かめる
爪を噛むどこかに恋を滲ませて
好きだからあなたの傘で半世紀

句は人であり、句集はその人の人生を語る。「夢」には人生の折り返し点を過ぎてなお、少年の日の夢を忘れない句の男・芳生さんの素顔が覗く。

青森県には「川柳塔みちのく」を初めとして、「はちのへ川柳社」、「弘前川柳社」、「川柳触光舎」、「北貌の会」、そして「おかげようき川柳社」その他、たくさんの川柳結社、グループがある。いわば川柳王国と言えよう。それら多くの柳社は結社の垣根を越えて交流をはかっている。

二〇〇九年六月十四日、青森市の浅虫温泉で「第一回触光交流川柳大会」が開催された。その会場で福土慕情さんに紹介されたのが、同人に推薦されたばかりの松山芳生さんだった。人懐っこい笑顔が初対面の堅苦しさを溶かしてくれた。

芳生さんの第一句集『夢』。夢の一字は紫。ロマンティックなタイトルに芳生さんの人となりがよく顯われている。

荷物

河川 無限選



貝がら節聞いておかえり荷にならぬ
人間というお荷物を抱く地球
国の荷を重くしている高齢化
里からの荷物途絶えた母の死後
親切をぎつくり腰にする荷物
時間では消せない傷を背負つてる
原発がお荷物になる地震国
嫁ぐ娘の荷物に詰める親心
荷物にはならないようにどっこいしょ
大変なお荷物でしたドラ息子
お荷物になってあなたを独り占め
女房のお供赤帽やつている
肩の荷を降ろす我が娘のウエディング
手荷物に笑い袋が入れてある
将来へ荷物負わせている政治
背にリュック両手に荷物母強し
辞書ひとつならば作句の荷にならぬ
背の荷物おろして明日の風になる
国民にばかり荷物を背負わせる
希望という名の荷物なら持つている
しよいこんだ荷物に力もろている
未来への重荷背負つて呱呱の声

一弘 敏治 象山 茶子 茂 正和 宏章 山 弘子 勝視 光久 玄也 浩二 よしみ セツ子 ばつは 和郎 菜摘 順子 裕花 みつこ 恭昌

ふる里の山へころの荷をおろす
成り行きでとんだ荷物を負うことに
荷物みな捨てて三途の川渡る
表札を息子に変えて荷をおろす
受け取りを渋るガレキの送り状
重い荷を二人で分けて軽くする
大きいから重いと限らない荷物
荷物にはならぬ民話を持ち帰る
収穫のうれしい母の荷が届く
沖繩にいつまで重荷背負わせる
思い出の荷物ばかり捨て切れぬ
しやかりきに妻子をしよった背が丸い
魂が重荷になってまだ逝けぬ
網棚に荷物がひとつ眠つてる
ランドセル重い未来を背負わされ

(石)美恵子 圭一郎 富子 富子 かつ子 悦子 美津子 慕情 美智代 (後)美恵子 西和子 幹子 一粹 孝一 強一 哲男 秀四 くにこ 日の出 霜石 芳生 千代子

わが物と思えば軽し酒二升
月末のピンチに母の荷が届く
前カゴに夕陽を入れて帰ります
天 地 人
ふるさとの森へ明日の荷をおろす
長いこと貨物列車を見ていない
出しゃ張つて重い荷物を持たされる
日本のお荷物ですか削いだ土砂
その時は重い荷物を捨てましょう
原告と被告どちらも重い荷だ

鈴木いさお 千代子 裕花 賢子 泰女 弘光 ちかし 節子 千歩 千代子 慕情 芳山 茂代 五月 美千代 篤 倅子 ひろ子 孝雄 政勝 蜂朗 照彦 毅 裕花 賢子

あやうい

瀬戸まさよ選



生真面目に生きた男の黄昏期
守護神の乱調ベンチ慌て出す
妻や子を背負いあやうい橋渡る
何もかもカードの時代ご用心
消去キーあやういとこで気がついた
土砂降り慌てて駆けるピンヒール
命綱つけず傘ちゃん雪下し
物忘れ進むあやうい道に迷い込む
逸り過ぎてあやうい道に迷い込む
よちよちと杖信号が黄になった
あやういが強いリーダー望む票
あやういとあおつておいて選挙勝ち
お嬢さんスカート短か過ぎますよ
趣味広げあやうい脳を掻き回す
イッキ飲み酒を冒瀆する勿れ
少年の非行に家の子もからみ
黄海へポチャン肥満の三代目
国のツケ九百五十九兆円
EUがあやうい国を持って余す
想定外あやうい言葉だけ踊る
壊れそうだから強がり言ってます
過ぎ去ればあやうい愛も宝物

泰女 弘光 ちかし 節子 千歩 千代子 慕情 芳山 茂代 五月 美千代 篤 倅子 ひろ子 孝雄 政勝 蜂朗 照彦 毅 裕花 賢子

集 路

原発を活断層にちりばめる

千休

放射能此処にも飛んでくるらしい

螢

絶滅の危惧種ヒト科となる悪夢

強一

あやういと思う返事は妻にさせ

美恵子

ミサイルの照準ひがし向いている

隆盛

談笑へあやうく本音吐くところ

悦子

大胆はあやうい言葉知りません

典子

旨い舌体知ってるアレルギー

康子

すれすれのセーフに絵馬がゆれている

菜摘

あやういと思つた時にうまい嘘

五月

左も右も御用済みです僕の脳

ばつは

無礼講上司の耳は酔つてない

キヨミ

ほんとうのあやうい話口つぐむ

山久

憂国の志士が現れそうな御世

時雄

あやういを売り物にして女です

弘風

佳

果立つまで気がでならぬ佐渡のトキ

志千代

わたくしはちつともボケておりません

みつこ

独り旅アパンチュールも視野に置く

哲男

先生が黙り込んでるレントゲン

可住

過労死の一步手前のスケジュール

正雄

人

一〇〇億に増えても空気足りませんか

修

老い二人あちらこちらにメモがある

岸孝子

地

変態と大文豪の紙一重

高瀬耀石

天

泥舟と知らず乗せられ世相知る

軸

ポンポン

黒田 能子選



謝罪する言葉は弾んではならぬ

せつ子

ポンポンと相手にものを言わせない

千華

ポンポンと言うが限度をわきまえる

小雪

ポンポンと持論いつもの評論家

かつ子

ばんばんとまだ断捨離が出来ません

比呂朗

叩き売りのリズムが止まる売れ残り

芳生

ポンポンと当り散らして気を晴らす

光久

ストレスをポンポン吐いて来た旅行

美千代

ポンポンと肩たたかれた久しぶり

倫子

小言幸兵衛 喉が渴いてしょうがない

霜石

ポンポンと覚悟を決めて弾く豆

一粹

景氣づけ昼の花火は音ばかり

哲男

エコバッグポンポンにして娘は帰る

宏子

滑舌が良かった頃がなつかしい

萌子

ときめきのハートポンポンよく弾む

朝子

佳

ポンポンとそうした易くは教えない

森生

ばんばんと音符がはねるランドセル

裕花

躊躇する背なをポンポン叩かれる

准一

小気味良い啖呵だ赤い唇だ

捷也

ポンポンと貴方次第で弾むマリ

日の出

人

拍手を打つと浮力が湧いて来た

よしみ

地

ポンポンポンプラス指向に弾む音

美津子

天

チアガールのポンポン天を突く若さ

渡辺富子

軸

ポンポンと叱るあなたにある温み

雅明

堅坊

ちかし

弘子

孝雄

キヨミ

茂

江勝弘

正雄

鈴いさお

勇

扶美代

菜摘

上紀子

としお

玄也

徹子

一風

茂代

雅枝

忠

黒兎

雅明

初歩ノ教室

題一 ブレンド

鈴木公弘

紛らわしい出題をしてみましたよ。フレンドとかブレゼントの句がありました。無記名のまま原句と…作句を掲載します。

原もらうのも好きあげるのももつと好き

添あげるのも好き貰うのはもつと好き

原何事も同じ思いの友が好き

添何もかも同じ思いの友が好き

【少し直した句】

原政策をブレンドにして数合せ

添政策をブレンドにして数合わせ

原女房にブレンドされた枯落ち葉

添女房にブレンドされた枯れ落ち葉

動詞の送り仮名の省略について、インパ

クトのあるほうを残すべきでしょう。この

句の場合「枯れ落葉」がいいと思います。

原たてまえと本音ブレンド使い分け 英男

添たてまえと本音ブレンドして使う

建て前と本音を使い分けるのならば、ブ

レンドしてしまつてはいけません。

原ムンクの絵ブレンドすればピカソの絵 紀雄
添ムンクの絵ブレンドすればダリの絵に

ムンクの絵を、何とブレンドしようと思

れたのか理解できませんでした。おそらく

ムンクの絵に用いた絵具をパレット上で掻

き混ぜたら、ピカソの抽象画になるという

意味かな、と推察して添削しました。

原恋と恋ブレンドされて華が咲く 滋彦

添恋と愛ブレンドさせた華が咲く

原太陽に月をブレンド黄金リング 山久子

添太陽と月のブレンドリングで

原シェーカーのリズムで造る旨い酒 義雄

添シェーカーのリズムで作る美味しい酒

原土と肥棚田代掻きトラクター 畑節子

添土と肥混ぜる棚田のトラクター

出題の意図に沿つた言葉だけを選んで一

行(詩)にまとめてください。

原田を渡る風のブレンド青田風 道子

添田を渡る風のブレンド心地よし

原雑魚と雑魚ブレンドしてもやはり雑魚 宏造

添大成の日を雑魚なりに期待する

原句の上二つの「雑魚」に、どなたか人

間を入れてみてください。たとえば「父と

母ブレンドしてもやはり雑魚」：嫌味な句

になりませんか。川柳と狂句の違いは目線

の位置にあると思います。対象となるもの

を見下げて描かないでください。

原ブレンドのコーヒきれていらいらし開 子
添ブレンドのコーヒきれていらいらす

原句のように下5を動詞の「し」で終ら

せる作り方を「し止め」と言つて、禁じ手

とされています。これは「サ行変格活用」

の動詞三つのうちの一つ「する」に由来し

ています。詳しくは国語辞典の終わりのほ

う(活用形が書いてある所)を見ていただ

きたいのですが、この「する」という動詞

は特殊な用いられ方をします。つまり未然

形(現時点では否定)も連用形(肯定)も、

いらいら「し」となるのです。それでは原

句の、いらいら「し」は「いらいらしま

ん」(未然形||否定)なのか「いらいらしま

す」(連用形||肯定)なのか、どちらでしよ

うか。正解は、同じ「し」なので、どちら

か判別できない、ということ。そこで、

いらいらする(肯定)と言いたい場合には、

否定(未然形)の「し」として使つていな

いことを明確に示すため、「いらいらす」ま

たは「いらいらする」と表記します。

これは元に戻せば「する」という動詞に

なる場合だけに通用する話です。したがつ

て、たとえば「また嬉し」などのように、

元々「嬉し」という形容詞を音字数の都

合上「嬉し」として使う場合などは全く問

題になりませんので、「し止め」にしても構

いません。この違いもしつかり覚えておいてください。

原 ブレンドしこくを深めたカレー鍋 治子
添 ブレンドしてコクを深めたカレー鍋

この句も理屈から言えば「し止め」に似ていますが、上の部分であり、中との接続性を考えると、肯定か否定かの判断ができませんので、「し止め」のような問題はないと理解してよいでしょう。

原 再始動祈り織り込み桜咲く (穂) 正子
添 治癒をした喜び込めて再始動

再始動の理由が読み取れませんでしたが、添削句では、病気全快からの再出発ということにしました。

原 友情のブランド品にすぎま風 美知江
添 友情のブランド品の間の平和

「の重ね」に準じる添削を試みました。

原 卓球のブランドチーム抜群だ 紀美恵
添 卓球のチームブランドだが強い

原 セシウムがブレンド疑惑事故の海 勝治
添 セシウムがブレンドされた海疑惑

原 ブレンドな味わい顔がシブくなる 雄太
添 ブレンドのお茶味わって渋くなり

【準入選句】
白米にヒエ粟麦を混ぜて食べ 登美子
夏野菜ブレンド肥料元肥に 冷子

ブレンドのお茶にハートの恋がとけ (山) 弘子

ブレンドのお茶にハートも混ぜておく
ブレンド米個性競った水加減 エミ

ブレンド米の個性を競う水加減
コーヒーのブレンド選ぶワンコイン 晴雄

自販機のブレンド選ぶワンコイン
異常気象ブレンドされた暴風雨 律子

異常気象にブレンドされた暴風雨
偽物をブレンドにして大儲け 秋星

極めてリアルな句になりました。反面教師として考えたいと思います。

お互いの良い面継ぐも落ちこぼれ
これまた厳しい句ですね。 克三

下戸ばかり女ばかりの花の宴
納豆のような粘りで生きて行く 俊子

ブレンドは七対三でいい夫婦
ストレートが緩急使い威力増す 武臣

「緩急使いストレート威力増す」…七五五の例外型でもOKです。

元の名が思い出せない会社名 (山) 妙子
苦と柔の度合いで決まる幸福度 利夫

採れたての旬の味です混ぜ御飯 真由
同じ意味の言葉を重ねないでください。

【入選句】
苦も柔もブレンドされて鍛えられ 秀子
スポーツ界人種混合大流行り (株) 玲子

ブレンドでいい味をだす相撲界 堅坊
口口の意見まとめた名議長 元三

ブレンドのお茶飲まされて眠られず 一泉
長男と二男ブレンドしたい親 弘光

コップ酒笑顔ブレンドする女将 ひろ子
推測を噂話に足して告げ 寒之

ブレンドが国籍超えた味創る 憲
ブレンドの妙味覚えた舌を飼う 安子

ハイボール竹馬の友と乾杯す 洋一
僕の血が混じってるからこの美貌 篤

あれこれと智恵のブレンド料理好き 一子
ウォーキング脳のブレンドやつてます 温子

【佳句】
パレットで命が芽ぶく色のあや (楠) 富子
山の気とブレンドしたい街の風 孔一

気楽さと孤独ブレンドしてひとり (白) 淑子
ブレンドの色が気になる青い薔薇 久美子

兄弟が何故こんなにも違うのか 利子
【今月の推薦句】

細い父ぶくよかな母居てワタシ 氷見 心咲
ワタシの貌が見づらぬ難点があります。

生二本ブレンド知らず生きてきた 増田 和幸
がんに心印の方に多いようですが…。

言い合える友とおんなじ舌になる 前田 洋子
言いすぎないようにしてくださいね。

【私の句】
恋一つ風がブレンドしてくれた
高らかにブレンド祝うこいのぼり

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

秀句鑑賞

同人吟 竹 治 ちかし

— 6月号から

昼間から飲んでいよいよ言つ桜

竹 村 紀の治

川柳を始めた頃ある師から、「川柳は色紙に書いて玄関に置いておけるような句を作るように」と教えて頂きました。それが正しいかどうか分かりませんが、今でもそれを大切にしています。

ある時「川柳」とは何かと辞書で調べてみたところ、狂句もどきの説明があるものがありました。このことを日川協に話したところこの件を各出版社へ申し入れて、出来れば次の版より訂正をして頂くことになり、とても嬉しくありがたいことと思いました。少しでも川柳に対する偏見がなくなるように皆で努力していきたいものです。

煩惱を捨てたら灰になる私

三 島 沁 丘

煩惱とは衆生の心身をわずらわし悩ませる一切の妄念とのこと。百八煩惱とか八万四千の煩惱とか言われるくらい多くの煩惱があり、凡人にはとうてい悟りの域には届かない。だから灰になるまで煩惱との戦いである。

一年に一度、誰からも文句を言われず昼間からお酒が飲めるなんて、桜に万歳である。人間に生まれてきた幸を感じる春である。

ジャンケンボンクーで勝つても気は晴れぬ

小 寺 花 峯

ジャンケンは三すくみの如くであるから、勝つにも三通りある。しかし何故かクーで勝つてはすつきりと言われたいとされる作者に同感である。やはりジャンケンは、握った手で勝つのではなく、パーと開いた手で勝たなくては。

栄養をやり過ぎ咲かぬ子も花も

榊 本 宏 子

大切に大切に育てた花が思つたような花を付けないことは良くあることです。植物がそうであるように人間も同じことが言える。可愛い我が子、可愛い孫にも、くれぐれも栄養を与え過ぎないように。思いが仇になりかねませんよ。

断捨離が出来ずにごみと暮らす老い

澤 井 敏 治

思わず私のことを詠まれたのではと思いましたが。最近急に言われ始めた断捨離という言葉、それを盾に妻の攻勢を受けるはめに。ロマンの解らない彼女曰く、あなたといればごみ箱にいたるみたい。いずこも同じですか。

落ちぶれた人にも妻の待つ灯り

富 田 美 義

なんだかんだと言つても、妻あつてのものです。口には出しませんが、妻の灯りが待つているから、男も頑張れるのです。

来年も来れるだろうか桜花

中 崎 深 雪

若い頃は思いもしなかつたのに、年を重ね老いてきた今、友が一人二人と欠けてくるといつそその感が強くなります。桜の花に心を寄せて、来年も会えることを願います。

分れ道右を選んだのも運命

鈴 木 い さ お

この世に生を受け、今ここに居るのも運命でしょう。これまでに幾度もあつた分かれ道も、右を選んだのもよし、左を選んだのもよし、その逃げることの出来ない運命の中で後悔はせずに、一生懸命生きることが大切な事でしょう。

妥協するたびにわたしが弱くなる

杉本義昭

簡単に妥協などはしなかつた若い頃。あつちでぶつかり、こつちでぶつかり、それも今となつては遠い出来事です。悲しいことだけれど、当たりさわりのない方へ流れている自分、妥協するたびに弱くなつてきた。

ゼンマイが切れぬ程度にネジを巻く

米澤 徹子

頑張つて欲しいからきつくしつかりネジを巻いてしまう。大切にしていた古い柱時計も巻き切つたことを思い出す。何事も切れぬ程度が大切であると解つてからは大人です。

想定外言わず桜は咲いてくれ

加門 萌子

想定外という言葉が一人歩きをし、都合の悪い色々な場面ですく使われるようになって、そんなずるい人間をよそに、これだけ大変なことがあつた中、桜は立派に咲いてくれました。ありがとう。

白よりも白くならないなと思つ

柏原 夕 胡

心のきれいな人は、よりきれいになりたいと思つてさうです。私のような俗人は、グレイでも少し白が入れば、まあ良いかとしてしまします。ですからよけいこの句に憧れます。

徳利が転び文学論に酔つ

両川 無 限

徳利が転ぶと、あちこちに論客が表れます。口角沫を飛ばして真剣そのものです。「川柳とは……」とおおいに論じ合いたいものです。ほど良い酔いに加えて一層おいしいお酒になることでしょう。

古希過ぎてまだ軸足が決まらない

成 田 雨 奇

「四十にて惑わず」と言われますけれど、なかなか出来ることではありません。古希過ぎても、というのも辛いところですけれど、このまま終わらないようにしたいものです。

生きよう愛そう過去形にしたいくない

松 本 文 子

破調の句ですけれど、作者の強い気持を感じ取らせてもらいました。「過去形にしたいくない」に、二度となんか人生を精一杯生きることの大切さを覚えました。生きよう、愛そう、命ある句を創ろうです。

口止めをされて重い荷を分ける

伊 藤 寿 美

口止めをするくらいなら聞かなければ良かった、言つてもらいたくなかつた、と思つた。言つた方は言つた分少し荷を軽くしたのかも知れないが、背負わされた私は大変である。

無礼講だから喋つてなりません

牧 野 芳 光

無礼講と言われ素直にはしゃいだ付けが、後日熨斗を付けてやつて来た。くれぐれもその気になつてはいけません。ご注意を。

等分に愛を盛つてる母の皿

大 石 あすなろ

母の愛は、何人子が居ても等分に注ぐことが出来るのだと聞いていました。子供のころ愛を受けられなかつた子供は、大人になると要注意だそうです。無限の愛を、おおいに盛つてあげて下さい。

やり直し出来れば香子を胎内に

石 原 淑 子

思わず、この句の凄さに唾をのみ込みました。これが真のお母さんなのでしょう。胎内という言葉が使える女性に敬服すると共に、女性でなければ出来ない句だと感激致しました。

も一人の私が裾を踏んでいる

藤 岡 ヒデコ

少し前どこかの国で居ましたね。スカートが踏まれて進むことが出来なかつた大臣が居たとか。この句の場合は他人ではなく、私の中のもう一人の私ですから、ゆつくり話し合つて妥協点を見出して下さい。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 6月号から

山田 耕治

ほんのりと菜の花苦く あすは雨

上田 ひとみ

近付く雨気を感じるの原始本能か、菜の花の頃は雨が多い。菜の花和えのほんのりとした苦みを噛みしめながら、雨気を感じている。しつとりといい時間が流れている。

行くあてのない風船の手を離す

田中 由美子

風船とはあなたご自身の心のことと思えました。何処へ漂着するか、私の心は風まかせ。どこかアンニュイを感じさせる句です。

幸せは明日の予定組めること

小川 イセ

お体のこと、ご家族のこと、今いつときも平穩。健康で、ご自分で使える時間を持つて幸せ。同感です。

クラス会お前の元氣くれという

北澤 桐 民

あちこちが痛い、ここが悪いと必ず体の話が出ます。中に趣味やボランティアをバリバリやつてる元氣なのがあると、お前のその元氣が欲しい、という話になります。クラス会の雰囲気うまくまとめられています。

日に一度何か出来たら二重丸

貝塚 正子

洗濯でも、居間の掃除でも、古い衣服の整理でも、郵便局へ行く用事でも、一つできたら十分です。ああひとつ済んだ、どっこいしょと、お薄でもいただいでください。二重丸というのが面白いですね。

道尋もつと聞きたい京言葉

関 よしみ

町家の路地が目に浮びます。その土地の言葉を聞くのも旅の情趣。思い掛けなく、憧れていた京言葉を聞いた感動が素直に表現されていると思います。

一線を画す愛などいりませぬ

酒井 真由

きっぱりと「いりませぬ」。愛はそんなものではないとおっしゃっています。そうだそうだ、その通りです。しかし柵多い世の中です。

死ぬまでに悪いところはみな治す

泉 水 冨子

面白い句です。体のことですね。言われてみればその通りだなと思えました。あちらへは元氣な体で行きたいですね。

三文の得だが四時は早過ぎる

巖 田 かず枝

そうですね。私もだんだん早く目が覚めるようになりました。傍迷惑と言われるでしょうが、これからは一日一日大切な二十四時です。

米寿まで三百六十五のマーチ

大 峠 可 動

手を振って足をあげて、転ばないように、一歩ずつ行きましょう。毎朝、元氣にウォーキングされているお姿が目につかびます。

蛍飛ぶ川を夢見て拾うゴミ

上 山 堅 坊

増水が退いたあととの川岸の草木に、花が咲いたようにからまつている無数のビニール袋を見たことがあります。日本の海岸に死んで打上げられる海ガメの殆どが、好物のクラゲと間違えて、ビニールやプラスチックを食べていたという調査があります。苦しかったでしょうね。胃の中にレジ袋が何枚も。



十四字詩と向き合う (2)

前号では、私が選者を務めたときに混じっていた十四音の作品を「破調の一種と受け止めて、内容が良いのは採ろう」と考えたことを記しました。それは、「十七音にまとめようとしたが、結果的に十四音になってしまった」と解釈してのことです。しかしながら、十四字詩は、最初から七音七音という形式を目指して作句しています。

川柳 ↓ 五・七・五の、十七音を目指している。
十四字詩 ↓ 七・七の、十四音を目指している。

改めて比べる必要もないほど明確なことです。川柳と十四字詩の違いは右ようになります。このように、最初から目指す形式が違うということは、やはり、川柳と十四字詩は別のジャンルの文芸だと判断するのが妥当でしょう。

ただ、「別のジャンルの文芸」だと割り切つて、「自分自身は作らない」と決めていても、そのようなジャンル分けは意に介せず、川柳の句会や大会へ提出される十四字詩とどのように向き合うか、各自が判断しなければなりません。

先ほど述べたことと重複しますが、もう一度整理します。
A 川柳作品として、十七音を目指したが、結果的に十四音にまとまってしまった。

B 十四字詩として、最初から七音七音を目指した。出来上がった作品が同じ十四音という形であっても、その作句姿勢には明確な違いがあります。Aは「川柳として作った」のであり、Bは「十四字詩として作った」のです。しか

しながら、提出された作品を見ただけでは、当初の作句姿勢がAであるのかBであるのか分かりません。すなわち、作者の意図が「川柳として作った」のか「十四字詩として作った」のかは分かりません。では、どのように対処すればいいのでしょうか？

① 川柳作品として十七音を目指して作句しているのであれば、十七音にまとまるまで努力すべきである。十四音は川柳として認め難いので没にする。

② 十七音を目指した結果のやむをえぬ十四音なのか、最初から十四音を目指したのか、そのような作句姿勢は問わない。内容さえ良ければ十四音の作品も採る。

端的に言えば、右①②の、いずれの見解で選にあたるかになります。そして、冒頭で述べた、「破調の一種と受け止めて、内容が良いのは採ろう」は、②に近い考え方でしよう。

ここまで書いてきて、「あのときは緊急に対処したが、今後はどうするのか？」と、改めて考え直してみました。が、やはり私は、今後とも②で向かおうと思っています。

文芸や芸術に絶対的に正しい指針などはありません。絶対がないからこそ、より優れたものに向かつてエネルギーを傾注し、あれこれ模索しながら創作を続けることができるのです。もちろん、ここで述べていることも私個人の見解であり、あくまでも参考意見であるの言うまでもありません。

なお、本稿では、この七音七音という形式を便宜上「十四字詩」としていますが、「短句」と称しているところもあります。(社)日本川柳協会では、協会の立場として統一した名称にするべきかと、検討中であることも付記しておきます。



地車の街に川柳の風を

ありがとう井伊東吉さん

岸和田川柳会 会長 岩佐 ダン吉

「すごい、見てみて」車内を子ども達が走り回っています。

4月の初め、川柳塔わかやま句会を終えひとりJR阪和線の山中溪駅を通過していた時のことです。車窓には空まで燃えているような桜、さくらの世界。ふっと一ヶ月前にお別れした井伊東吉さん（岸和田川柳会元会長）との遠い日々が甦ってきました。

和歌山からの帰り30分ちかく、よく東吉さんと車内でとりとめもない話をしていましたがある日、

「ダン吉さん、岸和田に川柳の風を吹かしましょうや、いつもはどちらかというところ領き役の東吉さんが「川柳界でも高齢化が進み会員の減少はさげられませんかなあ」「こうなると岸和田も「句会に来てくれ」やだけでなく身近な場所に川柳の小グループ・勉強会を立ち上げ新人を養成したら「川柳の裾野を広げたら」；熱弁は続きました。

言葉だけでなく東吉さんは間もなく住んでいる街に「東ヶ丘川柳会」を。和泉葛城山の

麓にある牛滝温泉・いよかの郷では社長やスタッフのご協力で「あっぱれ川柳会」を、さらに虫喰い川柳や岸和田川柳会の月例会の三才吟などの「川柳展示コーナー」の常設；正に有言実行の見本のような人でした。

「市内全町の老人会に秋の60回市民川柳大会と毎月例会の案内を送ったらどうやろ」の話も東吉さん。間もなく175老人会（2196人）の名簿をつくり郵送もありましたが、10人の役員が自己紹介をかねて自宅近辺の会長宅を訪問しました。

大会には数人の見学者もあり「川柳の会合を見せてもらったのは初めて；活気あるし楽しそうやなあ」の声もいただきました。

市民の中に打って出よう、東吉さんの思いは会長を退かれた後も第2次とも言うべき取組が始まっています。句会終了後の懇親会でお世話になっている居酒屋さんと役員会に借りるレストラン、ホテル、さらにはクリニックスや法律事務所にまで川柳の色紙や会報「きしせん」の展示、宣伝をお願いすることが始つ

てきました。

さて06年に会長に就任した東吉さんは「明るく楽しい句会に」「高橋操子（本会の創立者）さんの志を継承」「仲間を増やす」「川柳塔社との連携強化」「他柳社との交流拡大」の5つを目標にかかげました。とりわけ他柳社との交流には力を入れ、連日の近隣句会への参加には目を見張るものがありました。

川柳塔社でも常任理事として諸大会の企画から句会の昼間開催、事務所の移転などにも尽力しました。また東吉さんは「川柳界にもすごい人がいてたんですなあ」と反戦川柳人鶴彬の生誕100年を記念した映画「鶴彬こころの軌跡」の岸和田上映にも力を尽しました。

寡黙の上にアルコールもやらない東吉さんから、お宅のことやご自身の健康などについてお聞きすることは余りありませんでした。でも時に宴席や集会の時に「千の風」から「長崎の鐘」；朗朗と歌う姿は今も岸和田の仲間語り種となっています。

梅雨空のようにスカツとせぬ身体

三重苦地震津波に放射能

きしせんの新スタッフに明日を期す（東吉）

東吉さん。会報「きしせん」も岸和田の香りも入れて6頁に。句会後には選者や仲間も入って懇親会を；13人の役員はひきつづき「岸和田に川柳の風を」と一歩ずつ前進しています。東吉さん、ありがとうございました。



追悼

乙倉武史さんを偲ぶ

高槻川柳会 片山 かずお

去る二月二十九日、乙倉武史さんが逝去されました。享年九十四。ご家族にお聞きしたところでは、昨年末に胃癌の手術をされていたそうです。川柳塔に投句がないことを案じていた矢先の、訃報でした。

武史さんについて、高槻の柳友の皆さんは異口同音に、「シャイで、本当に寡黙な人だった」「ご自分から話しかけられてこられることは少なかつたが、こちらから話しかけると丁寧な話される紳士だった」と、言われる。

四年前には川柳自分史『つれづれ』も上梓されていたそうです。

私が初めて武史さんにお目にかかった

のは、五年ほど前の句会でした。第一印象は「実直そうな人」でした。事実分らないことをお尋ねすると、いつも丁寧な教えてくださいましたが、その話し方が訥々と、実直そのものでした。

また、何度か理髪店でお会いしましたが、ご自分が先に終わられると、私のような弱輩にまで「お先にー」と、わざわざ声をかけてくださるような、心配りをされる方でもありました。

いつも句会では前の方の席に座られて、じつと披講に耳を傾けておられた姿を、今でも思い出します。きっと天国の句会でも、前の方の席に座られて、楽しんでおられることでしょう。

ご冥福をお祈りします。 合掌

遺句抄

長生きの秘訣は無理をせぬことだ
氣を揉ませながら辛勝タイガース
生きているうちが花だと酌ぎにくる
好奇心燃やして脳は休ませず
薔薇林檎漢字特訓脳に活
退屈という贅沢を敵にする
健康は宝仲良し万歩計

この世まだ残夢一献傾ける
脳の錆落とす句会を梯子する
老いぬれば日にち薬と言ってお医者
ぎくしゃくの世に晩酌の潤滑油
混沌の世に骨のある政治欲し
楽天家遠出のように入院す
忘れずにノートとペンと電子辞書
癌告知でも神妙にお受けする
手術後の養生訓は先ず咀嚼
退院後三日目やる気頭もたげ
これからは軌道修正ゆっくりと
ふる里の追憶うまし祭り寿司
身の程を知って無謀な夢は捨て
歩け歩け良い習慣だ良薬だ
仕切り直しする人生も黄昏れる
残照へ気分転換万歩計



高瀬霜石の津軽おむし景色

奇数月の連載になります。

愛のタマネギの巻 ⑩

「一盗(いっと)、二碑(にひ)、三妾(きんしょう)」
―落語にもよく出てくる、いわゆる、江戸の好きもの男
どもの、浮気スリル番付だ。

1番は、他人さまの奥さんを手に入れること。

2番は、女中さんに手をつけること。

3番は、お妾さんを持つこと。

本妻公認のお妾さんも、結構いたらしい。コレ、気軽
でよさそう。ところがどっこい。奥さんが2人いるよう
うるさくてかなわないとも。あー、なんとも贅沢。

愛人の部屋で玉葱炒めている

霜石

ある日、同居人が、この句は一体何? と僕の前に差
し出した。浮世の義理で、いろいろな柳誌に投句してい
るので、自分の句をちゃんとは把握していない。
とある柳誌に載ったこの句。普段は彼女の目に触れる
はずもないのだが、偶然見てしまったのだなあ。

「どういう意味かつちゅーと、つまり、タマネギを炒め
るのは結構時間がかかる。でもまあ、愛人と一緒なら、そ
んな時間も厭わない。イヤ、むしろ楽しい時間なのでは
ないか。そんなことをいろいろ想像して作ったのだよ。」
同居人は、納得したような、しないような、ただフー
ンといった感じで引き上げて行った。

「カレー作るんだけど、手伝ってくんない? タマネギ

炒めて欲しいのよ」と呼ばれたのは、しばらくしてから。

僕はなにせ優柔不断だから、柳誌のほかにもいろいろ
頼まれて、連載が何本もある。ラジオもある。台本とま
ではいけないが、下準備(メモ程度)はしなくてはなら
ない。だから、家にいる時は、たいていワープロの前に座っ
ている。その時もそうだった。

「今忙しいから、カニしてケ」と叫んだ。

この「カニ」は、蟹ではない。「堪忍」が縮まった津軽弁。
「ケ」は頂戴の意。つまり「今忙しいから、堪忍して頂戴な」
と哀願しているのだ。

すると敵は、常識では考えられない攻撃に転じた。

「ア、ソー。ソーなの。愛人宅でタマネギを炒めるのはや
ぶさかではないけれども、本妻宅ではイヤだつーこと
ね」ときた。

これには閉口した。女は怖い。突拍子もない論理で攻
めて来る。以来十数年、僕は本妻宅でひたすらタマネギ
を炒めている。グスン。

大阪では、お妾さんのことを「こなから」と呼ぶそう。

半は「なから」―そういえば、ちよつと前までのNHKの
色つぽいお天気お姉さんの名前は「半井小絵」―一升の
半分(五合)が「なから」だから、そのまた半分(二合半)
が「こなから」。二合半Ⅱ「二号はん」という落ち。

桂文珍が、マクラで言っていた。



(六) 仙台堀・永代橋をゆく

深川資料館を出て寺町を南に向かい、仙台堀に着く。

仙台堀沿いに幅一件余りの遊歩道「歴史の道」を歩き、仙台堀を跨ぐ二つ目通りの海辺橋をめざす。

仙台堀という名のいわれは、大川口に仙台藩の下屋敷があつたからだ。再び二つ目通りを南に向かう。この辺りも寺町が続く。寺町が切れる南端に陽岳寺があつた。

「細い運河に架けられた小さな橋の向こうに、陽岳寺の土塀が見える。左へ視線を転ずると黒船橋の南詰めに、又六から聞いた三好屋という居酒屋がある。陽岳寺の門前には橋が三つ。堀割には、ぎつしり舟が舫つてた」(『剣客商売・浮沈』新潮文庫)と池波正太郎が陽岳寺を描いている。その陽岳寺は禅宗寺だが、門がすっかり閉められていたので境内に入ることができなかった。

高尾丸仙台堀へ尻をむけ (俳風柳多留より)

陽岳寺から右に曲がって永代橋をめざす。歩いている道は堀割が埋められたところで黒江町と仲町(現在は福住町)の辺りである。藤沢周平の『海鳴り』(文春文庫)の、紙問屋の丸子屋の女房おこうと、同じ小野屋の新兵衛がはじめて時をすごした居酒屋があつたところだ。また、右側の門前仲町には探検家の伊能忠孝が住んでいたし、その隣の蛤町

には間宮林蔵も住んでいたという。

仙台堀の枝川に架かる福島橋を渡る。福島橋の北詰の一角には、幕末、佐久間象山が砲術の塾を開いていた真田藩下屋敷があつたところだ。勝海舟もその塾に通っていたというが、今は高層のビルに変わっていた。

ちょうど正午に永代橋にたどり着く。北詰には派出所がある。夏は涼しいかもしれないが、冬は寒いだろうと考えてしまふ。

江戸時代の永代橋は百メートルほど上流にあつて、長さは百二十八間(約二百三メートル)もあつたという。その永代橋を討入りを果たした赤穂四十七士が、泉岳寺まで歩いて行つたらしい。

猪牙と釣舟両方でへらぼうめ (俳風柳多留より)

永代橋を中ほどまで渡る。車の交通量が多く、気持が悪くなるほど揺れる。橋の南側には、江戸時代は白魚がとれていた佃島がまじかに見える。今は、高層マンションが二ヨキニヨキと建ち並び、圧巻ともいふべき光景であつたし、橋の上から見る大川はすこく広く感じるが、江戸時代はこの大川に大小の舟がひしめいていたという。

永代橋の東南詰めからは、三宅島や八丈島への島送りの五百石積み流人船が出入りしていた情景を、藤沢周平が短編「割れた月」(文春文庫『又蔵の火』に収録)で描写していた。

本社 六月旬会

六月七日(木) 午後一時
アウイーナ大坂

六月旬会は、初参加二人を含む百三十人(投句八人)の盛況で開催された。

今月のお話は名譽主幹河内天笑さん。題は「須崎豆秋」話に入る前に「入選する句のコツは、心の中にあるものをスツと書く。無駄な言葉は使わずリズムよく」とのアドバイスになるほどと納得。

さて、豆秋さんの川柳との出会いは三十七歳、毎晩通っていたおでん屋、万よしの壁に貼ってあった短冊らしい。

らりるれろはつきりしない程に酔い
手ぶらでは鹿も相手にしてくれず
オーライで動き出したる靈柩車
ユーモアの中に優れた観察力がある。

短冊の稽古でもして死を待とう

この句が亡くなる直前の句であるが、心にゆとりがあつて素晴らしい。(まつお記)

月間賞は、牧浦完次さん(奈良県)

(司会 美籠・善純)(脇取 扶美代・真理子)
(受付 紀雄・柳昌)(清記 勝弘)

席題「捨てる」

鴨谷瑠美子選

咲き終えた花にお礼を言い捨てる (矢)五月
断捨離と勿体無いのせめぎあい 玄也
プライドを捨てたら増えてきた笑顔 善純
捨てられてうなだれている扇風機 一風
見られては困る捨てたい物がある 見清
捨てちゃうぞ一度は言ってみたい恋 由一
僕のようによい自転車を買ってある 一歩
捨てるゴミ入れる袋を買いに行く 舞夢
百均の傘捨てられて雨上がる 朱夏
今日の鬱捨てよう熱い湯に浸る 美花
まだ望み捨てた気でない紅を引き (久)千代
皆の前ほんとの自分捨てている りこ
かけ捨てのホケン長寿の守り札 直樹
出直しへ捨てねばならぬ過去がある 理恵
捨てた手で部屋は昭和の吹き溜り 恭昌
捨てたなんて言うがほんとは捨てられた 修
言ったこととはないが女は捨ててます 義
書き潰し屑籠目掛けストライク 淳司
名譽捨て財産分けてホーム入り 欣子
心は無仏の道に捨てたうつつ 哲夫
太平洋は僕の涙の捨てた所 進
年齢を半分捨てて服をかう 昭
燃え尽きた恋を渚に捨てて梅雨 柳弘
女房は多分わたしを見捨てない 見清
その時はみんな捨てると言う夫 恵子

思い切つて捨てたさつきと回れ右
子の意見に頑固を捨てて同意する 耕治
僕が死んだら捨てられるコレクション 扶美代
ふるさとを捨てても墓を捨てられず 敏治
捨てるチャンスねらつてるとは気付くまい
どうしても捨てねばならぬ妥協癖 理恵
学問も妻子も捨てずやりとげる 完次
佳 光久
あれやこれ捨ててビールの旨いこと
執着も欲も捨てたら惚けてきた 月子
捨てられたが捨ててやったと言っておく 朝子
捨てる物沢山あつて穴を掘る 一歩
妻だけは捨てはしないと自信 篤子
あかね
人の
子の為に親は捨て身を惜しまない 朝子
地
そのうちに妻に捨てられると覚悟 かずお
天
夢捨てた父の口ぐせ夢を持って 和夫
軸
大器晩成その夢さえも捨てました
兼題「例」 樹本 宏子選
例ないと役所名案却下する キヨミ
新判例残して妻は裁き終え 雅明
慣例という社会の知恵に助けられ たもつ
大阪市次から次へ条例案 紀雄

紫陽花が例年並みに咲きました
 安全神話にも例外がある
 世の不況スマートフォンは例外か
 良い例がトキが巢立つた佐渡にある
 成功例信じてサブリ飲み続け
 雑草の根強さ例に論ざれる
 例外が法の網からこぼれ出す
 例外は大物だけに許される
 例えはの話に棘が見え隠れ
 例の小母さん噂話を撒いている
 例外が好きで革新派と呼ばれ
 例によって僕の土下座で幕下りる
 例え話膨らみすぎて苦笑い
 例えばあれそれで事足る共白髪
 いつまでも美人の例は小百合ちゃん
 蝉は鳴く例え短い命でも
 出る杭は少し気になる例である
 涙背に葬儀屋例の手際良さ
 節約の先例示す両殿下
 例外が市民権得た家族葬
 夏祭り恒例ですと奉加帳
 儲かると言う本だけが良く売れる
 子の中に例外もいて賑やかし
 例題が解けても本番に弱い
 例題はマニュアルどおり解けました
 一〇〇歳も例外ならぬ長寿国
 例文のまま祝辞が詰まりだす

朱夏 保州 大子 まつお 直樹 寿子 富子 すみ子 楓楽 シマ子 昭進 大子 千枝子 正美 りこ 美代子 哲男 敏治 和夫 野薫 日の出 美籠 敏治 葉子 宣子 隆彦

例外を特別にした多数決
 佳 例外はない筈こと古稀となる (久)千代 忠昭
 財産と比例はしない幸福度
 福島の例を忘れて再稼働
 天才も例外でない物忘れ
 例外なく誰もが渡る向こう岸
 人 例外を見て東大は諦めた
 地 たとえればランチョンマットほどの幸 保州
 天 格調の高い例だと薫風句 克己
 軸 万が一例ばかり言う医者のエゴ
 兼題 「すんい」 江見 見清選
 レポーターすんいを連呼する 房子
 馬鹿力女はいつも取出せる 野薫
 陣痛に耐えて母なる朝ぼらけ 柳弘
 すんいすんい褒めて育ててごく普通 すみ子
 すんい美女射止めた息子ちと妬む (矢)五 月
 息つめて月下美人を見とどける 理恵
 お月様凄み利かせた金環食 千恵子
 高額に叫びわめいているムンク 郁夫
 人間が煙になつていく すんい 由紀子
 おさな児がスマホのページ繰っている 淳司

憎い姑の柩には錠前つける
 すごくいい縁談だったはずなのに
 神々の座登り極めた日本人
 凄いいいといつも褒め役だけの爺
 ライバルの凄いい美談が洩れてくる
 いつまでもすんい存在です母は
 原爆を二度あじわつて生きのびる
 やる気ださるすんい効き目は褒め言葉
 女房がすんいと賞める僕的事
 老々介護どつこい夜叉をねじ伏せて
 すんいすんいと夫おだててこき使う
 夢だけはすんい我が子の親孝行
 嫁さんはすんいこかつたんや手を合わす
 すんいねと褒めてる人にある余裕
 褒めことばみんなすんいで済ましとく
 飲み代を足し算するとすんい額
 飛んでいるゴキブリ素手で掴まえる
 なにがすんいって国債の赤字
 雑草はすんい無肥料無農薬
 すんい努力家運もひそかに味方する
 断捨離がホントに出来る人凄いい
 すんい目つきで美人が爪を研いでいる
 あれあれよ句読点など無い喋り
 何にでもすんいと言つてあほらしい
 佳 スカイツリーの六倍高く富士登山 黒兎

佐渡の空ときが舞うのを見ましたか
すごかつた海がそれでも好きと言う
すこい噂他人に言うのもはばかれる
女にはすこい事より花一輪

一人
お一人で才女と美女と魔女かねる

地
何度と同じ話を聞いてやる介護

天
復興へ新芽が瓦礫かき分ける

軸
あれもこれも出来るスマホに追いつけず

兼題「單純」 大内 朝子選

日の丸は單純だから美しい
單純が病も知らず生き上手
單純でごめんさいいで仲なおり
ありがとうだけで單純恨み消え
單純に進むパズルに落し穴
單純なジャンケンボンで負けている
單純細胞の鬼を煽つてみたくなる
やさしさへ丹田の意地直ぐ解ける
好きですと言つてくれたら好きになる
單純な作業重ねて出る深み
鉛ひとつ貫らうて夜が眠れない
單純を複雑にするお節介

葉子
いわゑ
美智子
すみ子
修
アキ
玄也
キヨミ
萌子
大子
りこ
滋彦
かずお
扶美代
賢子
完司
千鶴子
善純

お客様お似合いですを疑わず
單純にならうならうともがいてる
顔色が悪いと言われ休み取る
單純を着こなし映えている女
酒一杯飲ませただけでもう味方
格安というだけで旅先決める
單純と單純でよく揉めている
ありのまま自分を映す鏡です
單純はネジ一本が命取り
單純な話の底をかき回す
特売の文字が女を引き止める
素うどんで大阪の味確める
單純な人でよく泣きよく笑う
單純化してから楽に生きてます
授かつた命大事と飯を食う
簡単な言葉に愛を埋めておく
單純に割り切れぬまま長い夜
單純なミスが思わぬ大事件
電氣より命を守る方を取る
單純がビエロの靴を履かされる

佳

耕治
恵子
まつお
いわゑ
茂
信子
楓葉
武彦
すみえ
弘光
千代
哲男
能子
月子
哲夫
蕉子
能子
光久
勝弘
あきこ
一風
ばっは
月子
葉子
かずお

人
單細胞酒さえあれば天国だ
地
追伸のひと言日だまりになった
天
真心があれば見つかる着地点
軸
單純に見えて深いピカソの絵
兼題「引き金」 村上 直樹選
引き金はギリシャ経済危機だった
平和にも戦にもなる地下資源
再稼動いつ引き金を引きますか
引き金は肩が当つただけだった
偶然に出雲大社で鉢合せ
神棚に離婚届が置いてある
ストレスが無くなってから鬱になり
出藍に師匠びたりと酒を断つ
のるかそるか引き金に指かけたまま
引き金は右手に懐に辞表
赤と黒読んだ少女が恋をする
父の死が引き金でしたUターン
引き金はきつと私が蒔いた種
えげつない野次が打たせたホームラン
好きだよと引き金を引く真似をする
ひと言が引き金妻も負けてない

ばっは
あきこ
富美子
直樹選
萌子
求芽
弘光
まつお
哲男
蕉子
則彦
淳司
朱夏
朱夏
一歩
光久
篤子
すみえ
耕治
一風

やつと離婚引き金子等の応援歌
 引き金は寝言確執まだつづく
 引き金に当てていた手で握手する
 ハート射る引き金ならば赦そうか
 諍い後秘密の鍵を一つ持つ
 きっかけは不意に押された横車
 仲直りのきっかけ妻の熱の風邪
 引き金の的は謎めくあの瞳
 引き金を外そう楽になりなさい
 アホちゃうかそのひと言で始つた
 引き金になった私の虚栄心
 笑い声が引き金になることもある
 引き金を引く瞬間に出たくしやみ
 褒められてぼつとやる氣に火がついた
 ピストルの形に輪ゴム妻へ向け
 サクラだつて引き金になる客になる
 恵子
 住
 うしろから引き金引いてみたいやつ
 引き金は酒でとどめは女です
 母の死が引き金ごんた立ち直る
 二の腕に引き金秘める女の目
 くやしさが引き金になる汗の量
 人
 障害の君の誠意に触れてから
 地
 引き金を引く手と愛を探す手と

ルイ子
 理恵
 時雄
 寿子
 宣子
 すみえ
 富子
 いわゑ
 ダン吉
 かずお
 アキ
 信子
 いさお
 朝子
 希久子
 恵子
 耕治
 誠一
 正雄
 紀乃
 善純
 美花
 森子

天
 引き金を地球に向けている愚か
 軸
 やつと喜寿若手ホープという誇り
 【染める】
 小島 蘭幸速
 原発のいろに染められては困る
 髪染めた妻にひと言褒めことば
 郷土色に染めて駅弁売りに来る
 貴方の色に染まると言うたのはむかし
 真ん中に染まらぬ男ひとりいる
 髪染めて爪染めて妻日本出る
 耳朶をまつ赤に染めたのが返事
 妻はもう誰の色にも染まらない
 ハモニカが鳴る夕焼けの染まる窓
 この頃は夫を染めることにした
 シヤガールの青で染めたいふたごころ
 染め斑があつて心が遊びだす
 喪服着る爪まで黒く染めている
 染めるのを止めたら席を譲られる
 別姓にしたけどすこしづつ染まる
 食文化で染める大阪のすごさよ
 赤ちゃんの頬つべを染めている大志
 髪だけは染めないことにしています
 おしろい花に染まつた指よあの頃よ
 染め合うていい塩梅の夫婦びな
 誠一
 一
 森子
 一步
 弘光
 靖鬼
 ダン吉
 隆彦
 楓葉
 完司
 耕治
 月子
 富子
 千恵子
 美代子
 寿之
 五月
 信子
 朋月
 月子
 紀乃
 由一

続編はずこしオトコも朱を足そう
 ラッキーカラーに染める今日の爪の色
 群青に染める八十路の恋心
 再生紙らしく控え目に染まる
 梅漬ける六月の手は紫蘇の色
 頬染めてゆつくり熟れるサクランボ
 廃校を染める夕陽の懐かしさ
 あなたの色に染めあげました第二章
 夕映えに染まり街の灯に染まる
 還らぬ子の部屋いっばいを黄に染める
 染めるなら腹も背中も真っ黒に
 踊るしかない時代の風に染められて
 朱夏
 住
 染め直しのきかぬ身体になりました
 生き下手染め直しては生きてきた
 新緑に染まる私の誕生日
 朱に染める空を信じていいですか
 髪染めて闇から半歩抜け出した
 爪染めるまるで恋人いるように
 島ひとつトキ色に染め朱鷺巢立つ
 夕焼けに染まつた紙芝居の記憶
 僕のないところで妻は染めていた
 あきこ
 扶美代
 アキ
 瑠美子
 あかね
 朱夏
 進
 完司
 哲夫
 忠昭
 朱夏
 義
 文代
 美花
 千代
 和夫
 扶美代
 和夫
 牧浦完次

たしなみ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願
いたします。

編集部

川柳塔すみよし(大阪)森松まつお報

ガード下とても安くて旨い店
女房にはとても勝てぬと黙り込む
煌いて嬉し涙の金屏風
こつこつと努力煌めく日を夢に
私より若い愛人作つてる
こだわりを捨てたら太鼓いい音色
なにくそと松竹梅の梅の位置
肩書きが取れたとたんに横むかれ
煌きが落ちてきたのか弱音はく
悲しいね我が子殺して男追う
太鼓判押されたからは裏切れず
触れ太鼓輸入力士の土俵入り
悔しさがまだ取まらぬドアの音
災害に負けず輝く命の灯
わたくしの処生にはない太鼓持ち
孫の手を握り直して太鼓橋
汚染地の牛の悔しさわかるかい

直子 吉太郎 志津子 庸佑 温子 一步 和代 晴雄 芳香 たかこ 裕之 柳弘 かりん りつえ のん子 克博 桃花

負けたって私の方が金持ちだ
だんだんと煌く言葉減る会話
悔しさを隠し机にしがみつく
はいせんせい一年生はみなピカリ
悔しきの爆発だろうなあムンク
元氣よく歩き悔しき振り払う
太鼓の音五臓六腑に落ちてくる
携帯も爪もきらめくスマホの娘
ダイエツト指示する医者のお太鼓腹
食べられる内が華よと太鼓腹
悔しさがバネにもなつた若かつた
口惜しいと思う間もなく忘れてる
爽やかに朝の挨拶勝負あり
煌いた彼と仲良く今夫婦
通り抜け今年の花はとでもシャイ
悔しいが妻には勝てぬ定年後
とてもよい思いやりある菩薩さま
思いきりドラムを叩く反抗期

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

大漁だ銀鱗眩し活気づく
眩しきは金環食の一瞬だ
名ごり雪まぶしいほどに春を待つ
おでこだけ眩しい君となりけり
反省をしると眩しい陽が登る
ライバルの瑞宝章が眩しすぎ
天位の句オーラ眩しく畏まる
早乙女のかざす手元に光る苗
池に舞う花眩しくて人想う

勝弘 篤子 太一郎 朝子 五月 美世子 妙子 昌紀 日の出 朔 順子 舞夢 由一 五月 公平 美籠

二十の春永久就職母となる
年老いて採用されたお留守番
ロボットに職うばわれて不採用
採用を待つポストから春こぼれ
採用の通知今でも宝物
あの標語採用されて貼つてある
永久に採用します好きだから
天国に採用されるまで歩く
元氣かと手紙書く母達者かな
ラブレター手紙の心書き写す
辞書片手私の心書き写す
書いて消す神様どうぞ祈り書く
障害者全身筆に心の書
給料を貰うカバンは持ってゆく
ブランドのカバンは無いが銭は有る
袈裟懸けのカバンが集う婆々の街
笑顔忘れたランドセル守りたい
猫の手も借りたい時に夫の手
不採用たび重なつてフリーター
泣き笑い通勤カバンは知っている
迷い子にならぬカバンのストラップ
このカバン苦楽を共に半世紀
エリートのカバン大海ひと跨ぎ
几帳面なカバンのせいで休めない
絵手紙をはみ出しているランドセル
私のコピーが詰まる古カバン

紀美惠 美美子 美代子 美ち子 和子 龍枝 芳光 石花菜 貴人 清 恭彦 照彦 富惠 滋 くにこ ひかり 玲坊 耕治 禎元 たけ代 節子 泰山 美ツ千 三津子

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

見にきんさいたまゆらの里来てみんさい 幸子

佳句地十選 (6月号から)

中村金 祥選

春雪にあせりはしれない花時計
誰とでもつなぐ野心のない両手
愛に生き愛に死ぬたらなんて嘘
どの顔をさげて行こうか頼みごと
三十キ口の梓は知らない放射能
誘惑の春に年金追いつかぬ
ゆつくりと母のリズムでする介護
何げない仕草にドキリ恋かしら
三歩歩けば忘れてしまふ記憶力
善人になる座布団が寺にある

無典 柳弘 克衛 堅坊 英子 善純 ひろ 綾子 茶子

やがて譲る女の城を磨かねば
私の転んだとこに来たあなた
二番手を走る男の読みがある
野心抱く男と夢をみる女
結局はドミノのミスに似た野心
人間を磨いて嘘の二つ三つ
盃をもつ手も真似る新社員
肩書が名刺交換びびらせる
小さい字で中国製と書いてある
倅せをつかむ面掌をよく磨く
いいチャンス唱歌で楽しい時過ごす
野心家が親も見ないで夢ばかり
野心家の力説聴いた人も酔う
おもてなし心いっぱい磨きかけ

純哲 稠民 真由 啓子 多美子 開子 可住 かほる 幸子 ちかゑ 照代 美智子

バカになり私一人が浮いている
高速の騒音今は子守唄
ランドセル軽がる背負い新人生
肩パッド二重に街を活歩する
よしみ 放任 あきら ひかり

川柳塔みちのく(青森)小寺 花叢報

ミス毛虫まどわす蝶になる
泣いたつて帰つてこない人を恋う
腹巻に印鑑入れるしかけあり
バス停に野花いっぱい和ませる
腹いっぱい喰えるしあわせ戦中派
地平線夕陽を呑んでから眠る
何もかも津波は持つていきました
神様の前で羽化して無垢になる
三・一一涙の先にある墓標
実印を二度も紛失した妻と居る
今日も又作句とられずがっかりだ
印鑑の喜怒哀楽も飯の種
満ち足りて花は筏の旅に出る
実印も嫁に渡して安堵する
日溜まりをいっぱい溜めた祖母の背な
まだまだと還暦羽化を繰り返す
腹いっぱい呑んだ赤子を抱く菩薩
印鑑の怖さを知つた三代目
膨らまぬ風船だつてあるのです
黄昏に呑まれていつた日和下駄

小とみ 一湖 信子 つとむ きよし 美鈴 芳生 則彦 一呑 隼人 花匠 愁女 井蛙 黙人 花峯 慕情 一花 五薬庵 久子

川柳ささやま(兵庫)遠山 可住報

竹工房ようきんざつたのーと彫つてある
町並みの朝だせんべい焼くにおい
軽かつた願ひ叶うか地蔵尊
普明閣桜は七分咲きが良い
悩みなど小さなものよ朝日山
お金より汗が大切バイトの子
大切な娘に大切な人が出来
真心を大切にして丸う生き
肉親と同じ自分も大切に
大切な事をたびたび忘れてる
大切な話だ父が正座する
大切な御飯ゆつくり噛んで食べ
靴を手に砂丘を駆けたふたありで
わらの靴はいて無になる雪の中
長靴の出番は春のみぞ掃除
亡父の靴があり春の大掃除
眼鏡から靴まで苦労して合わせ
イチローの履いた靴ですハウマツチ
この種子の実る頃まで生きるべし
視野広く持とう春の風となる
菜の花の咲いて愛猫一周忌
斬新な生き方もよし習うとす
将来の夢をキラキラ目で語る
手をつなぎ桜吹雪の中歩く

半徳 比呂子 弘幸 蘭子 千代美 輝恵 敬子 笹舟 六口 房子 慶子 節夫 栄恵 規代 笑子 節子 笑子 静風 栄香 厚子 汎美 史子 千枝

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報
耕せば銭で買えない陽の恵み
もひとつの影が浮いてる水たまり
肩書きが取れて気楽な手酌酒

弘 恵 弘 恵 いさむ

柳柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

女でも男に負けぬ大ジョッキ
ご都合で過去は忘れた事にする
繁栄の過去をとどめた画鋲踏む
昭和史に勝った負けたの物語
過去は過去朕は火葬にしておくれ
火の章をくぐる余力は持つている
手顔背違うクリーム塗らせてる
太陽に向つてグイとねぎ坊主
爽やかな立ち振る舞いにある気品
さわやかな匂いをくれる胡蝶蘭
荒れた手にクリーム塗つてくれた亡夫
縁とはこれさわやかな凭れ合い
横笛が酔つた大蛇を踊らせる
オシッコがチビチビ元気なくなつた
氣遣いはソフトクリームまでとする
勢いがついてゴールを通りすぎ
無理をしてさわやかして若づくり
初恋は潮騒でした春の風
さわやかな笑顔の中に無理を見た
勢いは静かに眠る海の底
さわやかな殺し文句を知っている
さわやかな顔に出合った散歩道
沈黙の中で勢いつけて立つ
さわやかな人柄であり妻であり
自転車でアイスクリーム売りに来た
初任給紅とクリーム買いました
クリームが熱い紅茶をのんでいる

くにし子 和子 彩子 螢 石花菜 弘子 孔美子 照彦 八重 宣子 蟹郎 是るお 実満 かおる 美ッ千 すすず 小鹿 満 美代子 みさ子 諷人 惣子 露子 富久江

川柳らくだの会(鳥取)岸本 宏章報

さわやかな顔で金欠ばなしなど
謝罪する言葉は弾んではならぬ
裏切らぬ大地の春を踏む素足
荷を軽くされ窓際の椅子が待つ
長い道背負うた荷物子に託す
泥試合ボンボン皮肉口まかせ
あやういなつき合いの距離置いてみる
集会で意見ボンボン活気づく
悪友はいつも手ぶらでやつて来る
お花見の帰りの荷物ごみ袋
狸ならメタボが似合う腹鼓
横綱もまわし叩いて活入れる

茶子 せつ子 登美子 孝子 風花 一弘 仁子 清子 富貴子 大鯨 宏章

松露川柳会(鳥取) 小西 雄々報

夢に出た仏の笑顔わすれない
手をおわせ仏壇掃帚気持よい
花の水かえて仏に語りかけ
神仏を尊ぶ心あるかぎり
一番に身近で好きな仏様
黒粋の亡母の笑顔に助けられ
野仏へ無沙汰してますとじこもり
素通りはできぬ先祖の墓の前
生きのびる秘訣を仏からもらう
仏から頭撫でられ眼が覚めた

雄々報 智恵子 鈴枝 弘子 公美枝 久子 和代 豊枝 静江 正光 雄々

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

うっかりと丸太と知らず渡り切る

起世子

うっかりと竹輪の穴も食べました
ケアレミスつく春眠覚めやらす
いつだってうっかりばかりする狸
うっかりとして深入りをしてしま
うっかりとするもさせるも春臍
心地よい電車で着いた終着地
うっかりですまぬ孤独死見逃して
プロの道うっかりだけで済まされず
端坐して読みます父からの手紙
美辞麗句つらねて急所ついでくる
行間に優しさにしむ子の便り
吉報へ孫抱きしめる電話口
追伸に本音一行書きそえる
吉報が届き小躍りするポスト
啓蟄の便りわたしも芽吹き出す
花咲いた吉報聞いて荷を降ろす
天国の便りを聞きに墓参り
独りでは柩に入れない命
命という漢字何度も書いてみる
ポジティブに生きて命を光らせる
このいのちあなたとふたり半分こ
ポランテアの汗に発光する命
限りある命へ紡ぐ愛の糸
逆縁をわたしの業と悔いている
母子手帳命が重く重くなる
残る命セシウム友にして生きる
心電図命を刻む音がする
一握の砂にも燃えていたいのち

喜久子 朱夏 義雄 照枝 美羽 高夫 美花 義泰 五十雄 保州 幹子 菜摘 富子 町子 純子 正治 かずみ 登美代 八重子 倅子 和子 当碧 絹子 孝子 桂昇 香

今日も無事明日の命へ米を研ぐ
くすんでた命を燃やすライブの夜
自慢話の裏に淋しさ滲み出る
よき時代だったと自慢する昭和
ヨイショされ自慢話が止まらない

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

胸に手を当てれば顔が赤くなる
一斉に芽吹く山野の風薫る
合理主義のブレイキとしてのし袋
一人居も粹求めてボチと棲む
散骨で良いと遺言書いておく
髪染めて想定外の顔と皺

南大阪川柳会 津守 柳伸報

がらがらの句会は一度もおまへん
がらがらの戸の音だけで母見分け
自転車でシャッター通りつき抜ける
店閉いあのがらがらがウソのよう
ガラガラと笛で子守りの小半日
自転車ルールおぼちゃん目に余り
おぼちゃんがまた縁談を持つて来る
おぼちゃんのいかなご旨く炊きあがり
着飾ったおぼちゃん若く見えます
折角の歌舞伎おぼちゃん寝てばかり
おぼちゃんの部屋は氷川きよしだらけ
おぼちゃんの鮎イケメンを狙い撃ち
公園デビューおぼちゃん族に仲間入り
お人よしおぼはなんでもあげたがる

イセ 典子 ひろ子 元三 准一

蜂朗 四郎 勝視 高明 輝夫

太郎 たもつ 柳伸 直子 集一 ひさ乃 庸佑 百合子 柳右子 シマ子 恭昌 紀乃 弘風 なぎさ

おぼちゃんが前に立つたら目をつむる
おじさんよりおぼさんで持つ小商い
大阪のおぼちゃん皆に愛される
リフォームでババのワイシャツエプロンに
リフレッシュ心部の部屋の模様替え
さくらからつつべリフォームする自然
他人口畳んでおこう笑顔好き
退院に畳障子に癒される
洗たく物畳んで今日の幸せ度
なつかしいことにふれる青畳
靴脱いでやつと私になる畳
イグサまだ畳の意地を通して
ピチピチの鮎が涼しい床料理
ピチピチと鎖骨美人のポニーテール
さあ夏だピチピチギヤルの出番です
ギヤル神輿今年も主役天神さん
子どもの絵みんなどピチピチ眺めている
ピチピチの肌を痛めている化粧

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

もがいても輪廻の渦が抜け切れぬ
ごせえやと独り娘に無理を言う
少しなら呑めと医師よりゴーサイン
さすが老母百才にして紅を塗り
軽トラの夫婦はいつも仲が良い
花束を貰つてからの運不運
他人の為もがく努力を惜しまない
ゴーサイン出た改革が消えていた
突き返す流石は俺の女房だ

あや子 楓楽 ルイ子 正春 清己 克己 夕カ子 弘子 志華子 あおい 昌弘 柳紀 和雄 更紗 勝弘 忠昭 一歩 栄子

洋々 妻子 善夫 とも湖 無限 瑤 地佳平 清毅 信

新庁舎やめてごせえや無駄遣い
嘘がばれ妻が問責突きつける
ごせえやとやつと口きり嫁がくる
流石ですと言われる人を大臣に
もがくほど苦しい恋をしてみたい
告白のチャンスは今だゴーサイン
順風をマストにはらみゴーサイン
翌日ももがく程ババ飲まないで
一波瀾起きそう黙ることにする
極楽へゴーサインならありがたい
赤い糸もがけばもがくほど纏れ
神さまも流石悪には味方せぬ
国会に流石と言えぬ人が無い
ゴーサイン出たぞイチロー打ちまくれ
ゴーサイン出た早い増税政権だ
想定外人科が熊の脳に負け
俺の息子にあんたの娘ごせえや
流石だなあれ程馬鹿と知らなんだ
たつぷりと自由で老いがもがいている
夢の中もがけど手足動かない
大学へもがかなくても行ける人
もがくのが恥ではないと自得する
もがくのもあせりも身から出た錆だ
鮎釣りのゴーサインまつ釣り天狗
さすがだな選ぶ男にある決意
少子化の罪は重たい廃校日

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

仏舍利塔仏の慈悲のそこはかと

克也 凱柳 春名 振作 回春子 栄子 秋月 一京 圭一郎 美智代 隆浩 昌鼓 由美子 孝二 弘康 茂登子 清帆 はつ江 行男 大鯨 菊香 重忠 悦子 一粹

久子

大阪の広告塔はおばちゃんだ
眠たいな管制塔が項垂れる
節電に塔のおうちが揺れている
左利き右利き器用さを競う

競わなくなった男が惚けてくる
出る杭は競つて打たれ再起待つ
ライバルがいるから伸びるアスリート
高いけどどうつとりしちやうええ器
たまさかの嬉しい誘い縁でこそ
大河ドラマ浮き世の辛さ延延と

鼻歌は今も少女のままに
ややくししい女がテレビ笑い取り
女かな男なのかと後をつけ
ダイエツト栄養剤は置かぬ主義
むぎになり孫と争う七並べ

揉み消した火種にまたも立つ煙
群青の煙確め炭を焼く
湯煙の宿でくつろぐフルムーン
煙一つ立てぬ男の薄い影
残り火の煙見つめるその未練
究極の煙哀しき深くする

向き合つて玉虫色になるある日
調律をされて華麗なる台詞
胸をさす言葉連発する上司

富柳会(大阪) 古田 千華報

郁子 信男 春代 美智代 扶美代 長一 幹治 純子 契子 黒兎 桂子 柳童 順子 正子 康子

高知川柳社 小川てるみ報

てるみ 正躬 千鳥 三郎 典雄 哲史

アキ 紅紫朗 和子

小言では済まぬ年金穴が空き
ある日ふと駒子が泣いた宿の下駄
どれだけの小言を聞いた煙の土
飛翔も一番落ちるのも一番
ある日ふと父を無性に恋しがり
先取りをしたばっかりに悔いている
サクラサク親の苦勞も花開く
右で聞き小言左へ聞き流す
値上がるを買占めたが値打ちなし
母さんの小言わたしの宝です
宇宙旅行の切符買つてる夢を見た
ご無沙汰の手紙に小言添えてある
お小言を糧に大きくなった僕
さくら咲く一緒に居たい人を見る
ある日見た夢の欠片が起き上がる
仮面の裏に鬼が一匹這うている
ピリオドを打てぬある日の青い実よ
赦せない影よどこまでつき纏う
上げ下げを叱つた母はもう居ない
先取りを狙う女の語が乾く
本物になるまで笑顔くずさない
蓮の座で待つているから泣かないで
泰平のある日私の一大事
とある日赤い絆を切れと言う

七朗 晴美 よりこ 未知 佳子 登子 高鷲 壽峰 武人 千華 深雪 千恵 寿次 彦次 よしみ 伸雄 澄子 信子 華焼 惠子 奏子 欣之 森子

地下街の現実不安募らせる
世界から温い救いが東北へ
救えなかつた命を背負うあの日から
点滴と酸素が僕の救世主
一匹の男を救うワンカップ
南無陀仏薬一本を恵まれる
家無くし家族は生きていてくれた
生き辛い避難生活先ず救う
華麗なる舞台の裏で泣く素顔
最後には生活保護を受けてやる
救いたい救われたいでボランティア
桜舞うこの世に斜線引くように
歳らしい救う術無い物忘れ
毎日がてんでこ舞いの子沢山
人生の舞台を変えた日の津波
残照を首導犬に繋がる
終生の手本にしたい柴田トミ
現実の重さもつまるランドセル
現実の風はわたしを責め立てる
現実をもてあそんでる占い師
生き方のモデルにしたいみつをの詩
喋らない地蔵の慈悲に救われる
現実論君はでつかい声上げる
現実のどこを切つても修羅ばかり
溜息の視野にすらりと長い足
いつだつて救いの神はお母さん
奈落から私救つた蜘蛛の糸
妻を舞い母を舞い終え花となる
モデルは二人使用前と使用后と

川柳塔なら 坊農 柳弘報

売れ筋の車と家電エコモデル
救われて我が人生は恩返し
猫がモデルで駅長さんも脱帽で

史郎 彰治 弘

次郎 博一 萌子 さいお 将文 成子 賢子 紀雄 満作 勝弘 信子 弘風 惠美子 道子 堅坊 真理子 比呂志 柳弘 良一 郁夫 ダン吉 富子 朝子 寿之 隆盛 克己

究極を救った雑魚の知恵袋
現実味帯びて風呂敷しぼみだす
ほほえんで母は静かに舞い終える

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

門前に市なす大人の野心塾
人生はまさかまさかのくりかえし
八起き目にまさかの妻が手を貸さぬ
飛ばされた任地で活かす趣味の技
飛んでいた孫が夢見る宇宙人
煩惱がまさか余生で増えるとは
それ行くぞ風船飛ばす虎ファン
水たまり飛んだつもりが残る足
真面目な子の犯罪だからなお恐い
サイレンが帰る方向から聞え
アルバムにこの人まさか俺の妻
まあってたよ雛が飛びたつ佐渡島
披露宴別れた君がいるなんて

京都塔の会 都倉 求芽報

得意げに他人の桜案内する
左右見て青で渡つたのに惨事
熊朱鷺に人間力は知れている
原発の恥部に蓋して再稼働
安全の押し売りへー〇番できぬ
悪友のいない余生は淋しかり
友達と気を許したらふと段差
ひけらかさない達人の底がない
いつの間にか私達はと言う仲に

美智子 郁郎 理恵 薫報 三陽 泰一 勇太朗 幸一 昭好 あや乃 克衛 敬子 薫 やすの 楽鬼 求芽報 ますお 宏子 泰夫 美義 求芽 美津子 ふりこ 欣之 かずお

達筆が髣髴させるお人柄
達観をしたふり見せて自己主張
夫婦という友達がいて家がある
先達の道はやつぱり他人の事
逃げ出せぬ国にも飛ぶか雀達
念願の米寿を越えてさて何を
想定外がっかりさせるこの言葉
いつまでも口を離れぬ国訛り
意のままに使える手足欲しい老い
如才ない男上手に使われる
五ヶ国語使つて娘帰国せず
立っているわけでないのに使われる
使い回され雑巾になりました

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

陸奥の千の風寄せ虎落笛
煽てられその気になつて梯子なし
煽てられ帰つて気付く無駄づかい
皮肉にも友も彼女が好きと言う
皮肉言う人は皮肉な死に方で
受け答え出来ず野党に皮肉られ
頭掻くブロックサイン癖だった
腹黒は煽てに乗せて舌を出す
ちくちくとうずいた傷の深さ知る
卯酒飲めるぐらしいの風邪をひき
はらはらもどきも無くただ同居
出不精が更新してるパスポート
ごめんなさい言えたら溶けた胸のトゲ
荒波と風雨に耐えるわび住まい

英旺 則彦 昭美 輝美 牛延 鹿太 文代 比る志 綾子 庸佑 弘子 葉子 淳司 辰男 福子 もこ 武男 幸子 弘光 マサ よしお 正博 克三 和代 たけし

子の仕草パパ似ママ似でもめている
悔いひとつ胸に宿つた古い傷
母さんの皮肉父さん春の風
煽てられやるだけやつた達磨の目
あでやかに咲き散る桜媚び売らず
夏野菜植えて汗ばむ頬に風
分裂の風を吹かぬ見上げた消費税
皮肉では効かぬ見上げた無神経
煽ても柳に風の美人ママ
世が世なら殿と呼ばれた御曹司
竜巻が人生全部巻き揚げる
潔く脱いで媚びない冬木立
風圧に耐えて泥鰌の粘り腰

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

何事も無言で通す恐ろしさ
採れ過ぎて困つてしまふ茄子きゅうり
世のためは自分のためのポランテイヤ
痛いとは言えぬ外出禁止令
お互いに握り検温我が日課
好物の鮎酒遣影うれしそう
背広着る夫観るのも久し振り

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚 恵子報

白もくれん空にひびかぬように伸び
雨あがり桜の花もしつとりと
桜並木はすぐ葉桜になりたがる
残像の大きき今も目に浮かぶ
立ち読みをしながらかきいやしるる
篤 光弘 正子 けい子 孝代 隆彦 三和子 靖博 和子 正美 久美子 直樹 雅美 遡行 幸子 百合江 美千代 かつ子 恵子報 ふみ 晴子 千枝 田鶴

巢立つ娘に男雛女雛も祝う夜
悠々と雲に序列のない流れ
オーロラは天女の脱いだ舞衣
嵐にも温い風にもなる私
朝方の雲に万才して起きる
大地震地球はいつか病んでた
気まぐれな風の誘いもまた愉し
お互いの痛いところを避ける風
天国の予約の席を取っておく
老犬と長いきくらべ春の風
そんな徳はぬき荷の軽い方もらう

川柳塔わかやま吟社 川上

大輪報

感動の秘話に笑いが添えてある
万病の特効薬という笑い
一言に微笑み添えて介護の手
ほっこりとしめつけ感を解く笑い
風向きを変えてスポット浴びている
風向きで私の汚点裏返る
隙間風こぬ様いつも目張りする
無味無臭風とおんなじ色になる
何時の日も幸せ彩の風を待つ
隙間風わたしの背中押していく
ジーパンの穴青春の風吹き抜ける
風向きを上手にかわす処世術
難関を滑りくぐってサクサク
戦火くぐった身で弱音吐きません
ひと筋の光求めてくぐる波
人の輪をくぐり自分を知る歳に

鶴子 瑞枝 寿々子 恵子 春蘭 未延子 喜周 ゆき 亜弥 寿子 倅子 克子 小雪 紀子 秀子 夕胡 富美子 和香 徑子 美子 准一 紀久子 めぐみ 佐一

新緑をくぐれば満ちてくる精気
非常口あなたを信じついで行く
非情口に入入り禁止と書いてある
壁破るそが私の非常口
喫煙の顔ぶれ揃う非常口
蓮根の穴はどこでも非常口

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見

柳歩報

波の彼方深い縁かボール着く
神仏のご縁大事にして生きる
神仏が探してくれた縁に生き
縁ないわたしとあなたグッドバイ
バス停で拾った縁が続いてる
アメ玉の甘さぐらゐの縁だった
セレブとは無縁ちましま暮らしてる
縁の糸勝手結び切り刻む
甥っ子に出しやばりお米縁運ぶ
最強の凶器は君の美しき
うぬぼれをたまに言いたいロゼワイン
うぬぼれにまだ気がかぬか葉桜よ
不器用が自慢話を聞いている
うぬぼれが一心不乱に吹くラッパ
国のため命をかけた戦闘機
うぬぼれる元気があればまだ生きる
うぬぼれも生き暮らすかくし味
ぶつたりと口を閉ざした貝の意地
ぶつたりと切れぬ絆に血が通う
ぶつたりと切れると見える人の裏

泰女 よしこ 保州 輝子 英子 大輪 幸代 叮紅 注湖 茂美 寿代 博子 ともこ 芳恵 柳歩 知恵子 芳山 禮子 桂子 民子 ちえこ 久絵 千里 淞丘 長吉 草庵

只今つてはずんだ声は緑ぐみ
あなたの胸に転がり込んでから緑
廃屋を縁が囲み朽ちてゆく
グリーンシヤワー運転席で眠くなる
新緑とカエルの唄で散歩する
さあ歩こう緑の風とつれづれに
若草が土手の王者と君臨し
新緑に酔ったと言って手にビール
オーイみどりプロコリーが主張する

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

幸子 玲子 昌枝 美智子 青帆 文香 左余 孝流 由紀子 萩江 龍枝 賀寿恵 日出子 悠子 石花菜 恭子 祐子 智恵子 完司 次男 けいこ 和子 玲坊 茶子 節子 貞子

わくわくと覗く隣の新所帯

密造のどぶろくだから味が良い

田舎より密かな暮らしする都会

孵化したか密かにのぞく雲雀の巣

ここだけの内緒が知らぬ間に飛び火

策を練る密かに夢のマイホーム

孵化できぬ卵密かに抱えている

柄杓からするりと桶へ落ちた月

はびきの市民川柳会(大阪)徳山みつこ報

タマちゃんの駅長今日も昼寝する

ふるさとを愛しい人と始発駅

宴果て終電の駅ホッとする

駅伝で喝采あびるごぼう抜き

駅馬車の古き映画のワンシーン

若者があすへ踏み出す始発駅

氷見という夫の故郷駅の名は

聴き洩らし待つ鶯のそれつきり

一度抜いた指輪は二度とはまらない

すっぱ抜きのボールが打者を襲撃し

家事手抜きした分わたくしの時間

父母を抜いて傘寿になりました

パパぬきはいやよ私もいれてんか

抜打ちの姑に慌てたインターホン

ライバルを抜くにはまだ足りぬ汗

抜きながら草の生命力思う

遺影から今日も背中を父が押す

気に入りの葬儀の写真若すぎる

すっぱびんを振られ自慢の健康美

美代子

鬼一

風露

重忠

康子

喜美子

美ツ千

照彦

久仁子

アヤ子

淳介

章司

フジ

いさお

かつ美

美喜

瑠美子

雄太

登志子

敏

千鶴子

ちづる

泰子

庸佑

高鷲

喜久子

猿杏

カーテンを開けてお庭とランデブー

カーテンをピンクに替えて春を呼び

カーテンも窓も閉まっているまさか

カーテンを開けよう運がやってくる

西宮北口川柳会(兵庫)藤岡りこ報

借金の額なら日本金メダル

朝イチに散髪済んで五月晴

ゼロ歳の笑顔を抱けば歯がひとつ

生涯をかけて男の愚を磨く

0金利タンス預金が多すぎる

黙祷からいつものはじまるクラス会

あふれ出る涙天使のプレゼント

カタカナ語あふれて日本語が怯え

機嫌良く遊んで今日もいい眠り

孫ひ孫笑顔あふれる母の日よ

両の手にあふれる程の亡母の恩

ほろほるとやさしくなれる葛の菓子

こだわりを消して葉桜美しい

記憶力だんだんゼロに近くなる

物あふれもつたいないの心失せ

あふれる星が自慢の過疎の里

わが子とは遊んでやれず今孫と

あふれでる亀の甲より年の功

春の光あふれて笑顔伝染する

日溜りで遊ぶと初夏の匂いする

喜びが溢れたような呱呱の声

およばずながら日本さきえた一人です

あふれても注ぎ続ける母の愛

ヨシ枝

りつえ

光男

みつこ

りこ報

宏造

武臣

武彦

無限

素雲鶴

千賀子

折杭

弘子

てる

千代

美津子

わこ

光子

浩司

毅

盛夫

伯備

玲子

朋月

比る志

勝弘

直

女子会のワイングラスはよく喋る

善人とはかり遊ぶと疎くなる

居酒屋で右脳左脳を遊ばせる

サクラ咲く希望あふれた顔でくる

色のない世界に遊ぶ反抗期

親の愛無償で受けて生きている

円熟期などと坊さん言うけれど

事件事故ゼロの日見たい社会面

リハビリをみどりの風に促され

日々感謝ゼロではないと自負がある

貢献度ゼロではないと自負がある

劣ると姑は空気が抜けて来る

米子住吉川柳会(鳥取)渡辺多美子報

千羽目の鶴が羽ばたくかも知れん

ゴウヤ壁エコで家計の足しにする

食えもせぬ金魚まるまる肥えてきた

桜の下笑顔作ってはいチーズ

日々変わる世の情勢に胸いたむ

何事も五七五がくせになり

チューリップ歌っているね揺れている

ひよっこりと遊んでやると友が来る

やつぱり春だ声のトーンが高くなる

宿敵が弱く張り合い無い野球

あかつき川柳会(大阪)山本柳昌報

夕方のがーい影が疲れてる

衣食住足りて節ぶし疲れ気味

疲労困憊もう雑巾になりました

正和

ひとみ

順子

敏夫

りこ

淑子

キヨミ

秋果

美籠

嘉代子

哲男

お疲れ様六甲おろし鳴りもせず
ふかぶかと安楽椅子に沈み込む
今一度恋の病に疲れたい

ポランテア終えて心地のよい疲れ
られると言えない皆疲れてる

繁華街悪い空気にある魅力

嘘少し混ぜて和ます輪の空気

同じ空気吸うのも嫌と離婚劇

車座になれば空気が和み出す

船配りおぼちゃん空気掻き混ぜる

家族でもお久しぶりという時が

またおいで今日はここ迄可愛い孫

ばらばらに居ても家族を持つ安堵

老犬が家族の絆太くする

一瞬に家族引き裂く暴走車

偉いのも悪人もいぬ凡家族

居て欲しいとき居てくれるのが家族

古希祝家族の憎いサプライズ

鳥になり飛んで行きたい拉致家族

無農薬トキの家族の幸願う

青い鳥探しにノラは行ったきり

閑古鳥鳴くのが分かる無愛想

住所言い迷子のインコ無事帰宅

これだけはごめんと鴉核のゴミ

犬猫も鳥蛇亀も診る獣医

偉いなあ住所覚えていたインコ

電池切れ知らぬ子どもを追いかける

母の日に母の母にもカーネーション

原発の廃止に向けて時は今

忘れまじ日の丸君が代特攻隊
寝てる子を起こすな大飯原発炉
竜巻がさらって欲しい消費税

川柳大阪

森松まつお報

職員に完璧強いる市長いる

小さい石ひとつひとつにある光

はしかさが発揮出来ない無重力

ポツリポツリ昔を語る石畳

石積んで積んで己を確かめる

人生に完璧はない経を読む

石段を昇ると見えぬものが見え

荒波にもまれ耐えての丸い石

九十九里歩んだ人生いま半ば

悪の道へ脱法ハーブという麻薬

石頭少し削って軽くなる

仕事して仕事やめたらまた肥えた

はしたなさ定年迎え御浪人

神様にまだまだ妥協せぬ命

完璧に父さん母にやられてる

子供たちの犠牲を嘆く石地藏

先達に歯がたちませんくやしいが

夢いっぱい咲かせまだまだ往くつもり

完璧な妻の洗脳受けている

まだまだとじらす女のしたたかさ

再稼働まだまだダメと民の声

完璧の穴を女房が覗いている

完璧を飾りに人生味が出る

原石を磨きすぎたらなくなった

和幸 武二

城北川柳会(大阪) 近藤

美世子

美花

芳香

柳昌

柳弘

紀雄

一歩

かよこ

珠生

信司

照月

善功

五月

美籠

和

万紗子

まつお

朝子

彦太

鉄心

喜楽

すがお

すんまへん分つてる僕石頭
角とれた石に生き方教えられ
はしかさが傷だいつでもひとりいる
根気よく石の上にもガンバルよ

城北川柳会(大阪)

近藤

のし袋お金気になりまた開ける

ボスよりも子猿めがけて投げける餌

断捨離で余生の義理を切り捨てる

緊張が解けると舌が止まらない

回らないお寿司美味いけど高い

歳を喰い胃袋小さく折りたたむ

後日談三原色で塗りつぶす

そこんこうやむやのまま好きになる

胃袋にもやはり冷や汗見合い席

十度目もやはり冷や汗見合い席

しわしわになつても老舗の紙袋

言訳はうやむやにして抱き寄せる

劇場の空気が静止するタクト

詰め放題袋の破れ欲が落ち

胃袋は空でも軍歌歌つてた

空気ただ餌代いらぬ鯉職

うやむやな態度嫌いなアリの列

東電に餌付けされた保安院

美しい疑似餌が泳ぐネオン街

緊張がトイレの度合い多くする

軒下を借り受けますと燕来る

うとうとと餌を待つてる蟻地獄

緊張がとけてワルツの息が合う

勝弘 川童

正報

隆男

千恵子

昭

満作

いさお

縣

仁

修

宏

克己

求芽

弘風

郁夫

素雲

素雲

正子

あさ子

たもつ

榮子

集一

勝弘

美智子

堅坊

寿子

100本のバラでこころを奪われる
年輪を重ねてまるい人間味
緊張を笑い上戸にするお酒
初夏の風鮮度求める一人旅

賢子 朝子 麗子

不器用な亡父の鉄拳よく効いた
おまけのように父の日が控え
盗み酒いつか五臓に刺をさす
叱る親自分の過去は語らない

武彦 菜々子 哲夫

灰汁のある男が乙な味を出す
百歳の一言ずつに味がある
喜寿祝孫らの凄いい食べつぶり
女形ゆび一本に芸の味

富子 楓子 紀子

プライドを修理に出して昼寝する
サシセソの姑の味と嫁の味
優しさを袋に詰めて持ち歩く
餌ですかディナーですか聞く夫

義明 洋志 志華子

男だろうこそこそするな胸をはれ
政界に維新竜巻起るかも
懐でそつと火を消す術も知り
主の居ぬ風鈴だけが家を守る

徹 行兵衛 雅司

バスツアー一粒の飴癒す友
百八段登つて望む和歌の浦
東照宮蜂も毛虫もお出迎え
公園でヨチヨチ歩きみてたのし

善之 桃花 恭昌

真心を入れた袋が裂いていた
竜神の怒りが竜巻天地裂く
うやむやも玉虫色も人の知恵

一歩 杵香 倫子

もうあかん又また好きになりました
深く反省していますこの尻尾
こつそりが今宵は月にとがめられ
時々はからだの声を聞いてみる

ひとみ 雄太郎 美和子

心機一転誓つて赤いちゃんちゃんこ
緋袴もまぶし東照宮は初夏
五月晴花百彩の和歌の浦

捷也 公平 げんせい

川柳さんだ(兵庫) 堀

正和報

さり気なくカーネーションが添えてある
祝辞読む代理の労に拍手する
活断層の上でのんびり誕生日
白寿まで元気でいれば祝つてね

正和 章子 晃

マスクミが煽つた風で議員様
千の風になるには汚れ過ぎている
風に乗るチャンスいつでも見失う
美術館めぐり砂丘のロケーション

幸安 完司 一瑤

一目惚れ同居している婆と猫
もうあかん妻が家裁の場所を聞く
日陰でもこつそり咲いた月見草
雷を落としカラリと晴れた姑

哲男 好文 祐康

お祝いは出してばかりの一人者
祝言を挙げて女房の尻の下
懐の深さに味のある課長
角とれて丸い味する兄卒寿

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

羽根よりも木綿ぶとんに慣れた肌
お客さん待ちこがれてる客布団
あと五分布団が俺を離さない
ふとんには苦菜の染みが住みついて

蟹良 忠良 重忠

好きやねんウドンたこ焼き小麦党
嫁宛にこつそり積んだおしめ代
こつそりと鳴りを潜めるセシウムよ
政治家がこつそり決めて再稼動

淑子 キヨミ 一子

お弁当まごころという隠し味
お弁当まごころという隠し味
お弁当まごころという隠し味
お弁当まごころという隠し味

真澄 日の出 舞夢

ふとんには涙も愛も夢もある
姑が来る万年床を片付ける
羽根ぶとん重く感じる夜がある
おふとんに日本列島横たえる

たぬ 重忠 昭弘

身から出る灰汁も魅力になる器
警戒区今朝も鳴いてる不如帰
煩惱を抜くと附抜けになりそうで
叱られるたびに賢くなる若葉

裕美 正行 美行

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

照子 蕉子 希久子

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

幸安 完司 一瑤

うつぶんをボクに振るなと吠える犬

光久 朋月 美行

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

滋彦 みつ子 義

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

圭一郎 幸子 雅女

おふとんに日本列島横たえる

光久 朋月 美行

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

滋彦 みつ子 義

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

圭一郎 幸子 雅女

おふとんに日本列島横たえる

光久 朋月 美行

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

滋彦 みつ子 義

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

圭一郎 幸子 雅女

おふとんに日本列島横たえる

光久 朋月 美行

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

滋彦 みつ子 義

おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる
おふとんに日本列島横たえる

圭一郎 幸子 雅女

驚峰山俺も買う気が湧いて来た
 買う気など無いのに乗った口車
 良心を買うのはころかネでない
 夏近い風鈴一つ買いました
 買ってくれ座り込んでる三才児
 デパートで駅弁を買ひ旅の味
 焼きたてのパンに誘われ手を伸ばす
 ふつくらの布団もぐれば陽の匂い

八尾市民川柳会(大阪)土谷 耀一報

友達の悩みを吸って気が晴れる
 居酒屋の地べたは愚痴を飲んで
 母の面倒順に看ている血の絆
 群青の空を誇示する五月晴
 添削の繰返しです人生は
 団欒を摘み夜な夜な光る酒
 母の日のリボン豪華になり疎遠
 女神像からルミノール反応が出る
 一瞬に地を吸い上げて天を衝く
 ナツメロでタイムスリップしています
 地平線その先までも俺の土地
 春の夢ぼくが主役のコントみる
 忘れたい記念日ひとつ忘れない
 記念日を積んで家族の塔が建つ
 万物の命育てていく大地
 誕生日忘れられたか一人酒
 どんな花咲かせてくれる今日の糧
 あの日から絆に車間距離がある
 人生の袋小路にいた仏

はるお 節子 茶子 一京 公子 清帆 和美子 雄太 寿風 一峰 紀雄 欣之 加央里 草風 野薫 高鷲 五柳 賀世子 寿華 清霧 賢子 森子 朝子

神に祈り地面に祈り鎌を打つ

わかあゆ川柳会(島根)松本はるみ報

生かされて八十四才の朝がある
 若き日に何かがあった爪のあと
 爪あとを残して消えた夏の雲
 しあわせは小さじ一杯の塩加減
 無造作に積まれ本の過去に会う
 労りのひと言ほしい星の下
 目ざすもの山ほどあった頃の靴
 古郷の茶壺うかぶお茶の味
 終着はカーナビだけに委しとき

岬川柳会(大阪) 八十田洞庵報

同窓会互に弾んでいる余生
 若草にシート広げて食進む
 春の嵐日本列島震わせる
 あんな事こんな事経て年老いぬ
 大風に安否気づかう友の声
 誕生日ゲストになった恥かしさ
 萌える春花に誘われ車椅子
 息抜きがしたくて花を活け替える
 深く散る花びらに花を見た
 満開に人々人の桜道
 園児から児童に変わる顔をして
 海遊館ツタンカーメン黄金の棺
 歌声に句にも余韻のピブラート
 近づけば他人のエゴにけつまつく

耀一 英子 はるみ 好栄 恵美子 澄子 ちよえ かつ子 博利 清泉 貞夫 桜琴 富美子 圭香 和香 富美子 令子 洋子 清一 茂平 覚庵 和美 洞庵

川柳クラブわたの花(大阪)西川義明報

フクシマの無人の里に咲く桜
 雪囲い取れて牡丹に春の彩
 昭和史を頭巾もんで走り抜け
 絵馬祈願神もあきれる高望み
 ひだ付ける寝押しの日課夢無限
 祝鯛節目節目にお目通り
 春を呼ぶ春を感じる筍ご飯
 もう五月昨日ついた牡丹鍋
 涙を送り夢を迎える事務机
 待ちわびた古里恋し梅便り
 お日様に董いつきに咲き笑う
 昇給も雀の涙ふところ手
 燃えるものあるから余生まだ翔る
 原発は大災害の見本市
 平凡な暮しの中にある平和
 車椅子競技も出来て又楽し
 朱鷺生まれ日本中が親心
 花散るや後はウツフンさくらんぼ
 思ったより米寿の坂はきつくなる
 一代で先祖の家を食い潰す
 保母になり念願かない孫眩し
 虹のある下は幸せきつとある

ロース川柳会(兵庫)木村貴代子報

良くも悪くもわが青春の昭和なり
 忘れる間なく天災も人災も
 日の丸に命をかけたのは昭和

美代子 いつふみ 民宏 晴美 俊明 義明 はじむ 浩三 愛子 博子 和子 耀一 正春 孝子 奈良司 かなえ 榮美子 ますみ 宏至 知佐子 一風 年代 貴代子 いわゑ

裏町の路地に昭和のあたたかさ
ガツンとくること多々あり昭和去る
ひとり住み気楽の裏にある不安
たまさかに籬を外すも生きる糧
あきらめて気楽してまず仏様

川柳あまがさき(兵庫)加川

靖鬼報

苦労話違つた色で花になり
孫のため気長に並ぶ発売日
何食べてもおいしいわが身持て余す
竜巻に機嫌の座り悪くなる
苦い顔機嫌直しに酒を注ぐ
高ければおもしろかつたと言う夫
父好み三歩下がって歩く母
飛び乗るなおいしい話裏がある
旅果てのいこい貴方の胸の駅
旬のものを食べ季節が巡りくる
そして今同じ好みに夫婦老い
春まではポッチャリ型がタイプです
日没をロマンチックに待つカメラ
雨の音気長に豆を煮て過ぐす
ご機嫌はいいのか猫にたずねてる
クールビズ緑の風を入れて初夏
バイバイで今年も終る五連休
孫機嫌もろた子遣い諭吉さん
母の日に父にも少しプレゼント
お茶漬でほつとしましたフルムーン
おいしいねエ笑顔弾ける平和です
鯉職見てご機嫌の乳母車

哲子 義子 みつ子 藍 靖鬼報 あかり 佐紀子 健二 よしひさ 幸香 泰子 茂幸 柳明 里江 初音 正和 菜々子 和子 靖鬼 野薫 耕治 シマ子 りこ ひとみ ヨシエ 比ろ志

結び目を気長にほどく年の功
老いふたり一日暮れて茶が美味い
短気と気長寄り添い喜寿傘寿
居眠りは熟睡出来る不眠症
一泊でおいしい空気吸う帰省
好みではないがあの人お金持
美味しいねその一言を待つお皿
愛情も一品添えて晩ごはん

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井

則彦報

酒蔵の試飲コップは小さすぎ
しがらみを取ってほしいと三代目
わずかずつ返す約束反故にされ
孫のみみ打ちカーネーションを買わされる
存在は取るに足らぬが教のうち
赤門を必ず通り抜けるから
あとわずか揉めてはおれぬ老夫婦
コンマの差五輪へ涙呑む切符
万歩計万歩達成月一度
大空にリベンジ誓うタッチの差
ありかとうのわずか五文字に血が通う
スツキリと財布の軽さ身の軽さ
ケータイを持たない人待っている
母の皺にも父の皺にも味がある
かさぶたが取れて明日が見えてくる
就活へ資格を取るも職はなし
一合に脳のバランス取れてくる
退職の連絡メール来たつきり
よく忘れメモ取る癖が付きました

龍 保子 美義 哲男 美籠 五月 勝巳 祐康 行兵衛 郁子 庸佑 健二 せらり 幹治 歌留多 美津子 幸雀 志華子 千恵子 比ろ志 武臣 堅坊 満子 (岩)玲子

約束の巣作りをする軒が無い
きつかけをもらい自信をとり戻す
約束があつてあしたへ出す元氣
ここからは私の時間化粧取る
わずかずつ金環壊れてゆく虚脱
取りたてて言う事無いと縁の下
しずくローズ気品と誇り匂い立つ
連ドラを毎日見てる平和な日
これからは重い約束出来ません
年輪の丸みが人を引き寄せる
約束がしこりになつて胃にたまる
目を見ては心汲み取る年の功
連れだつて歩いて古稀の坂越える
試着室鏡わずかに嘘をつく

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

逆らえば風が被つた鬼の面
懐かしい風に出会つた里の道
孫達が走つてまわす風車
念力で風を掴めば何も無い
寄せては離し風は手品師空の雲
まっすぐな風に打たれた日の勇氣
夏告げる納涼床に古都の風
逝かれたと初恋の君風だより
鈍感な夫へ私のつむじ風
校庭の汚れた土の行きどころ
庭石は邪魔と三代目が捨てる
人間のエゴで剪定した庭木
日当りを探して茄子の指定席

千枝子 久清 見子 巴芽 求子 蕉子 葉子 靖鬼 舞籠 美智代 則彦 美千代 悦子 雅枝 龍一 婦美枝 あかり 壽峰 喜代子 みつこ 一歩 シルク 六点 ちづる

金の成る木の種庭に植えてみる
 中庭に鯉と亀とが泳ぐ池
 河内弁金剛山を庭にして
 なんでやねん猫のトイレか家の庭
 しようぶ園憎しみなどは知らぬ庭
 清水の舞台飛ぶ気のこのダイヤ
 口パクもみんなと一緒音楽会
 舞台裏知らない方がよかつたに
 大空が舞台ツバメの華麗ショー
 ベテランも出番の前に人を舐め
 セリフ忘れた子へ教えあう学芸会
 舞台降りやつと心の帯を解く
 ラストステージ私の彩で幕を引く
 本土復帰舞台は未だ整わず

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

モーツァルト聴かず野菜が踊り出す
 負担一割うれしくもあり寂しさも
 露天風呂月が隠れた時上がる
 耳鳴りも生きるリズムに入れておく
 庭の桃旧の暦が好きと言う
 老人の臍をお国がかじるとは
 立ち読みでチビチビレシビ持ち帰る
 年金案ただ只軸が不安です
 ご意見は耳ざわりでも聞いておく
 年金が足りているかと娘の電話
 秘めた人逢うこともなく星になる
 放射能こわくて飛べぬシャボン玉

陽子報

勝之 信子 敦子 嘉子 安子 久江 陽子 寒之 純宏 温子 章子 美恵子

雄太 アヤ子 美代子 光男 瑠美子 ヨシ枝 みよ子 清之 扶美代 登志子 シマ子 いさお 美籠 紀雄

愛ですか今日もお肉のない食事
 暖房器買ってふところ寒くなる
 人生に前向きな人道開く
 しがらみをキツパリ捨てて春へ向く
 鼻歌をひらけば風のラブソデー
 真ん中の座るとつむじ風にあう
 耳たぶが溶け落ちそうな恥をかく
 朝の風弱音を掃いてくれました
 岩になるまで鬼にお酒を注いでやる公

六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 毅報

お弁当まごころという隠し味
 煩惱がまだまだゼロしてくれぬ
 たらればの話の中にあつた夢
 骨惜しみするのと亡父の声がする
 聞かされた愚痴からそつと小骨抜く
 骨休めするほど仕事してない
 撮るたびに美女と言われるレントゲン
 勿体ない骨の髄まで昭和の子
 老骨の軋み潤す赤ワイン
 無駄骨を折って掴んだ今の幸
 被災地に骨身惜しまぬボランティア
 捻挫して医者に行くのに骨が折れ
 帰省した子の携帯は休まない
 アラフォーも取つてみたいな産休を
 連休を避けてゆつたり老いの旅
 お休みの合図は夫の大欠伸
 休みなく働く昭和遠くなり

毅報

久司 勢津子 君代 華蓮 菜美 和代 一眸 遊子 弘

みつ子 いわゑ 美穂 登美子 千賀子 文子 妙子 ひろ美恵子 弘子 繁義 茂淳 忠貞 敏夫 康子

山登り歩き始めてすぐ茶店
 根詰めず適度に休み長続き
 休みなく田に水注ぐ水車小屋
 危ないと言いつ過ぎるママ叱るパパ
 社長とてすげ替えられる首あまた
 この気性危機になるほど奮い立つ
 交差点信号無視の千鳥足
 五月病ちんぷいぶいぶ飛んで行け
 半額シール待つて店内一回り
 取りあえず寝転んでみる青畳
 時は過ぎ年始の計もはや立夏
 子の無口少し世間がわかりかけ
 どこだつてそこは地球のど真中
 道逸れて人の温みを知る旅路
 待つてたよ九連休があけるのを
 同窓会行くか休むか歳が決め
 物忘れしよつちゅう脳が休んでる
 東西南北どちらにも足向けられぬ

大山滝句座(鳥取) 新家 完子報

歳月をまだ閉じ込めているミイラ
 天辺でうすい空気を吸っている
 潮が引くように預金の残が減る
 ひっそりと咲いた野草に意地をみる
 天も地も私を軸として回る
 天下取るためだも少し酒をくれ
 歳だからなどと引退せぬつもり
 いい歳をしてと言われることがすき

完子報

照彦 宏章 孝子 芳山 大鯨 圭一郎 紀の治

政一 浩司 洋一 利子 ひとみ 順子 寿朗 武臣 博史 義博 照彦 武彦 盛夫 和郎 京子 恵子 能子 楓楽

脳味噌が腐らぬように掻き混ぜる
野心なし柴田トヨさんになりたし
雑草にも名前があつて背伸びする
小便小僧の勢いがありません
名前負けしたか低空飛行の子
天命に年功序列などはない
子の名前忘れた母にかしわ餅
美しく老いてゆくにも金が要る
春の野はおいしい物がはえている
ボタンキニュー電気スタンドだけ徹夜
私を睨む天井の節穴
ついてくるくる蟹股の影法師
充分に幸せなのにまだ祈る
眠いのにいざ寝てみると目が冴える
歳重ねもあるくなる背母に似て
たむれる蝶々野原の宴かな
私の名前由来を親に訊いてみる
凶鑑から花の名前が消えていく
片付かぬ頭の中の不要品

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

粋がつてますます野暮に見えてきた
わたくしをちよつと小粋にする小物
丸鬚がネオンに消えた北新地
窓際が粋な遊びを知っている
大岡裁き粋なはからいだから好き
持つものを持たんと粋になれません
体調の良い日は粋な服着てる

石花菜 登貴枝 美ツ千 博子 厚子 幸子 典子 久絵 由紀子 けいこ 風露 重忠 鈴野 久子 希菜良 恒子 すみゑ 仁美 完司

最後まで粋にやりたい家族葬
さり気なくレジをすませて上司消え
どっちみち死ぬなら酒に酔つたまま
どっちみち勝てぬ勝負だ止めておく
どっちみち抜けた髪の毛生えてこぬ
どっちみち見透かされてる下心
泣かんとさどうせあの世ですぐ会える
結局は飲む口実にする話
寶石店用がないので覗かない
どっちみち明日も汚れる鉄洗う
静ちゃんと猫に期待の負けつぶり
升席に粋筋らしい華が見え
市斤内拡大鏡でゴミ掃除
どっちみちわかる言い訳まだつづく
もりもりと菜つ葉食うてる子は強い
どっちみち明日までもたぬ痴話喧嘩
細かいところ見えるルーペだ大きい
視力低下へ眼力というルーペ
ちりめんじゃこの目玉観察するルーペ
晩年は辛い手相と言うルーペ
どっちみち言い負けるから拗ねておく
森中を慰めている小鳥たち
重要事項はルーペで読めと契約書
黒緑の祖母のルーペが宝物
森がまた無くなつてると鯉のぼり
盛り上がる内緒話の更衣室
盲目になれた一途の恋でした
浮世絵に日本の粋のころを見る

雅明 五月 時雄 玄也 八千代 としお 朋月 像山 千代 和幸 半銭 山彦 のん子 敏治 冬虹 ばつは 光 淑子 愿 誠一 日の出 和夫 りつえ 好空 澄空 つづや 天笑

グルメにも骨が苦手な泥鰌鍋
再会は一期一会につくおまけ
拉致の娘に逢いたい命あるうちに
春と秋妻へ慰労のグルメ旅
大正の祖母から見れば日々グルメ
険悪なムード漂う遺言書
高層階で遭遇した震度7
花の香の漂う道へ万歩計
欲望の闇に漂う尖閣島
まず無理と言わずに汗を出しなさい
虐待の母に激しい非難の矢
病人のグルメベッドで飲む重湯
古稀迎え激しい気性丸くなる
伊勢に行き輸入伊勢海老堪能す
同窓会マドンナ今はおばあちゃん
再会が別れと思ひ切なくて
四割の自給でグルメ言う愚か
お帰りと燕迎えている仮設
激しさを秘めた彬の反戦歌
いつからか無理と一言孫が言う
激動の昭和に残る黒い雨
酔い覚めの水究極のグルメかも
ミシランも舌を巻くだろ妻の味
あちこちに漂流終り妻の元
ノラクロと再会出来た古本屋
かげろうの向こうやさしい母がいる

幸子報 蛙城 昭 益祥 香代 玄也 清 幸子 仁緑 ダン吉 隆昭 武志 珠子 龍子 忠太 檜代 英夫 ひろ子 房枝 正春 まつお みつ江 康信 義泰 芳香

岸和田川柳会(大阪) 佐藤

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日)14時締切 信号・研ぐ・スリル・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	15日(日)14時締切 山・ことば・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	15日(日)14時締切 許可・不思議・ぞろぞろ	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	16日(月)13時40分締切 揺れる・電気・古い・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曾根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南大阪 川柳会	16日(月)13時開場 オフレコ・活気・渋い・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳 さんだ	17日(火)13時開場 虫・レシート・脱ぐ こそこそ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田 川柳会	21日(土)13時30分締切 赤・背負う・眩しい・カップル	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
はびきの 市川柳会	22日(日)14時締切 冷蔵庫・財布・ベテラン・散歩	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	22日(日)13時開場 罰金・ギラギラ・暴く	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原深雪
松露 川柳会	23日(月)20時締切 紙・ビール・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金)9時開場 笹・鈴虫・帽子・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔 すみよし	28日(土)14時15分締切 旅・寝る・くどい	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸柳会	28日(土)12時30分開場 浮く・芝居・順番	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸柳会」
京都 塔の会	30日(月)14時締切 文・かざす・張る	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

7月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	1日(日)12時締切 25周年記念句会 膝・檸檬・丸	弘前プリンスホテル 弘前市駅前1-3-4
川柳塔 なら	5日(木)13時開場 駆ける・面・文句	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北川柳会	7日(土)13時開場 普通・加減・リスク・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	7日(土)14時締切 極・凭れ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 池 森子
川柳塔 まつえ	7日(土)13時45分締切 空(そら)・深い・アウト ほそほそ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 錦織 禮子
倉吉川柳会	7日(土)14時締切 カーブ・箔・貰う	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民川柳会	8日(日)13時30分締切 人気・海・動く・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
川柳塔 わかやま 吟社	8日(日)14時10分締切 兼題=願・染める・味噌 課題吟=兄・弟	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫
西宮北口川柳会	9日(月)14時締切 鼻・凹む・イメージ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	10日(火)14時締切 夢中・損・ふにゃふにゃ 自由吟	尼崎女性センター テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる川柳同好会	10日(火)13時30分締切 底・泳ぐ・「す」で始まる句	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき川柳会	13日(金)14時締切 欲しがらる・雲・安全・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	14日(土)14時締切 すっきり・駅・保険	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 さかい	14日(土)13時開場 あの世・胸・折り句(ベニス)	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳塔 打吹	14日(土)13時締切 波・守る・並べる	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光

柳界展望

★川柳グループ草原50回記念大会同人秀句
僕らの時代がカラコンコロと逃げて行く

新家 完司

★交差点5周年記念句会は5月8日(火)交野ゆうゆうセンターにて開催。参加者は96名。同人の秀句。出会ったんだもの私の半分と 居谷真理子

★第23回時の川柳交歓川柳大会は、5月13日兵庫県民会館で180名の出席を得て開催。同人の天位

夢の跡一杯落ちている日記 堀 正和

兵庫県川柳協会賞

神戸川柳協会賞

小島 蘭幸

★大橋政良氏(同人・砂川市)は、第23回あきあじ賞を受賞。

切り捨てた過去が無言

★小沢淳氏(同人・札幌

市)は、5月6日あきあじ吟社第16回黙朗忌川柳大会で、第24年度黙朗賞を受賞。

☆樺 嶺志氏(本名松尾稔・誌友・愛知県)は春の叙勲で瑞宝大綬章を受賞した。

☆新家完司氏(副主幹・鳥取県)は、山陽新聞カルチャープラザ「川柳講座」の講師を5月から務める。

◇京都塔の会は24年4月、会長・都倉求芽氏から榊本宏子さんに交代した。

▽新誌友紹介△

宮松 律

河内長野市

紹介者

北田 元一

奈良市

紹介者

新同人紹介

おおくほま 大久保 眞澄

楓葉・みつ子・恭昌・浩二推薦

5月号 上段5行目

開運を賭けておとこの作業服の作者は 福岡 石田 耐さんでした。

お詫びして訂正します。

訂正

紹介者

古久保和子

宮野みつ江

岩佐ダン吉

鈴木いさお

荒木 郁子

水野 黒兔

渡邊 修

坂上 淳司

宇賀 史郎

安土 理恵

大浦 初音

長浜 美龍

井上 龍

高田美代子

小林 利子

除△

○6月号

上段17行

目「一年をこの日のため

の祭りバカ」P8上段

17行目「ありがとう生き

てただけで満点だ」は作

者の申し出により削除。

常任理事会

6月7日(木)

①第18回川柳塔まつり関

連②賞選者③高野山合

祀祭日程④定例確認事項

⑤各部報告事項⑥その他

次回

7月6日(金)

田付 綱枝

長浜 美龍

井上 龍

藤井寺市

'12 尼崎川柳大会

日時 8月25日(土) 13時締切
 場所 兵庫県立・ピッコロシアター
 会費 1500円(句集進呈)
 兼題 (各題2句)

「効 く」 古今堂 蕉子 選
 「どっぷり」 嶋澤 喜八郎 選
 「予 感」 大森 一甲 選
 「賑やか」 西 美和子 選
 「夏」 前川 千津子 選
 「微妙」 長浜 美籠 選

懇親宴 4000円

連絡先 尼崎川柳協会事務局
 山田 耕治
 TEL.06-6491-1612

主催 尼崎川柳協会

第43回 奈良新聞川柳大会

日時 7月22日(日) 10時開場
 場所 奈良県文化会館 小ホール
 席題 「 」 萩原 三四郎 選
 宿題 「思 惑」 坊農 柳弘 選
 「ゼ ロ」 松田 俊彦 選
 「鏡」 牧浦 完次 選
 「耕 す」 鶴本 むねお 選
 「高い」 阪本 高士 選
 「再び」 西川 國治 選
 「水」 田中 新一 選

各題2句 出句締切 11時30分

会費 3000円(昼食・発表誌含む)
 欠席投句 500円同封左記へ
 〒630-8044 奈良市六条西3-13-37
 大楠 紀子 宛

締切 7月10日(当日消印有効)

主催 奈良新聞社

第30回記念 夜市川柳大会

とき 7月31日(火) 10時半開場
 ところ 堺総合福祉会館 5F
 事前投句 (ハガキに2句) 7月25日まで
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3

河内 天笑 宛
 「ようこそ」 河内 天笑 選
 (出席予定者に限る)

「拍 手」 (鳥取) 倉益 一瑤 選
 「近 い」 (阪南) 日野 愿 選
 「届 く」 (松江) 三島 崧丘 選
 「ノック」 (和歌山) 古久保和子 選
 「動 く」 (鳥取) 両川 無限 選
 「素直」 (和歌山) 武本 碧 選
 「出来る」 (米子) 政岡未延子 選
 「半分」 (堺) 河内 月子 選
 「ハイ」 (大阪) 谷口 義 選
 「今」 (橿原) 居谷真理子 選
 (各題2句) 出句締切 12時30分

第59回 八尾市民川柳大会

とき 8月26日(日) 正午会場
 ところ 八尾文化会館 5F
 レセプションホール

会費 1500円(作品集・鉢植花)
 宿題 (各題2句) 締切 13時

「香」 山野 寿之 選
 「輪」 居谷 真理子 選
 「無」 みぎわ はな 選
 「小」 岩佐 タン吉 選
 「人」 植野 美津江 選
 「数」 濱邊 稲佐嶽 選
 「自」 土田 欣之 選

問い合わせ先 土田 欣之
 TEL.072-992-4934

主催 八尾市民川柳会

暑中お見舞申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや4F

投句先 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子



河	亀	株	片	長	緒	江	梅	上	市	伊	石	足	浅	秋	奥	西
井	岡	元	山	川	方	島	澤	垣	坪	勢	原	立	野	元	田	口
庸	哲	玲	哲	美	勝	盛	キ	武	歳	房	て	み	い			
佑	子	子	忠	夫	子	弘	夫	ヨ	ミ	臣	毅	子	茂	子	る	子
																え

春	西	難	七	長	富	都	谷	田	竹	酒	小	黒	蔵	久	木	北
城	内	波	反	浜	山	倉	中	山	田	林	田	田	田	保	村	野
年	朋	伯	順	美	ル	求	祐	章	千	浩	わ	能	光	千	貴	哲
代	月	備	子	籠	子	芽	康	子	賀	子	司	こ	子	子	代	子
																男

両	山	山	山	山	山	山	丸	松	牧	堀	古	藤	藤	藤	福	
川	本	田	田	崎	崎	口	山	下	渚	川	本	岡	井	島		
無	義	婦	耕	武	君	光	一	比	富	正	奮	り	宏	弘		
限	子	美	治	彦	子	久	之	志	喜	和	水	直	こ	造	子	

暑中お見舞申し上げます

川柳塔すみよし

会長 鶴田 遠野

大谷	大隅	大久保	大川	大内	榎本	榎本	江島	内田	魚住	岩崎	井丸	板尾	石丸	石橋	浅井
篤子	克博	のん子	桃花	朝子	舞夢	日の出	谷勝弘	志津子	順子	公誠	昌紀	岳人	正太郎	直子	公平
田口	柴本	柴本	澤田	阪井	坂	古今	吉川	北村	川端	川島	川口	河井	奥村	奥田	大西
和代	ばっは	太郎	定子	美世子	裕之	堂蕉子	哲矢	賢子	一步	吉太郎	とし子	庸佑	五月	チエコ	晴雄
山本	山根	矢倉	森松	森松	宮本	宮崎	堀田	坊農	藤島	福岡	西村	長浜	中尾	中井	鶴田
半銭	妙子	五月	芳香	まつお	かりん	シマ子	温子	柳弘	たかこ	末吉	りつえ	美籠	伸子	萌	遠野

例会 毎月第4土曜日
但し会場の都合で変更になる場合もあります

暑中お見舞申し上げます

川柳塔きやらぼく

会長 政岡 未延子

会 員 一 同

事務局 〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13 政岡 未延子
TEL 0859-34-1729

暑中お見舞い申し上げます

川柳あまがさき

藤岡	山本	井上	堀	加川	軸丸	西部	藤田	古川	酢谷	村山	松村	木村	奥村	松下	山田	西内	長浜
りこ	幸香	龍	正和	靖鬼	勝巳	イサミ	雪菜	奮水	亀与子	あかり	里江	美代子	五月	比ろ志	耕治	朋月	美籠
大浦	上田	大久保	中井	渡辺	大岸	上垣	谷	北野	扇野	片山	吉井	高野	小山	富田	都倉	小熊	矢野
初音	ひとみ	泰子	茂幸	柳明	和子	キヨミ	祐康	哲男	よしひさ	かずお	菜々子	政江	紀乃	美義	求芽	江美	野薫

暑中お見舞い申し上げます

あかつき川柳会

会長 川端 一步

会員 一同



鶴杉忍・第2回

全国誌上川柳大会

◆課題と選者(各題2句 共選)

「腕」 天根 夢草 三宅 保州

「生きる」 西出 楓 楽 富士 慕情

「地球」 田中 新一 大内 朝子

自由吟 川端 一步 植竹 団扇

◆投句料 1000円(切手はご遠慮下さい)

◆投句締切 2012年7月31日(火)消印有効

◆投句先 〒583-0037 藤井寺市津堂1-7-25

鈴木 いさお宛

暑中お見舞い申し上げます

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

会員 一同

事務局 〒680-0874 鳥取市宮長205-45

萩原みゆき

TEL 0857-53-1185

月例会：毎月第4日曜日 13:00～

会場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

暑中お見舞申し上げます

竹原川柳会

会長
監査
會計

小島蘭幸

時広一路

岩本笑子

古田太虚

森井菁居

石原淑子

山内房子

ほか会員一同

暑中お見舞申し上げます

鳥取県川柳作家協会

会長 森山盛桜

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180

TEL.0857-82-1491

第36回 鳥取県川柳大会

お出でをお待ちしております。

とき 平成24年10月14日(日) ところ さざんか会館

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

高杉千歩	佐々木満作	小谷集一	古今堂蕉子	小谷滋彦	奥田みつ子	太田昭	大久保真澄	大川桃花	榎本舞夢	榎本日の出	岩本浩二	井上照子	阿部紀子	安土理恵	浅井公平
	渡辺富子	米田恭昌	吉田知之	横山捷也	山本希久子	前川善之	藤井正雄	原田すみ子	西出楓楽	中村叡子	天正千梢	寺井弘子	津村志華子	辻内げんえい	谷口義

暑中お見舞い申し上げます 平成24年 盛夏

川柳塔さかい

会長 河内 天笑

島田誠一	澤井敏治	小寺竜之介	柿花和夫	大谷篤子	大久保のん子	梅木澄空	山本進	矢倉五月	升成好	樋口冬虹	西内朋月	永田山彦	田部和幸	島尾政男	齋藤さくら	源田八千代	奥時雄	太田扶美代	榎本舞夢	岩崎公誠
------	------	-------	------	------	--------	------	-----	------	-----	------	------	------	------	------	-------	-------	-----	-------	------	------

和田つづや	山本半銭	村上玄也	伏見雅明	原清晋	中野健吾	徳山みつこ	高木世紀子	志田千代	古手川光	河内月子	荻野象山	太田としお	榎本日の出	米澤俣子	矢野梓	宮本かりん	日野愿	西村りっえ	中崎深雪	遠山唯教
-------	------	------	------	-----	------	-------	-------	------	------	------	------	-------	-------	------	-----	-------	-----	-------	------	------

暑中お見舞い申し上げます

大阪川柳人クラブ

会員一同

会長 磯野 いさむ

副会長 板尾 岳人

幹事長 板野 美子

竹森 雀舎

事務局 伊達 郁夫

会計 中川 隆充

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861
<http://www.yukawa.or.jp>

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 竹 治 ちかし
会 員 一 同

事務局 〒693-0006

出雲市白枝町423 伊藤玲子方
TEL 0853-23-3200 FAX 0853-23-3201

8月15日・16日

納涼 デカンショ祭

丹波路へどうぞ

川柳ささやま 代表 遠山可住

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会長 前 たもつ

会員 一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）
原則として第4月曜日・6時から（8時終了）

暑中お見舞申し上げます

関	脇	吉	金	板	早
本	田	田	子	山	川
かつ	雅	幸	美	ま	遡
子	美	子	千	み	行
			代	子	

川柳茶ばしら

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14

川上大輪方

電話・FAX 073-462-7229

暑中お見舞申し上げます

ほたる川柳同好会

水野黒兎	小牧信男	宮田輝	藤原桂子	栗田久子	江見清子	唐住見清	笠田幹治	松尾美智代	池田純子	中島公子	西村康子	太田扶美代
藤澤長一	高嶋螢勝	田中雪柳	米原雪童子	寺井柳童子	多田契童子	中山春代	神野字乃子	貝塚正子	荒木郁子	樋口順子	上田陽子	

句会 第二火曜日 午後一時より
 勉強会 第四火曜日 午後一時より
 場所 豊中市蛭池公民館

暑中お見舞申し上げます

川柳塔みちのく

主幹 齊藤 劔	副主幹 小寺 花峯	相談役 森中恵美子	顧問 波多野五楽庵	理事 岩渕 黙人	高橋 岳水	福村 美鈴	高橋 洋子	肥後和香子	監事 高森 一呑	小枝ふさゑ	会計 福士 慕情	ほか同人一同
---------	-----------	-----------	-----------	----------	-------	-------	-------	-------	----------	-------	----------	--------

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会長 伊達 郁夫

会員 一同

暑中お見舞

申し上げます

熊本川柳会

高野 宵草

永田 俊子

岩切 康子

暑中お見舞申し上げます

わかあゆ川柳会

石田 清泉

松本 はるみ

河原 恵美子

武島 千代枝

菅田 勝子

松本 英子

(聖子)改

渡部 好栄

奥谷 澄子

福岡 博利

暑中お見舞申し上げます

サークル 檸檬

吉	山	山	山	山	松	前	西	西	西	長	古	久	片	奥	太	井	浅
村	本	本	本	口	尾		村	出	口	浜	今	保	岡	田	田	丸	野
久	義	希	加	光	美	た	哲	楓	い	美	蕉	千	智	み	扶	昌	房
仁	子	久	お	久	智	も	夫	楽	わ	籠	子	代	恵	つ	美	紀	子
雄		子	里		代	つ			ゑ				子	子	代		

暑中お見舞申し上げます

豊中もくせい川柳会

会員一同

暑中御見舞
申し上げます

六甲川柳会
メダカの学校

世話人

伊勢田

毅

黒田

能

子

山口

光

久

山口

美

穂

両川

無

限

暑中お見舞い申し上げます

川柳さんだ

会員一同

例会：毎月第3火曜日 13時・三田市中央公民館

山 樋 仁 坂 岩 井
口 口 部 本 崎 上
高 輝 四 蜂 勝
明 夫 郎 朗 實 視

川柳塔唐津

暑中御見舞
申し上げます

暑中お見舞い申し上げます

はびきの市民川柳会

会長 塩満 敏 会員一同

和歌山県川柳協会

会 長 三宅 保州

副 会 長 川上 大輪

[お問い合わせ先] 事務局長 古久保和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17

TEL 073-423-8930

暑中お見舞い申し上げます

和歌山三幸川柳会

主 幹 三宅 保州

理 事 長 木本 朱夏

副 主 幹 古久保 和子

副 理 事 長 喜田 准一

理 事 田中 みね

” ” ” ” 玉置 当 ね

” ” ” ” 川上 智 代

” ” ” ” 楠見 章 三

” ” ” ” 武本 碧 子

事務局 〒640-8111

和歌山市新通七-一七

TEL 073-423-8930

古久保 和子 方

例会 毎月第四土曜日 午後一時

和歌山商工会議所

(和歌山市役所西隣)

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋 芳山

同人 一同

連絡先 〒690-0001 松江市東朝日町206-7

石橋 芳山

TEL. 090-2003-5846

皆様ご自愛くださいませ

川柳藤井寺
川柳みささぎ

代表 高田美代子 会員一同

暑中お見舞申し上げます

京都塔の会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

川柳塔なら

加	飛	安	渡	居	中	高	森	江	坊	中	米	大
門	永	土	辺	谷	西	畑	中	島	農	原	田	内
萌	ふ	理	富	真	賛	お	博	勝	柳	比	恭	朝
子	り	恵	子	理	郎	た	一	弘	弘	呂	昌	子
子	こ			子		か				志		

会員一同

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL 06 (6303) 7297

安井	森口	本田	藤井 満洲夫	内藤	伊達	竹森	黒川	大堀	碓氷	足立	世話 人	代 表
英華	美羽	智彦	光枝	郁夫	雀舍	孤遊	正明	祥昭	淑子	磯野 いさむ		

◎会場 ホテルコムズ大阪 地下鉄御堂筋線中津駅④番出口直結

暑中お見舞申し上げます

岩 美 川 柳 会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115
TEL 0857-72-0762

山 下 蟹 郎

暑中お見舞い申し上げます

鳥 取 県 川 柳 作 家 連 盟

会 員 一 同

連絡先 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方 春 木 圭 一 郎
TEL 0857-24-2834

暑中お見舞申し上げます

河内長野

長柳会

講師

板尾岳人

会員有志

水谷正子
村上直樹
山岡富美子
坂上淳司
黒岩靖博
山室光弘

暑中お見舞い申し上げます

エイシス堺

講師

河内天笑

榎本日出
太田としお
奥田時雄
齋藤さくら
高木世紀子
中野健吾
伏見雅明
升成雅好
村上玄也

暑中お見舞申し上げます

米子住吉川柳会

会員一同

〒683-0804 米子市米原5-1-3-304

竹村紀の治

暑中お見舞申し上げます

川 柳 塔 社

名誉主幹
主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 主 幹
副 理 事 長
副 理 事 長
副 理 事 長
常 任 理 事

河内天笑 小島幸 西出蘭 川上楓 新家大輪 河内月子 木本朱夏 鶴田遠野 居谷真理子 鴨谷瑠美子 久保田千代 黒田能子 鈴木いさお 長浜美籠 松原寿子 村上直樹

江島勝弘 柿花和夫 古今堂蕉子 佐々木満作 坊農柳弘 水野黒兔 山岡富美子 山口光久

川柳塔社常任理事会

編集後記

★恩師の死 その夜眠し
とも眠し 蕙風

★今月の柱は小池正博氏の「川柳と俳句」麻生路郎の辞世をめぐって。路郎の辞世の句から書き起こし、川柳と俳句の相違点にも触れた一級の麻生路郎論である。小池氏には昨年五月にも「菠蘿草が伸びるとき」をご執筆頂いている。

★その玉文を「六大家のひとり」として神格化するのでなく、その人間像を深くとらえ、川柳の未来へ向かって更に前進していくことが後からやってみようか」と題ではないでしょうか」と結んだ小池氏の課題が、今月号に見事に継承されている。

はいうに及ばず文芸一般の批評・評論を毎週、精力的に発表されており、教えられる。

★「麻生路郎読本」を音訳された岩崎千佐子さんは、感謝の言葉もない。膨大な時間と労力をかけての作業には、人知れぬご苦労に涙した日も……と想像する。崇高な奉仕の精神の賜物であり、川柳史に残る快挙であると心からお礼申し上げます。

★大阪市北区の「天五中崎商店街」にある古書店「青空書房」、店主坂本健一さんは八十八歳。毎週日曜日の定休日のシャッターに一枚のポスターを貼る。「本を読むことは自己への投資」「青春とはたくさんの本を読みたおすパッションだ！」などの言葉に添えた手描きの絵が評判を呼び、朝日新聞夕刊一面に大きく取り上げられたことも。

ひとこと

聖書の言葉

皆さんが句にも慣用的に詠んでおられる言葉で、聖書に基づくものがたくさんある。ここでは「目から鱗が落ちる」を復習したい。この出典は、新約聖書・使徒言行録第九章である。イエスの教えに従う者を迫害していたサウロがダマスコの門外で、天からの光に倒れた。「サウロ、なぜ私を迫害するのか」と呼びかけるイエスの声を聞き、何も見えなくなった。三日の後、弟子がイエスに命じられてサウロを訪ね、「主は、あなたが元どおり目が見えるようになり、また聖霊で満たされるように」と、わたしをお遣わしになったのです」と告げると、「たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになりました」(十八節)

サウロの回心として知られる劇的な場面である。このあと、彼はイエスの教えを命懸けで伝道する使徒パウロとなっている。

(澤井敏治)

子さんとも親交がある。狭い店の隅にさりげなく置かれた小さな椅子は、筒井康隆さんのご母堂から贈られたもの。その椅子に座った常連客の多くが出世していったとか。過日、その椅子に座った。ほっこりと温もりがあった。出世はともかく、何か良いことがあるかも知れない。

(朱)

▼編集の業務に携わり沢山の川柳を拝見させていた

▼時間をかけた句が選に漏れ、すーと浮かんだ句が入り、選したり面白いものだとつくづく思います。だから川柳は楽しいのでしよう。

▼先輩も初心者も平等に、抜けたら抜けたかたたりしながらもあちこちの句会にいそいそと出掛けて、おしゃべりしたり、飲んだり食べたり、川柳はメリーゴーランドです。せいぜい長生きをして川柳を楽しむつもりです。

(能)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(9月号) 地名

市都
道府 姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「継ぐ」(7月15日締切)

9月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

初歩教室 「雑誌」(3句) 鈴木公弘担当
 一路集 (3句) 「曲線」(弱) 今石橋 今石橋 今石橋 今石橋
 檸檬抄 (2句) 「継ぐ」(池) 福士森 福士森 福士森 福士森
 愛染帖 (3句) 新家完司 新家完司 新家完司 新家完司
 水煙抄 (8句) 川上大輪 川上大輪 川上大輪 川上大輪
 川柳塔 (8句) 小島蘭幸 小島蘭幸 小島蘭幸 小島蘭幸

9月号発表 (7月15日締切)

10月号
 檸檬抄 「限界」
 一路集 「平気」「札束」
 初歩教室 「おっとり」「ぼろぼろ」

本社7月句会

とき 7月6日(金) 13時開場・14時締切り
 会場時間・締切時間を変更しています。ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし「路郎のユーモア」 木本朱夏
 兼題 「煽る」 水野黒兎
 「トリック」 古今堂蕉子
 「奥の手」 森村美花
 「今更」 三宅保州
 「萎む」 谷垣郁郎
 小島蘭幸選
 会費 1000円 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

本社8月句会
 7日(火) 午後1時から
 兼題「勘」「きつと」「曖昧」
 「保存」「気取る」

第31年度 夜市川柳募集

第2回「大阪」岩田明子選
 ハガキに3句 7月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料92円)
 半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)
 二〇二二年(平成三十四年)七月一日発行
 発行人 小島和幸
 編集人 木本朱夏
 印刷所 美研アト
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
 花野ビル201号室

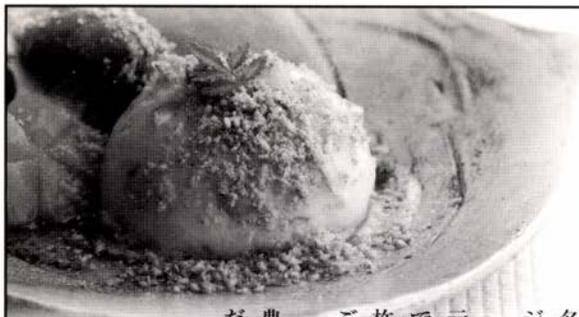
発行所 川柳塔社
 電話 〇六〇六七九一三四九〇番
 振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

つぎま

長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市水上前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版 『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版
514頁

頒価 三〇〇〇円
(郵送料共)

目次

- 麻生路郎アルバム
- 麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
- 麻生路郎文集・麻生路郎語録
- 麻生路郎物語（東野大八）
- 麻生路郎の人と作品
- 麻生路郎作品「福寿草」
- 麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
- 麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

電話 06-6779-3490
花野ビル201号

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番
川柳塔社